

2007 年 6 月 7 日(木曜日)

【1. ハーバード大学から】

みなさん、こんにちは。

京都大学附属図書館・江上敏哲です。



私はいま、ハーバード大学にきています。京都大学附属図書館とハーバード・イェンチン図書館との協議に基づく「図書系職員海外調査研修」のため、2007年4月から2008年3月までの1年間、visiting librarianとしてここに滞在する予定です。

ハーバード大学は、アメリカで最も歴史が古い、規模が大きい、というだけではなく、世界中のあらゆる国・地域から人々が集まる”学問の街”です。また、その図書館もアメリカで最初とされ、現在は全学で約 90 館に 1500 万冊の図書が収められています。大学としても図書館としても、学ぶべきことの多いところ です。

また、このハーバード大学があるケンブリッジ市は、ボストン（マサチューセッツ州）のすぐお隣に位置しています。MIT（マサチューセッツ工科大学）をはじめたくさんの大学・カレッジがあるだけでなく、ボストン美術館等の文化施設も豊富です。ボストンは、ピューリタンたちによって築かれたアメリカ発祥

の地としても有名で、赤レンガの建物が並ぶ古い町並みと落ち着いた雰囲気は、どこかしら京都のそれに似たものがあります。

この「ハーバード日記」では、日常の業務体験や調査研究、当地の人々との交流を通して、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを、かたい話題・やわらかい話題とりまぜながらお伝えしていければ、と思っています。

写真は、ハーバード大学のメモリアルホール。南北戦争で亡くなった学生たちの慰霊のため、1874年に建てられたものです。

Harvard University

<http://www.harvard.edu/>

2007 年 6 月 7 日(木曜日)

【2. イェンチン図書館】

私が現在お世話になっている Harvard-Yenching Library=イェンチン図書館について、ご紹介します。

イェンチン図書館はハーバード大学内の東アジア研究専門の図書館です。中国、韓国のセクションとともに、日本のセクションもその中にあります。

1879 年に中国語教育が、1913 年に日本学研究がハーバード大学内でスタートし、それを機に中国語・日本語図書の収集・整理が始まりました。1928 年、ハーバード・イェンチン研究所が設立され、研究所内図書館として現在のイェンチン図書館が設けられました。「イェンチン」は漢字で「燕京」と書きます。これは北京の古名で、当時この研究所は燕京大学（現在の北京大学）にも設けられました。

設立当時約 6000 冊ほどであった当図書館の蔵書は、現在約 115 万冊。日本語図書だけでも 30 万冊に及びます。これは米国内でも議会図書館、UC バークレーに次ぐ第 3 位の蔵書数です。ちなみに、イギリスのオックスフォード大学にある日本語図書は約 10 万冊、大英図書館約 8 万冊ですから、それらと比べてもかなりの規模であることがうかがえます。古典籍資料も豊富で、約 14000 冊の和古書が所蔵されています。

さらにこのイェンチン図書館は「イェンチン分類」でも有名なところです。これは、設立当時の館長・裘開明が独自に開発した、中国語・日本語資料整理のための分類法です。以来、このイェンチン図書館においてだけでなく、アメリカ国内やヨーロッパの多くの東アジア研究図書館で、幅広く採用されてきました。現在は、アメリカ国内では LC 分類（米国議会図書館）を採用するところが多く、当のイェンチン図書館も約 10 年前にイェンチン分類から LC 分類に変更しています。

なおイェンチン研究所は、ハーバード大学キャンパスに隣接してはいますが、組織的にも経済的にもハーバード大学からは独立しているとのこと。それから有名なライシャワー日本研究所もすぐ近くにあります。組織としては別であり、別途資料室が設けられています。このあたりについては、追って詳しく紹介していければと思います。



写真は、イェンチン研究所の外観。

Harvard-Yenching Library

<http://hcl.harvard.edu/libraries/#hvl>

Harvard-Yenching Institute

<http://www.harvard-yenching.org/>

2007 年 6 月 11 日(月曜日)

【3. 司書採用候補者の公開プレゼンテーション】

5/7、Harvard College Library の新しい Associate Librarian の候補者の方が、公開プレゼンテーションを行なうというので、拝聴してきました。

Harvard College Library (=HCL) というのは、ハーバード大学内の主要ないくつかの図書館が集まってできている図書館グループです。このグループにはトップに 1 人の Librarian がいて、その下に 4 人の Associate Librarian (それぞれ担当がある) ポストが設けられています。そのうちのひとつ、research & instruction 担当のポストに空きがあり、公募が行なわれていました。学内外からの応募の中から 3 人の候補者が選ばれ、その 3 人がそれぞれ別の日に時間を設けて、図書館運営に対する自分の見解や戦略を述べる、というのが今回のこの公開プレゼンテーションです。

今回私が拝聴した候補者の方は、ウィスコンシン州にある大学の現・図書館長の女性でした。” Meeting Challenges of Academic Libraries : Innovation and Balance ” という題目のそのプレゼンテーションは、PowerPoint の使い方が効果的で、話し方も物腰柔らかく、感じのいいものでした。問題解決への姿勢も前向きで、マイナス要因をマイナスに感じさせない不思議さを覚えました。

このプレゼンテーションには、HCL 内のスタッフ誰でもが自由に参加できます。ただ参加して候補者の話を聴くだけ、というわけではなく、その候補者のプレゼンテーションの内容や質疑応答の様子などを参考に、参加者たちが自分なりの評価をコメントとしてしたため、提出用紙や e-mail など担当部署に送るのだそうです。もちろん” 投票 ” というわけではありませんが、そうやって集積された現職スタッフの評価が、採用不採用決定の際に何らかの判断材料となるであろう、ということでした。また、公開プレゼンテーションだけではなく、学内の各種担当者との懇談会などもあり、ランチ・ディナーも含め 2 日間ずっとスケジュールが組まれています。その時々での発言・意見交換も何らかの評価対象となるのでしょうか。そのようなプロセスでトップに近い人が選ばれるのであれば、多少自分と考えに違いがあったとしても、安心して仕事ができる気がします。

このような公開プレゼンテーションが事前に課せられるのは、トップに近い役職の人だけではなく、サブジェクト・ライブラリアンなど、すべての専門職ポストで規模の大小はあれ行なわれるそうです。

Harvard College Library

<http://hcl.harvard.edu/>

2007 年 6 月 11 日(月曜日)

【4. ALA2007 の Web2.0 事情】

6 月下旬、ALA（アメリカ図書館協会）の 2007 年年次大会がワシントン DC にて開催されます。アメリカ各地からライブラリアンが集まり、たくさんの講演、分科会、その他イベントが行なわれるこの大会に、私も泊りがけで参加する予定です。

その準備のため、ALA のホームページ (<http://www.ala.org/annual/>) などを使って情報収集をしているところなのですが、いわゆる Web2.0 として普及しつつある様々なツールが用意されていて、なかなか便利です。今回はそのいくつかをご紹介します。

- ・ ALA2007 用の wiki

<http://wikis.ala.org/annual2007/>

大勢の人々によって編集可能な Web ページ・wiki を使った、情報共有サイト。登録&ログインすれば自分の持っている情報を書き加えることができます。レストランや観光などの周辺情報や、最新情報・現状報告などのアップデートに力を発揮しそうです。

- ・ Conference Roomies Wiki

<http://confroomies.pbwiki.com/ALAWashingtonDC>

ワシントン DC の高いホテル代を少しでも節約するために、大会参加者同士でルームメイトを公募しあうための専用 wiki。

- ・ HitchHikr Page for ALA 2007 Annual Conference

http://hitchhikr.com/index.php?conf_id=212

ALA2007 に関する（「ala2007」というタグをつけた）blog 投稿記事や Frickr での投稿写真を自動的に収集してくれているサイト。会期中はたくさんの blogger たちの投稿記事がリアルタイムで並ぶと思われます。

- ・ Event Planner

<http://12.153.51.194/>

ALA2007 参加者なら誰でも使える、自分用のスケジュール管理サイト。自分の ID とパスワードでログインし、ALA が用意したイベント・スケジュールのデータベースから自分の興味のあるイベント・講演・分科会をチェック&保存すると、それらをカレンダー形式で見せてくれます。しかも、複数のセッションが重なってしまっている箇所は赤く表示されて一目でわかるので、とても便利です。

- ・ Google MyMap

<http://maps.google.com/>

これは ALA が用意したツールではありませんが、私が個人的に使っているものです。自分の行くべき会

場、ホテル、日程中に訪問する予定の図書館等を、Google Map 上にマーキングして保存しておくことができます。

もちろん、すべてのツールがすべての人にとって便利かどうか、効果的に運営していけるかどうかはわかりませんが、それでも積極的に試してみる、取り入れてみるという姿勢は、我々も真摯に見習わなければならないところだと思います。

ALA

<http://www.ala.org/>

ALA2007 年次大会（ワシントン DC）

<http://www.ala.org/annual/>

2007 年 7 月 18 日(水曜日)

【5. ALA2007 レポート】

6 月 21 日から 28 日まで、ALA（アメリカ図書館協会）の 2007 年年次大会がワシントン DC にて開催されました。約 3 万人のライブラリアンが集まり、約 400 の講演、分科会、イベント等が行なわれました。同時に 40 を超える数の分科会が行なわれる時間帯もあり、どれに参加するかを決めるのはかなり難しいものでした。



私が参加した分科会のうち、いくつかについてご報告します。

- 「It's Showtime for Instruction Librarians: The Making of Short Films for Marketing and Instruction」

情報リテラシー教育活動に自作の動画・映像を取り入れている図書館による報告です。紹介・発表されたのは、Valdosta State University, Odum Library Media Service の作品と、Indiana University South Bend, Franklin D. Schurz Library の作品・知見でした。

- ・ Valdosta State University, Odum Library のショートフィルムのページ

http://books.valdosta.edu/media/library_films.htm

- ・”Crime & Punishment”

http://cinema.valdosta.edu:8080/ramgen/rdevane/library_videos/crime_punishment.rm

(注：最初の1分ほど無音の状態ですが、その後スタートします。)

”情報に関する罪”で投獄された女子学生の、言い訳と苦悩、裁判の様子を描いた、フィクション仕立ての動画です。学生たちが軽はずみな気持ちで行ないがちな盗用、剽窃、安易なコピー&ペーストなどに警鐘を鳴らす目的で作られた作品です。脚本がしっかりと練られていて、エンターテインメント性が強く、学生に受け入れられやすい作りになっています。会場のライブラリアンたちからも繰り返し爆笑が起きていました。

ちなみに日本では、亜細亜大学がかなり以前から作成、Web 公開している [図書館ツアービデオ](#) があり、こちらでもかなり作りこまれています。もちろん、もっと手軽または簡潔な動画は、国内・海外を問わず多数公開されています。

- ・ Indiana University South Bend, Franklin D. Schurz Library の今分科会用ページ

<http://www.iusb.edu/~libg/ala/2007/LI/>

Indiana University South Bend のライブラリアンによる「Making movies @ IU South Band」という発表については、Powerpoint ファイルやその他の資料が上記のページで公開されています。

こちらで紹介された作品は、”Crime & Punishment”のようなエンターテインメント性の強いものではなく、スタンダードな内容のものです。

Boolean Operators

<https://www.youtube.com/watch?v=vube-ZcJFk4>

How to find and locate a book

<https://www.youtube.com/watch?v=1igbHJt3d6U>

実際のプランニングに関する話や、技術面の知見も上記ページで公開されており、実際に動画作成にとりかかろうとするにあたっては非常に参考になるのではないかと思います。また、学生のアンケート結果を見ると、説明のわかりやすさについて、「書架の本をどうさがすか」ではマイナス評価がなかったのに、「キーワードサーチとフレーズサーチの違い」ではマイナス評価がいくつかあった、ということがわかります。

- 「Wiking the Blog and Walking the Dog – Social Software, Virtual Reality, and Authority Everywhere」

Web ベース、特に Web2.0 と呼ばれる機能を有効利用したサービスについて、事例報告などが行なわれた分科会でした。ここでは Ann Arbor District Library の John Blyberg 氏による SOPAC の報告と、Norwich University の Meredith Farkas 氏のプレゼンテーションについて、ご紹介します。

- ・ Ann Arbor District Library の OPAC

<http://www.aadl.org/catalog>

- ・ John Blyberg 氏の blog と資料

<http://www.blyberg.net/>

<http://www.blyberg.net/files>

ミシガンの Ann Arbor District Library で構築・提供されている「SOPAC (SocialOPAC)」について、管理者の John Blyberg によるプレゼンテーションが行なわれました。(SOPAC については 2007.1.25 の Current Awareness を参照)

この SOPAC では、利用者が自分の ID で OPAC にログインし、書誌データにタグ・評価・コメントをつけたり、書誌データをコレクションしたりといったことが可能になります。おもしろいのは「目録カードへの書き込みができる」という機能で、画面に現れた目録カード風の画像の上に、自分で好きなコメントを入力することができます。(例) この他にも、表紙画像の表示、他館所蔵の検索、この本を借りてる人は他にどんな本を借りているのかの表示、などがあります。

Norwich University の Meredith Farkas 氏からは、「Tales from Outside of Public Libraries」というタイトルでのプレゼンテーションが行なわれました。

Tales from Outside of Public Libraries

<http://www.slideshare.net/librarianmer/tales-from-outside-of-public-libraries>

- ・ Meredith Farkas 氏の Web サイト

<http://meredith.wolfwater.com/>

「図書館以外の業界はすでに Web2.0 によるサービスをたくさん提供している。図書館にそれができないはずがない。」という趣旨のもと、図書館以外の業界及び図書館業界の両方から事例が紹介されました。Wiki による情報ベースの構築、blog による情報公開、フィードバック・リクエストの受付、flickr によるライブラリツアーなど。図書館での導入例がまだそれほど多くないものもありますが、どれも「情報を組織化しデータベースを構築する」「利用者からのフィードバックを受け付ける」「運営をガラス張りにする」といった、図書館にとって基本的な考え方に基づくものばかりであるということもわかります。

最後に、図書館業界以外の人、特に教育・IT 技術・ビジネス分野の人たちがどんなふうに Social Software を使っているか、どのような報告をしてくれているかに、耳を傾けることが重要である、ということが語られていました。個々の技術や機能が問題なのではなく、広くアンテナを張り、学ぼうとする姿勢、時宜・目的に応じて柔軟にそれらを採用する心構えが必要である、ということ学びました。

2007 年 7 月 18 日(水曜日)

【6. 日本からの情報発信・資料提供についての要望・意見】

6 月の ALA 年次大会参加とともに、ワシントン DC 周辺及びその旅程途中にある図書館・大学(Princeton University, University of Maryland, Library of Congress, National Library of Medicine, Freer Gallery of Art)をいくつか訪問・見学してきました。図書館の概要、利用実態、特色あるサービスなど、さまざまなことについてお話をうかがってきました。

今回はその中から特に、日本から発信されている学術情報・資料のあり方や入手について、いただいたご要望・ご意見をとりまとめたご紹介します。

- ・科研費報告書を、その大学の図書館で責任持って収集・所蔵・目録登録するようにしてほしい。役に立ち、依頼も多いのに、所蔵館がなかなか見つからないことが多い。その研究者・研究グループが所属している大学の図書館なのに、所蔵していない、情報が入手できないというのはおかしいのではないか。結局、その研究者の連絡先を探し、直接問い合わせで入手するというパターンが多い。

- ・データベースの使い勝手がよくなり、文献情報を知ることが容易になった分、逆に現物資料へ到達できない、入手できないことへの不便が目立つ。問い合わせをしても返事がいつまでも返ってこず、待たされた挙句に謝絶されることが多い。

- ・NDL のサービスがここ数年で飛躍的によくなって、とても感謝している。近代デジタルライブラリーは多くの人に利用されている。また Web を介しての ILL サービスも非常に助かっている。レファレンスを依頼したときも、とても丁寧かつスムーズに対応してもらった。

- ・雑誌資料の電子化について。日本の資料電子化は、他国（特に中国・韓国が国の威信をかけて行なっているのに比べて）かなり遅れている。必要な、需要の多い雑誌が電子化されず、そうでない雑誌ばかりが電子化されているように見える。できるものからとりあえず電子化するというのではなく、よく使われる基本的な雑誌を選別した上で計画的にやってほしい。

- ・医学部の図書館のように、本来古典籍資料をメインで取り扱う分野でない図書館が、所蔵している古典籍資料についてまったく整理されていない、情報を公開してくれないことが多い。

- ・日本の書誌データベースは、基本的にそのままコピーして使えるというわけではないが、参考にはなっている。著者名典拠情報が特に有用。逆に、同じ資料でも図書と雑誌でレコードが分かれていること、及び、件名が整備されていないのが難点。もちろん、OCLC などに収録されて利用できるようになれば非常に助かる。特に灰色文献・研究成果物などの、一般に流通していない資料について。

- ・データベースの契約について。日本の業者が作成・提供しているデータベースは、海外から契約するにあたって条件や規制が多い（または海外からの契約が考慮されていない）ほか、高額であるため、契約が極端に難しいことが多い。国内の情報資源を海外に広めるという姿勢が、他国（これも特に中国・韓国）が旺盛で積極的であるのに対し、日本は何故か消極的に思える。特に大学図書館で提供すれば、そのデータベースを使い慣れた学生は卒業後も企業・研究機関でも利用するようになるわけだから、需要を増やすチャンスであるということを理解してほしい。

2007 年 7 月 18 日(水曜日)

【7. Harvard Depository】

ハーバード大学には、学内の図書館が共同で利用している保存書庫“Harvard Depository”（HD）があります。6つの書庫・約1000万冊分の書棚から成るこの保存書庫は、大学のメインキャンパスであるハーバード・ヤードから西へ40kmほどの郊外に位置しています。

ここには各図書館の蔵書のうち、利用頻度の比較的低いものが納められています。とはいえ、決して“不要なものを追いやるための場所”という位置付けではなく、あくまでも「資料を長期間確実に保存すること」が第1のミッションです。そのため、紙に適した温度・湿度設定だけでなく、フィルム媒体専用のストレージ、UVカットの蛍光灯など、資料保存のための基本的な環境管理が徹底されています。

Harvard Depository

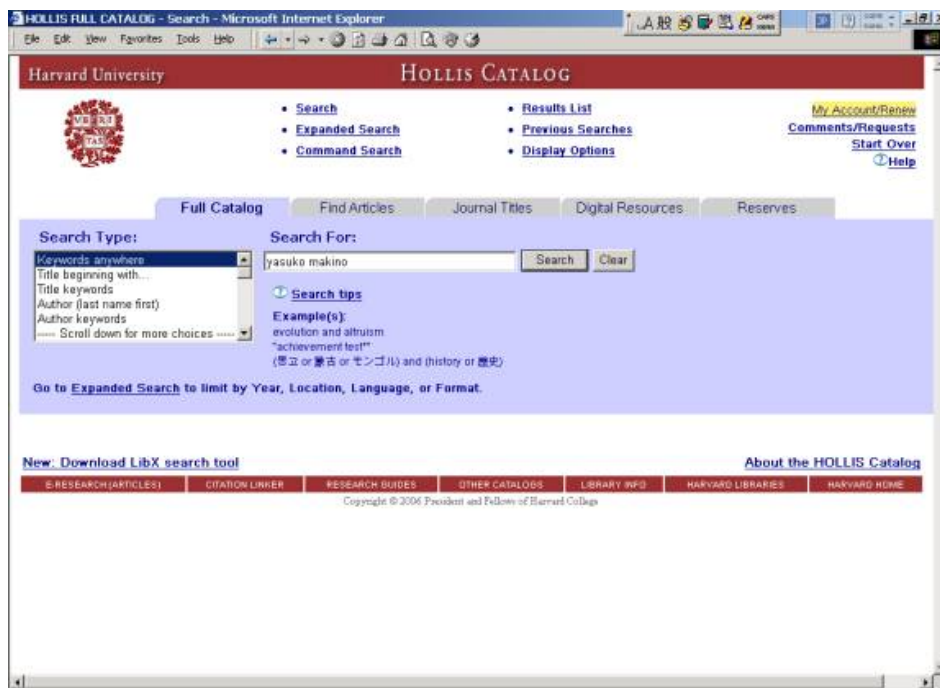
<http://hul.harvard.edu/hd/>

HDに収蔵されている資料を利用したいときには、ハーバード大学のOPAC（「HOLLIS」）から申し込むことができます。

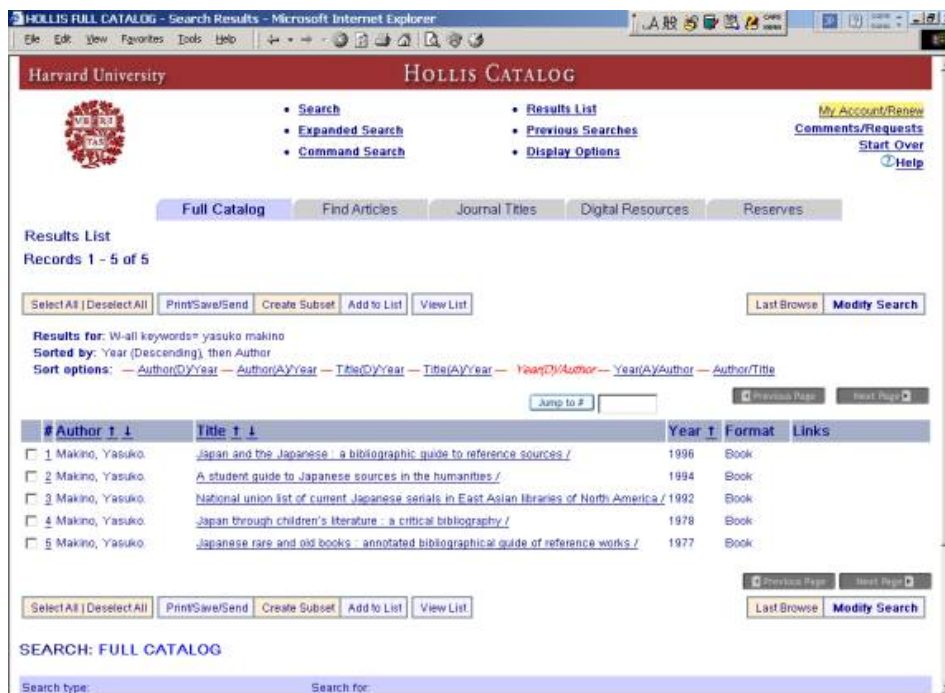
HOLLIS

<http://hollis.harvard.edu/>

(1)簡易検索画面でキーワードを入力。

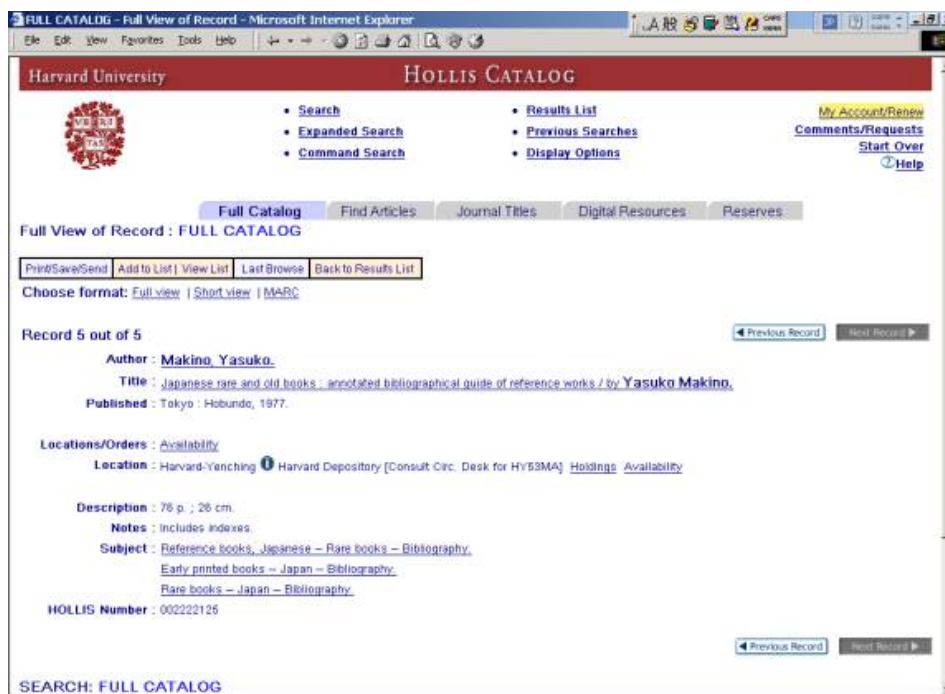


(2)結果一覧からひとつを選択。



(3)書誌詳細画面。

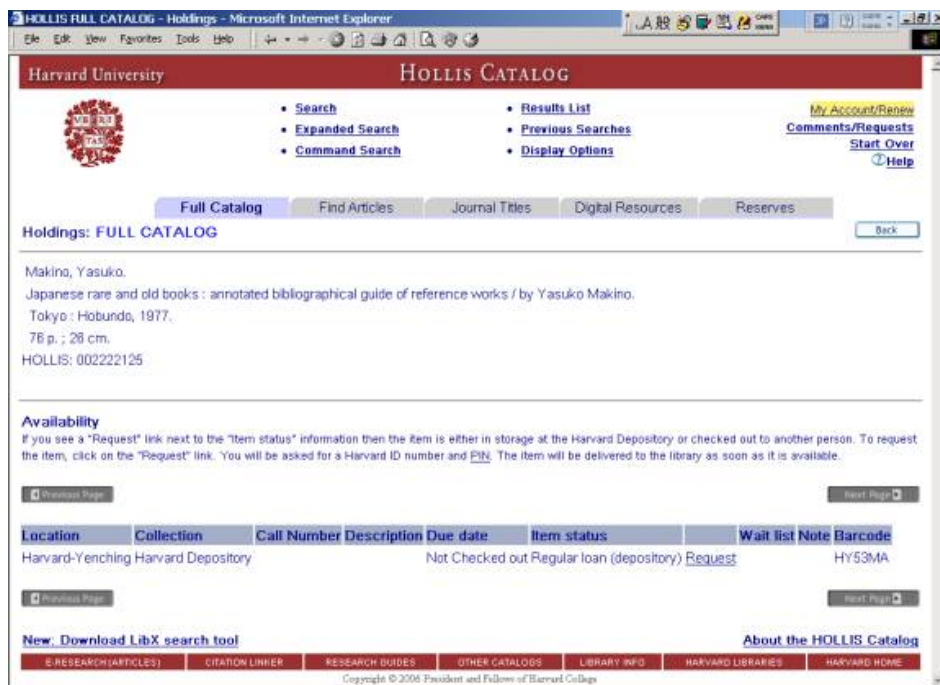
「Location」の欄に「この本は Harvard Depositoryにある」という所蔵情報が出ています。



ここで、「Availability」のリンクをクリックします。

(4)所蔵詳細画面。

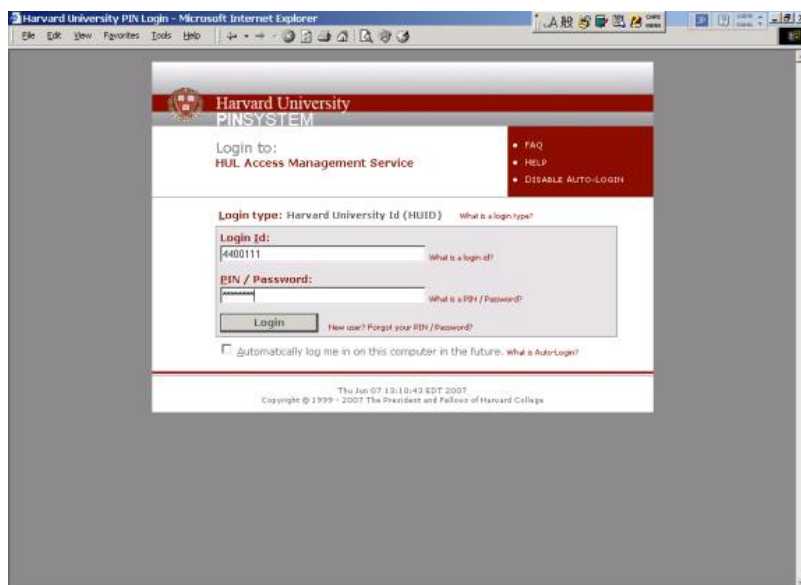
資料の所有者は「Harvard-Yenching」、置いてある場所は「Harvard Depository」、現在「借り出されていない」状態で、利用規則として「通常の貸出が可能」であることがわかります。



この本をリクエストするために、「Request」と書いてあるリンクをクリックします。

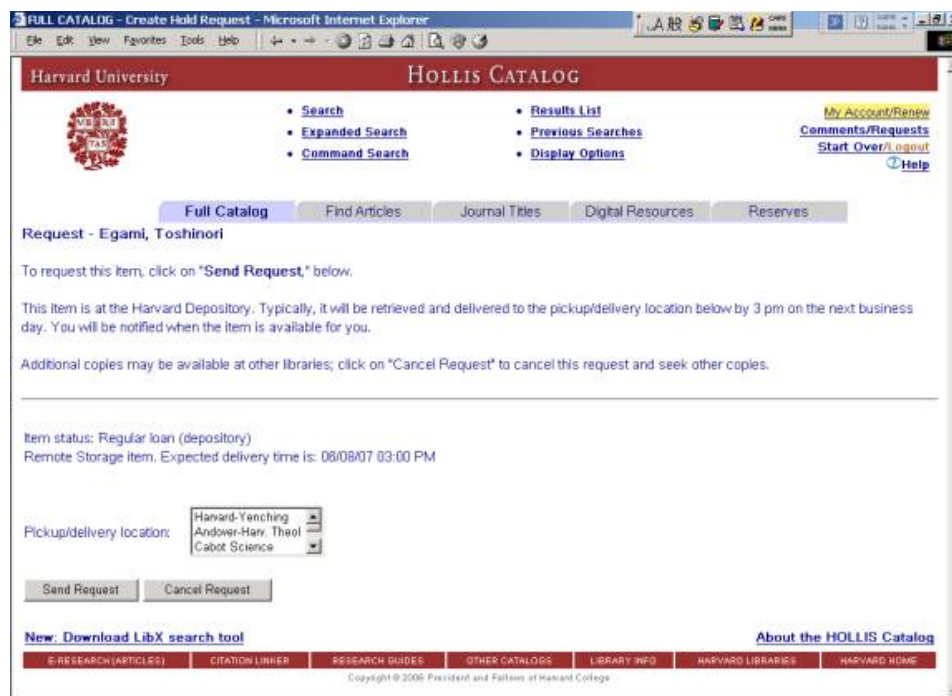
(5)個人認証画面。

学内の各種 Web サービスに共通の PIN システムです。



ここで自分の ID 番号・パスワードを入力し、ログインします。

(6)ログインすると、リクエストのための画面に戻ります。



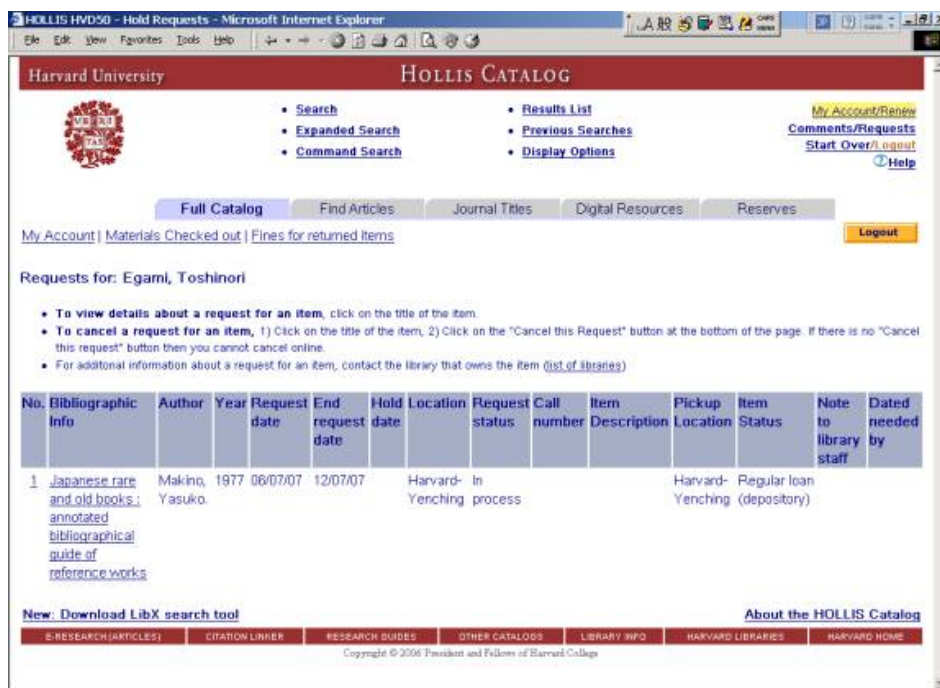
下のほうにあるリストから、求む資料をどの図書館で受け取りたいかを選ぶ。自由に選べるというわけではなく、資料によっては特定の場所が指定されています。

(7)リクエストが受け付けられました。



(8)自分のリクエストした資料の確認画面。

「Request status」に「In Process」とあるのがわかります。



(9)資料が指定の図書館に届くと、その旨のメールが送信されます。

Patron ID: ID*****

The following item, which you requested on 06/07/2007, is now available for pick-up at Harvard-Yenching:

Makino, Yasuko.: Japanese rare and old books : annotated bibliographical guide of reference works / by Yasuko Makino.. Tokyo : Hobundo, 1977.. 76 p. ; 26 cm..

Pick-Up Sublibrary: Harvard-Yenching

Owning Sublibrary: Harvard-Yenching

Collection: Harvard Depository

On hold until: 06/20/2007

PLEASE NOTE: Regular loan (depository)

Please note: Due to high volume, some libraries may require 30 minutes of additional processing time after this notice is sent.

今回の例では、前の日の午後に発注して、翌日の午後に入手できました。

2007 年 7 月 25 日(水曜日)

【8. 日米”勉強会”事情】

7/20、全学の図書館員向けのオープンな勉強会のひとつとして、「ALA Report」という簡単な報告が行なわれたので、話を聞いてきました。これは、「Cataloging Discussion Group」という学内のグループが催したもので、先の ALA 年次大会で行なわれた目録に関するミーティングの様・内容を、実際に参加した人たちがそれぞれ報告し、情報共有をはかろうとするものでした。

ここハーバード大学の図書館では、学内のライブラリアンによる勉強会・報告会・講演会のようなものが、かなり頻繁に行なわれています。これまでいくつかの会に出席してみて、日本（京大）で行なわれているそれと比べていくつか違う点がある、ということがわかってきました。

今回はその違いについて、いくつかご報告してみたいと思います。

・口頭のみ発表が多い。

日本だと昨今ではちょっとしたことでも Powerpoint が登場するのが当たり前になってきました。が、こちらでは、学内の会で 3 回に 1 回くらい、大規模だった ALA 年次大会でも半数くらいしか、Powerpoint によるプレゼンテーションを見かけませんでした。

さらに、配布資料を配るというのも意外に少ないようです。配られたとしても、A4 用紙 1 枚に題目・プロフィール・抄録といった簡単なものが書かれているくらいです。Powerpoint を丸ごと印刷したり、内容のアウトラインを詳細に書き上げたりといったものは、これも ALA 年次大会でもほとんど見かけませんでした。

これには、内容がわかりづらいというデメリットもありますが、発表者にとっては準備の負担がかからないというメリットもあるようです。また、聴く側に本当に知りたい情報があれば、自らディスカッションに参加したり積極的に発表者にコンタクトをとったりするといった習慣が根付いているからかもしれません。

・回数が多い。

10 日に 1 回くらいの頻度で何かしらのセッションが行なわれているようです。案内のメールも頻繁に届きます。誰かが得た情報、蓄積した知見は、それぞれオープンにし、互いにシェアすること。それによって、WIN-WIN の関係を築き上げていくこと。そういう活動に価値を置くという考えが浸透しているのだと思われます。

そのかわり 1 回が 1 時間、長くなっても 1 時間半くらいで終わります。準備の負担を少なく、時間を短くするかわりに、回数を多くすることが、こまめな柔軟な情報共有につながる、ということではないでしょうか。

・質疑応答・ディスカッションの時間が長い。

発表者の発表が 30 分くらいで、それと同じか、時には長いくらいの時間、質疑応答とディスカッション

が行なわれます。あちこちから手が上がり、意見が交わされます。終わってみて、今日の主役は発表者ではなかったな、という印象を持つこともありました。

発表者が”講師”、聴く側は”受講者”というように立場が分かれてしまうのではなく、あるいは”上”から”下”へ教えるという流れでもなく、それぞれが持っている情報と意見を互いにやりとりしあう。そういう姿勢が上手な情報共有を可能にしているのではないかと思います。

- ・ランチタイムに行なわれる。

時間設定が 12 時～13 時 30 分というパターンがよくあります。このときには、めいめいが自分のランチ（サンドイッチやフルーツなど）を持ってきて、昼食をとりながら人の話を聴く、という形になります。もちろん、12 時前には職場を離れ、戻るのは 14 時前になります。

- ・ Cataloging に関するテーマが多い。

学内の勉強会では、Cataloging がテーマであるものが全体の半数を超えています。ひとつには、レファレンス・ライブラリアンはそのサブジェクトごとに情報共有する必要があり、全学レベルで行なわれにくいのに対し、Cataloging は必要とされるスキルが比較的標準化されており、全学レベルでのテーマにふさわしいためではないかと思われます。

2007 年 8 月 9 日(木曜日)

【9. 本を大切にしてほしい – 資料保存啓発グッズ】

アメリカのたいていの大学図書館には、資料保存・修復を専門にする部署があります。古典籍・歴史的資料のケアだけでなく、近代酸性紙資料への対応、書庫環境・資料取り扱いなどについての学内各図書館への指導・アドバイスといったことを行なっています。アメリカの司書の方と話をしていると、何かにつけてこういった資料保存部署に言及されることが多く、頼りにされている存在であろうことがうかがえます。

今回は、ハーバード大学の Weissman Preservation Center & HCL Preservation 作成の資料保存啓発グッズについてご紹介します。

Library preservation at Harvard

<http://preserve.harvard.edu/index.html>

↓図書館内で資料が水濡れしてしまったとき、24 時間体制で緊急体制してくれる連絡先が書かれた、マグネットプレート（ほぼ原寸大）です。

http://preserve.harvard.edu/education/images/products_magnet.gif

↓本をコピーするときの注意事項が書かれた、縦長のポスター。

http://preserve.harvard.edu/education/images/products_photocopying.gif

↓図書館資料を守るための 15 の基本的な注意事項が書かれた、ポスター。

http://preserve.harvard.edu/education/images/product_15ways.jpg

↓借りていく本が雨雪に濡れないようにするための、ビニールバッグ。利用者用です。

http://preserve.harvard.edu/education/images/products_rainy_day_bag2.gif

これらを見ていると、どれも、ただ単に事実や注意事項を知らせるためのものというだけではなく、目に留めてもらえやすいような、使ってもらえやすいような工夫を加えることによって、そのお知らせをより効果的に広めようとしている、ということがわかります。

例えば、水濡れ対応のプレートは非常に小さくかつマグネットなので、机の脇や書類棚など、どんな場所にでも気軽に何気なく貼っておくことができます。私が勤める図書館内でも、どこでどんな作業をしてもこれを目にしない日はないくらいに、あらゆる場所に当たり前のようには貼られています。だからこそ、ひとたび何か事が起こったときには、即座にその連絡先へ連絡することができるという効果があるのではないのでしょうか。また、コピー機の周辺は何かと手狭で空気が少ないものですが、このポスターのように縦長であれば、幅広のポスターに比べて場所をとることなく、上手に掲示しておくことができるよう

に思います。

15の注意事項が書かれたポスターや雨雪用のビニールバッグは、図書館グッズとは思えない(?)、自らすすんで使いたくなるような、感じのよいデザインと色遣いで仕上げられています。その書かれている内容や本来の使用目的に関わらず、このポスターであればそのデザインだけでもちょっと貼っておこうかなという気になりますし、ビニールバッグもすすんで使おうという気になるのではないのでしょうか。単に○○図書館とだけ書かれた無粋なビニール袋をぶらさげて歩き回るのはごめんだというような学生でも、それなりのデザインがしらわれたバッグなら、借出時だけでなく返却の際にも抵抗なく使ってもらえるかもしれません。

事務的な姿勢や無機質な言葉だけでは、伝わる情報量にも限りがあります。本当に知ってほしいこと、使ってもらいたいものがあるのならば、相手の事情を察した配慮や、気持ちをひきとめるような感動が必要なのではないのでしょうか。

2007 年 8 月 21 日(火曜日)

【10. 快適に仕事をするために - Ergonomic Training Session】

8/15、イェンチン図書館の職員を対象に、Ergonomic Training Session が行なわれました。

ergonomic とは、直訳すると「人間工学」という意味ですが、ここでは職場における各者の健康や身体上の安全に関する考え方を指しています。ハーバード大学内の Department of Environmental Health and Safety という専門の部署から来た講師の方により、デスクワークをしているときに注意すべきことや、イス・机・コンピュータなどの位置・使い方についての指導がありました。

Department of Environmental Health and Safety

<http://www.uos.harvard.edu/ehs/>

長時間の無理なデスクワーク、とくにコンピュータ中心の仕事では、身体の至るところに様々な悪影響を及ぼす可能性があるということが説明され、それを防ぐための正しい姿勢等について指導がされました。例えばイスひとつにしても、クッションにどのように腰掛ければ足に負担をかけずに済むか、そのためにはクッションの位置をどう調節すればよいか、腰をサポートするためにイスのどの部分をどう調節すればよいか、肩や腕を痛めないために肘掛の高さをどう調節するべきなのか、その調節の結果としてキーボードと腕との位置関係がどうあるべきか、といったことが丁寧に、実演をまじえて判りやすく解説されます。他にも、キーボードのどの位置をよく使うかによってその位置を変えること、電話をよく使う仕事であればヘッドセットを使うこと、文字入力を行なう仕事であればドキュメントホルダーを用いることで身体への負荷を減らすこと、よく使うすべての物を机の手の届く範囲内に配置して、無理に手を伸ばすことなどがないようにすること、などが説明されました。

最も興味深かったのはラップトップ型 PC（ノート PC）に関するトピックスでした。そもそもラップトップ型 PC は、キーボードとディスプレイのサイズや位置が固定されてしまっているため、ergonomic という考え方に適合していない代物のようです。それでも使用する際には、引き起こされる身体上の問題を防ぐため、ラップトップスタンド（ラップトップ型 PC のディスプレイが目の高さまで来るように、机の上に固定し高さを調節できるスタンド）と、別途接続して使えるキーボードやマウスを使用することが推奨されていました。ですが、それでは基本的にデスクトップ型の PC と変わらないわけですから、ラップトップ型 PC というのは、“持ち運びを頻繁に行なう”という条件下でもない限りは、業務用として使用するには不適切であるということになってしまうのかもしれませんが。

この Department of Environmental Health and Safety では、希望者の都合のよい日時に実際の職場まで出向いて具体的なアドバイスを行なう、というサービスも行なっているそうです。また、講習内容を Web サイトで自習することもできるように準備されています。

2007 年 8 月 29 日(水曜日)

【11. 新サービスのターゲットは？ - ワイドナー図書館】

ハーバード大学の図書館の中でもっとも歴史が古く、中心的存在であるのが、ワイドナー図書館です。



ワイドナー図書館

<http://hcl.harvard.edu/libraries/#widener>

館内の様子

http://hcl.harvard.edu/info/study_spaces/index.html#widener

この図書館前面の大階段は、学内の行事・集会のほか、学生活動の場としても利用されているようです。

Guidelines for Assembling on Widener Library Steps

http://hcl.harvard.edu/libraries/widener/assembling_on_steps.html

先日、このワイドナー図書館の副館長から、学内の各部局図書館長あてに、ワイドナー図書館における新サービスの案内がメールで届きました。

以下はその抜粋です。

- － ワイドナー図書館内にあるメモリアル・ルームを、ウェディング・チャペルとして利用できるように整備し、学内職員による利用を可能とする。
- － 隣接するラモント図書館内のカフェでアルコールを提供できるよう、州発行のリカー・ライセンスを取得する。
- － 時間外のチャペル利用には追加料金を設定する。なお、深夜に及ぶ祝宴については、24 時間開館しているラモント図書館の学生を派遣できるようにする。
- － 予算に応じて、人文・科学部長、図書館長、学長いずれかに司祭役を依頼することができる。アクセス・サービス部門が仲介する。
- － 儀式にグーテンベルグ聖書を使用する場合は、別途有料とする。
- － 写真撮影はイメージング・サービス部門が行なう。
- － 蔵書構築部門と研究サービス部門のスタッフは、介添人やフラワーガールとしての研修を受けることとする。これにあわせて、人事部門は彼らの職務分掌と俸給についての再検討を行なう。
- － このサービスに関する広報用パンフレットと Web サイトを至急用意する。
- － 以上のことを、各館のスタッフに広く知らせてほしい。

この冗談を真に受けたスタッフはおそらくいないと思いますが、それにしてもこのような冗談が成り立つほど、ワイドナー図書館の建物は内装・外観ともにとても荘厳な造りになっています。また、館内カフェテリア、24 時間開館、独立したイメージング・サービス部門など、脇を固めるサービスが実在するという点についても、注目したいところです。

ワイドナー図書館の歴史

<http://hcl.harvard.edu/libraries/widener/history.html>

ラモント図書館内のカフェ

http://www.dining.harvard.edu/campus_restaurants/restaurants_lamont.html

ラモント図書館の開館時間

<http://lib.harvard.edu/libraries/0027FULL.html#hours>

ゲーテンベルグ聖書（ハーバード・ホートン図書館所蔵）

<http://pds.lib.harvard.edu/pds/view/6865427>

イメージング・サービス部門

<http://hcl.harvard.edu/info/imaging/>

2007 年 9 月 21 日(金曜日)

【12. 年間 40,000 冊の本を修復する工房 – Collections Conservation Lab】

ハーバード大学には図書館資料の修復・保存を専門に担当する部署が 2 つあります。1 つは”Weissman Preservation Center Special Collections Conversation Lab”、こちらではいわゆる貴重書や写本などの特殊資料が取り扱われます。そしてもう 1 つは HCL (Harvard College Libraries) に属する”Harvard College Library Collections Conservation Lab”です。こちらはワイドナー図書館（ハーバード大学の中央図書館）内にあり、学内の一般的な貸出用図書について修復・保存のための処置を担当しています。

先日、この Harvard College Library Collections Conservation Lab を見学する機会を得ました。

Harvard College Library Collections Conservation Lab

<http://preserve.harvard.edu/conservation/generalcollections.html>

Lab tour

<http://preserve.harvard.edu/conservation/labtourhcl/labtour01.html>

‘Medieval Crafts and Modern Technologies: Collections Conservation in Harvard’s Widener Library’

Harvard University Library Letters (May 2003)

<http://hul.harvard.edu/publications/letters030511.pdf>

ワイドナー図書館地下フロアに合計 3,400 平方フィートの作業スペースを持つこの Lab では、20 人のスタッフの手で、年間約 40,000 冊の本が処理されるそうです。

ここに送られてきた本は、まずそれぞれどのような状態にあるかが分析され、当 Lab でどのように処置をすべきか、あるいは外部業者に依頼すべきか、といったことが判断されます。当 Lab 内での修復対象となった本は、細分化された各担当スタッフの間を、自動車工場の流れ作業のように転々と渡っていき、処置が施されていきます。

作業スペース内は近年に改装されており、作業用の大机、スタッフひとりひとりの専用作業台のほか、製本・修復用の各種専用機器、カビ除去用のバキューム装置、地図やポスターを折り曲げずに納める箱を作成するための超大型カッターなど、実にたくさんの機器・器具類が備えられています。とはいえ、「ところせまし」といった様子はまったくなく、きちんと整理され機能的に配置されているため、ストレスを感じることなくスムーズに動くことができそうな、むしろどこことなく広々とした印象を受けるほどでした。

そしてそのような作業スペースのあり方だけでなく、室内の随所に、作業を効率的に行なう工夫やそれをサポートするための器具類を見つけることができました。例えば、

- ・本のサイズにぴったりあったビニール製のポケット式ブックカバーを、ごく短時間で自作することができる専用の機械。（CoLibri 社 Pocket : http://www.colibriusa.com/product_colibri.php）

- ・本を納める箱を作成するにあたって、その本の縦・横・厚み 3 方向のサイズを一度で計測することがで

きる、3方向メジャー。

- ・厚紙をどのように切れば求める直方体の箱を作ることができるかを、パターンに応じてあらかじめ図解してある、自作のチャート。

- ・厚紙用カッターは、両手でその厚紙などをコントロールできるよう、手ではなく足で操作できるものを導入。

- ・背表紙修復の際に下地として貼る和紙を、あらかじめ1インチごとに細長く切ってストックしておき、どの厚みの本が来てもすぐに作業できるようにしておく。加えて、背表紙の幅を手早く計測してその和紙を選ぶための、専用のメジャーも自作。

- ・日本近代の糸綴じ本を修繕・製本するにあたって、それがどのような構造になっているのかが一目で判るよう、典型的なサンプルを自作して、作業者が適宜参照できるようにしておく。

- ・個人個人の作業台はおおむね高い位置にあり、立ち作業・座り作業の両方が可能。（座り作業のときは高いイスに登るようにして腰掛ける。）

流れ作業と職場の配置、動きやすさ・仕事のしやすさを意識したスペースの使い方、仕事を効率的かつ効果的に行なうための機器の導入や、ツール・サンプル類の自作など。ひとつひとつはそれほど難しいことでも特異な工夫というわけでもないとは思いますが、実際にそれらを導入または実施しようとしたとき、手をつける時間的余裕がない、重い腰が上がらないといったような理由から、なかなか実現できず、日々の手慣れたルーチン・ワークをこなすことのほうに傾いてしまうというのが、多くの職場での現実ではないかと思います。

ですが、それらを実行に移しているこの Lab では、例えば1つの本を受け取ってから返却するまでの時間が、以前は1ヶ月ほどかかっていたのが、最近では2週間程度にまでなったそうです。そもそも40,000冊の本の修復は、どれも一括処理が可能というわけではなく、1点1点その本の状態にあわせて、伝統的な手法をもまじえながら取り扱われるわけですから、その工夫も努力も並大抵ではないだろうと推察されます。また、スピード・数の面ばかりでなく、例えば再製本後の背表紙にオリジナルの背表紙を切り取ったものを採用する、さらには表紙の色とオリジナルの背表紙の色とを合わせることで、元の姿と見た目上ほぼ変わっていないかのような仕上がりを可能にするなど、効率以上の成果をも実現させています。

このような効率的かつ良質な成果をあげることができていることの背景にあるのは、潤沢な設備・人員といった端的な要因だけでは決してないと思います。上記のようなひとつひとつの工夫・改善を合理的に採用していくというしなやかな姿勢が、功を奏しているのではないかと。恵まれた環境を作るのは人員・予算ではなく、そういった考え方の問題なのではないか。そしてそのことは、資料保存だけでなくどのような業務にも言えることなのではないのか。

スタッフの皆さんの、真剣で、誇らしげで、それでいてどこかしら楽しげな表情を見ながら、そのようなことを考えました。

2007 年 9 月 26 日(水曜日)

【13. セーフ/アウトの境界線 – Law Library の飲食ポリシー】

学生による図書館内への飲食物の持ち込みについては、どの図書館でも頭を悩ませている問題だと思います。特に最近、附属図書館への飲食物持ち込みにまつわるマナーが悪化している、という話をききました。

今回は、ハーバード・ロー・ライブラリー（ロースクールの図書館）における飲食ポリシーについて、ご紹介します。

以下は、館内のすべての座席に掲示されている注意書きです。

図書館の蔵書・設備を守るために、以下の規則を遵守して下さい。

- ※ 飲み物は、蓋がついているカップ・ボトル・缶に入っていれば許可。
- ※ 食べ物は、1 階ラウンジ（ゲート外）でのみ許可。
- ※ 食べ物を館内に持ち込む場合、それがたとえ館外であとから食べるつもののものであるとしても、密封された容器に納め、かつ、外から見えないようにカバン等の中にしまっておくこと。
- ※ 匂いのする食べ物を館内に持ち込むことは不可。

この規則を違反して持ち込まれた飲食物は、ラウンジまで持ち出してもらいます。

それを拒む学生には、学部長等への報告のため、身分証の提示を求める場合があります。

利用者のニーズ・行動が千差万別である以上、あいまいな方針だけでは限界があると思います。上記の例に見られるように、“利用者のニーズに応じてある程度妥協すること”と、“具体的なラインを示してその遵守を徹底させること”との両方が必要なのではないのでしょうか。

Responsibilities of Library Users (Harvard Law School Library)

http://www.law.harvard.edu/library/about/rules_of_study.php

2007 年 10 月 2 日(火曜日)

【14. 資料の Web 公開に伴う責務 – Image Use Protocol Task Force】

8 月 29 日、NCC (North American Coordinating Council on Japanese Library Resources : 北米日本研究資料調整協議会) 内のタスクフォースのひとつである、Image Use Protocol Task Force のミーティングが行なわれ、傍聴させていただくことができました。

古典籍資料や古文書、美術・博物資料といったものの写真を、論文内で引用するなどして出版物に掲載する場合、所蔵機関の許諾を得るなどの手続きが必要となります。日本では出版社や編集社が行なうことが多いようですが、アメリカでは多くの場合、執筆者である教員・研究者自身がその手続きを取ることを求められるそうです。誰に対してどのような手続きをとればいいのか判らず戸惑った日本研究の教員・研究者が、日本分野のライブラリアンに相談に来ることが多いため、どのような対応をとればよいかの情報交換、調査、書類ひな型やガイドラインの作成などを行なおう、というのが、このタスクフォースの目的であるようです。

NCC Image Use Protocol Task Force

<http://www.fas.harvard.edu/~ncc/imageuse.html>

ほぼ 1 日をかけて行なわれたミーティングのうち、1 時間半ほどしか傍聴する機会がなかったのですが、それでもその短い間に、

- ・申請方法や書式がまちまちで、判りにくい。
- ・申請方法やポリシーが明示されておらず、電話で問い合わせなければならない場合が多い。
- ・有料の場合、クレジットカード払いができない場合が多い。支払いに手間がかかる上に、手数料が高額になってしまうことがある。
- ・日本とアメリカで著作権法が異なる。例えば、アメリカでは著作権が切れるのは著作権者の死後 70 年、日本では 50 年のため、日本では手続きが不要とされている資料なのに、アメリカではそれを出版できない、というケースがある。
- ・プランゲ文庫 (メリーランド大学) が Web で公開している書類が参考になる。

といった様々な話題があがりました。その対象は図書館・美術館のような組織ばかりではなく、寺社や個人コレクションのようなところにも及ぶため、個々で異なる対応を求められる煩雑さ、判りにくさはかなり大きいようです。

私自身、数年前に京都大学電子図書館の貴重資料画像 (学内の古典籍資料のイメージファイルを Web で公開したもの) を管理・運営する業務を担当しており、国内外から多数の”画像使用許可願”を受け付け処理するという立場にありました。海外からこういった申請を行なうにあたっていろいろご不便をおかけしたのではないかと恐縮しながら話を聞いていましたが、出席者のお一人から、「京都大学の貴重資料画像に対して利用申請をしたときは、手続き方法がわかりやすく、対応も迅速で助かった」とのコメント

をいただき、安堵しました。

図書館が Web で所蔵資料やその画像を公開するとき、単に公開して自由に見てもらっただけで終わり、ということには決してなりません。必ず、原資料の閲覧、複写物の依頼、二次使用の許諾申請といった様々なリクエストを伴うことになりますし、しかもそれは公開直後から相当の期間継続していきます。古典籍や文書類などの画像ファイルに限らず、論文・報告書など機関リポジトリの類に納められた文書ファイルであっても、同様のことが言えます。

様々な資料の Web 公開のおかげで、探しやすく、アクセスしやすくなった分だけ余計に、そういったリクエストにどれだけ迅速に対応できるか、ポリシーを明確かつ透明に提示できるか、といったことがより一層求められるようになるのではないのでしょうか。

メリーランド大学ブランゲ文庫 複写サービス

<http://www.lib.umd.edu/prange/html/reproduction.jsp>

京都大学電子図書館に関わる著作権・リンク・二次利用について

<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/copyright.html>

2007 年 10 月 2 日(火曜日)

【15. 新年度がスタート！ - 図書館オリエンテーション】

9 月に入り、新年度を迎えたハーバード大学はにわかに活気づいてきました。

新しくハーバードにやってきた学生・研究者のみなさんを対象に、学内のあちらこちらの図書館でオリエンテーションが開催されています。対象も内容もさまざまですが、できるだけ傍聴してきました。

※Widener 図書館ツアー (毎日午後)

通常は毎週木曜日午後 3 時からのみの館内ツアーを、この時期に限り、毎日行なうというもの。図書館の歴史、館内の設備、書庫の構成など。日によって 10 人以上の参加者があることもあれば、誰も来なくて流れることもある。

※GSAS オリエンテーション (9/12 午後)

HCL(Harvard College Libraries) による院生向けのオリエンテーション。(GSAS は Graduate School of Arts and Sciences の略。) 図書館以外の全種のオリエンテーションと同じ建物内で行なわれる。ガイダンスが 2 回、1 時間づつ。1 回の参加者は 80 人ほど。

※Lamont フレッシュマン・オープンハウス (9/13 午後)

Lamont 図書館 (学部生用学習図書館) による、学部新入生向けのイベント。館内の簡単なツアーのほか、各種資料の配布と説明が行なわれる。館内は風船で飾られ、スタッフは皆“You@Lamont”と書かれたおそろいの T シャツを着て、参加者にはスナックやドリンク、USB メモリがあたるチケットを配るなど、お祭り色が強い。ただ、学生の姿があまり見られず、なんとなく閑散とした印象を受ける。配布資料は、HOLLIS の使い方、図書館のディープな使い方、本を Critical に読むための方法など。

※イェンチン図書館のオリエンテーション (9/12 午後)

学内各所から、東アジア研究を行なっている研究者・学生約 100 人が参加。全館の概説と、日・中・韓・ベトナムそれぞれに分かれての館内ツアー。

※イェンチン図書館のオリエンテーション詳細版 (9/13・9/14)

上記のオリエンテーションではカバーできなかった実用的な情報について、具体的に説明するもの。学内コンピュータ環境の概説、HOLLIS の詳細な利用方法 (CJK 文字やローマ字の説明含む)、e-research Portal での各種データベースや Refworks の利用法など。1 回につき約 1 時間で、20 人ほどが参加。今年初の試みとして行なわれた。

次回はこの中から「GSAS オリエンテーション」について少し詳しくご報告します。

2007 年 10 月 2 日(火曜日)

【16. 毎日がオリエンテーション – GSAS オリエンテーション】

新年度に入ってから行なわれている各種図書館オリエンテーションのうち、大学院生向けの GSAS (Graduate School of Arts and Sciences) オリエンテーションについて、少し詳しくご報告します。

これは図書館のみ個別のものではなく、住居や保険に関する部署などと合同で行なわれる全体的なオリエンテーションです。各部署がテーブルに陣取って、訪れた学生の質問やリクエストに応える。学生は学生で、自分の必要な情報をそれぞれの部署に自ら出向いて情報を入手する、といった具合です。部署によってはグッズやチョコレート・キャンディを配ったり、ルーレットや抽選で iPod などの景品が当たりますよと宣伝するなど、オリエンテーションというよりもフェスティバルといった雰囲気、たいへんな混雑でした。



この建物の中の 1 室を使って、HCL(Harvard College Libraries) による院生向けの図書館オリエンテーションが行なわれました。午後の間に 2 回・1 時間づつ、1 回の参加者は 80 人ほどで、部屋の広さ・座席数もほぼ同程度でした。

まず HCL の中心である Widner 図書館のライブラリアンにより、学内図書館サービスの概要、HOLLIS (ハーバード大学の蔵書検索データベース) などの検索方法といった、概括的なガイダンスが行なわれます。続いて、Science の図書館、Geospatial の図書館というように、各部局図書館からのライブラリアン

がそれぞれ説明を行ないます。その内容も、ある人は所蔵する古典籍資料のデジタル画像紹介、ある人は情報収集の心得といったように、多岐にわたる総花的なものでした。

その後、その場に列席していた学内各部局図書館からのライブラリアン、およそ 30 人ほどが、ひとりづつ簡単な自己紹介を行ないます。ある人は自分の専門分野を述べたり、ある人は今日こんなハンドアウトを持参して来ています、というようなことをアピールしていました。

以上、40 分強ほどでガイダンスは終了し、解散となりました。

ここまでですと、日本の大学図書館で見られる光景とそれほど変わらないのですが、印象的な場面を目撃したのはこのあとでした。

7～8 割ほどの学生はざわざわと退室するのですが、何人かの学生は個々に、或いは固まって、先ほど自己紹介をしたライブラリアンのもとに向かっていくのです。私の近くにいたイェンチン図書館の e-resource 担当レファレンス・ライブラリアンのところにも何人かの学生が近寄ってくるので、様子をうかがっていると、「私は○○で、○○についての勉強をするつもりで、○○を探していて……」というような相談を持ちかけています。話しかけられたライブラリアンもそれに応えて、「それには○○というデータベースがあって、それについてはこのハンドアウトに詳しく書いてあって……」といった説明をして、名刺や自作資料を手渡したり、レファレンスデスクには何曜日の何時に出ているというようなことを伝えたりしていました。

このように、オリエンテーションやレファレンスが単なる連絡事項や一過性の 1 問 1 答に終わるのではなく、学生・研究者とライブラリアンとによるコミュニケーションまたは人間関係形成の一環としてやりとりされている様子を、こちらに来てからたびたび目にしています。

ある図書館での館内ツアーに同行したときも、案内役のライブラリアンが参加した学生に「あなたの研究テーマは？」「クラスではどんなことをやっている？」などとしきりにインタビューしては、それに応じた蔵書紹介を行なっていました。もちろんライブラリアン自身が、自分の専門分野、オフィスの場所、レファレンスデスクにいる曜日と時間を示して、どうぞ相談に来てくださいとアピールするのは当然のことのようです。また利用者側も、「自分の研究テーマは○○で、時代はいつ頃です」「前の大学では○○をやっていました」「来年のいつまでに論文を提出する予定です」といったような自分のプロフィールを、ライブラリアンに対して積極的に述べている様子も、何度か目撃しました。

利用者にとってもライブラリアンにとっても、自分にとって有益な／自分が役に立てる相手を見つけては、今後も随時相談にのってもらえる／のってあげられるよう、能動的に人間関係を築いていく、というひとつの“マナー”を垣間見たような気がします。

そういった意味では、図書館のオリエンテーションというのは、事務連絡・情報伝達のための行事でも、教育の一環でも、制度としての図書館サービスでもなく、“コミュニケーションの場”のひとつではないだろうか。そして、自分の専門分野が何か、求めているものが何か、与えられるものが何かを、互いに明確に伝えるというコミュニケーション・スキルが充分にあれば、オリエンテーションのシーズンが過ぎても、どのようなタイミングでも、容易に関係を築けるのではないか。そのようなことを考えました。

さて、この院生向け図書館オリエンテーションでは、お土産として参加者全員に USB メモリが配られました。これが何に使われるのかについては、後日またあらためてご報告したいと思います。

2007 年 10 月 23 日(火曜日)

【17. 本と、コーヒーと、快適な居場所 - 図書館カフェ】

USA TODAY の Web サイトに、9 月 27 日付けの記事として、米国内の大学図書館にスターバックスをはじめとするコーヒーショップが出店している様子について、レポートされています。

「Something else to check out at library: Starbucks」 (USA TODAY, 2007/9/27)

http://www.usatoday.com/money/industries/food/2007-09-27-starbucks_N.htm

今回は、ハーバード大学内にある 2 軒の図書館内カフェ — ワイドナー図書館のカフェとラモント図書館のカフェについて、ご紹介します。

学内図書館の中心的存在であるワイドナー図書館には、地下に小さなカフェがあります。テーブル席・ソファ合わせて 40 席ほど。営業時間は 07:30-14:30。図書館の平日の開館時刻は 09:00 ですし、そもそも地下のほとんどは職員のオフィスで、閲覧室や書架はありませんので、主に館内職員がターゲットの休憩室ととらえるべきでしょう。とはいえ、利用者が自由に利用できる施設ですので、軽食をとったりリフレッシュしたりしたいときにはありがたい存在であると言えます。ちなみに、先日 10 月 1 日にリフレッシュ・オープンしたばかりです。

経営しているのは、学内のカフェ・食堂やケータリング等の事業を受け持っている、Harvard University Dining Service。取り扱われている商品は、コーヒー、お茶、ソフトドリンク、パンやサンドイッチ、パックのサラダ、寿司、果物、スナック類。日替りスープもあります。時間外で店員がいないときでも、自販機（ドリンクやスナック・サンドイッチ類を販売）やエスプレッソ・マシン（セルフサービス）が利用できます。電子レンジも備え付けてあり、持ち込んだお弁当を温めて昼食をとっている人もいました。

対して、学部生向け・学習用図書館であるラモント図書館のカフェは、入口ゲートを通ってすぐ右手。書架・閲覧室のあるエリアに隣接した位置にあります。生垣やオブジェが並ぶ中庭に面していて、全面ガラス張りで見えもよく、館内の「一等地」と言えるでしょう。ソファやランプシェードなどのインテリアは、街中のコーヒーショップのような落ち着いたデザインのもので統一されています。テーブル席が約 60 席、ソファが約 20 席。コーヒーや軽食をとりながら、本を読んだり、自習をしたり、グループでディスカッションをしたりと、気持ちよくリラックスして勉強ができる空間になっています。

Lamont Cafe (写真あり)

http://www.dining.harvard.edu/campus_restaurants/restaurants_lamont.html

カフェ内には、自由に利用できるデスクトップ PC が 6 台。自分の PC を持ち込んで無線 LAN にアクセスすることも可能です。また、このラモント図書館ではノート PC を館内貸出するサービスも行なっています。

新聞ラックや新着雑誌架もこのカフェ内にありますので、気軽にブラウジングしながらくつろぐことができます。雑誌は約 120 タイトル。各分野のレビュー誌・コア誌 (Library Journal, Writer's Digest)、ハーバードの学会誌・レビュー誌 (Harvard Business Review)、一般誌 (TIME, National Geographic, The New Yorker)、娯楽・趣味誌 (Vogue, Wired) などがなっています。さて、ここで注意しておきたいのは、このラモント図書館はコース・マテリアルの提供など、あくまで学習支援に特化した図書館であり、必ずしも資料の保存に重きを置いているというわけではない、という点です。実際この新着雑誌架にならんでいる雑誌も、その多くはバックナンバーが一定期間までしか保存されていないようです。このような機能の特化が背景にあつてこそ、飲食自由なカフェと図書館資料とが同じ室内で共存できているのだと思います。

なお、館内で食べ物を食べてよいのはこのカフェの中だけ、飲み物は蓋で密閉されたいれものであれば持ち出してもよい、というルールになっています。また、このカフェと通常の書架・閲覧エリアとはガラス扉で仕切られていて、音や話し声がカフェの外へ漏れないように配慮されています。

経営しているのは、ワイドナー図書館と同じく Harvard University Dining Service で、扱われている商品もほぼ同じ。店員がいない時間外には自販機・エスプレッソマシンが利用可能である点も同じです。但し、決定的にちがうのはその営業時間 (店員が詰めている時間) で、こちらは 15:00-翌 02:00。というのも、このラモントは 24 時間開館している図書館で、学生が主に活動している (と思われる) 午後から夜半まで営業してくれている、というわけです。実際に私が訪ねたときも、お昼のランチタイムは意外に人が少なく、一方、午後 9 時頃にはほぼ満席。さすがに午前 2 時の様子までは確認できませんでしたが、夜遅くまでみな熱心かつ活発に勉強、もしくはおしゃべりしていました。(なお、金・土は図書館・カフェともに 21:45 に閉館します。)

最後にもうひとつ留意しておきたいのが、ハーバード学内にはこのような図書館カフェに限らず、学生が学習場所として利用できるコモン・スペースが多数存在している、という点です。ラモント図書館のカフェは確かに人気の高い場所のようですが、かといって、大勢が押し寄せてしまって混雑しているとか、場所取りや順番待ちで居心地が悪いなどというようなことは決してありません。学内には、誰でもが自由に使っていいコモン・スペースが至るところにあつて、テーブル・イス・ソファなどが並んでいます。ここでは、この図書館カフェと同じように自習やグループ・ディスカッションができますし、学内共通の無線 LAN を通じてインターネットにアクセスすることも可能です。時には、学生が教員から指導を受けている様子を見ることもできます。このように、学生の居場所としてのコモン・スペースが充分に用意されているキャンパスだからこそ、図書館内にカフェを設置しても人々が殺到することなく、適度に快適な空間を保つことができているのではないのでしょうか。

図書館カフェは、たんに図書館内の客寄せ施設としてではなく、キャンパス内の”居場所”を構成する空間のひとつとしてとらえられるべきだろうと思います。

2007 年 10 月 25 日(木曜日)

【18. 居たくなる図書館 - ラモント図書館】

ハーバード大学のラモント図書館は、1949 年、米国内で初めての学部生向け学習用図書館として設立されました。前回ご紹介したカフェ以外にも、学生のニーズに応える様々な設備・サービスを提供しています。

Lamont Library

<http://hcl.harvard.edu/libraries/#lamont>

●ノート PC の館内貸出

ラモント図書館では、館内のみで利用可能なノート PC（全 14 台）の貸出サービスを行なっています。学部学生のみ、1 回につき 3 時間まで。Microsoft Office を搭載していますので、レポートやプレゼンテーションファイルの作成などできます。また、館内のほぼ全域から無線 LAN にアクセスできるようになっており、ハーバード ID とパスワードを持っていればインターネットへのアクセスが可能です。さらには、その無線 LAN 経由で、館内のプリンターからプリントアウトすることもできます。プリントアウトは有料で、クリムゾンキャッシュ（学生証とその ID にお金を入金しておき、学内各種サービスでの支払いが可能なシステム）で支払います。

貸出は無料なのですが、返却が 1 分遅れるごとに 2 セントの罰金。24 時間延滞すると、1500 ドルが請求されます。

●コースリザーブ

授業で用いられ、学生が必ず読んでおかなければならないという図書・論文について、図書館であらかじめ準備しておき、受講している学生に時間限定で貸し出す、というサービスです。

学生は、MyHarvard と呼ばれる学内 Web サービスに自分の ID とパスワードでログインし、受講しているコースのリザーブ資料リストを確認することができます。そのリストには、デジタル化されたものがあればそのファイルへの、なければ図書館目録へのリンクが貼られています。学生は自分に必要な資料を確認し、オンラインで読むか、ラモント図書館で受け取ります。

リザーブされている図書は、受講している他の学生にも提供しなければならないため、1 人あたり 3 時間までしか貸し出していません。ここでも 1 分遅れるごとに 1 セントの罰金が科せられます。

●24 時間開館

平日の 24 時間開館が始まったのは、2005 年の秋からです。開館時間は、月-木:0:00-24:00、金:0:00-21:45、土:8:00-21:45、日:8:00-24:00。

24 hours in Lamont Library (Flash Photo Gallery)

http://www.news.harvard.edu/gazette/gallery/060209_lamont/index.html

地下2階にあるレファレンス・デスクも、夜間のサービスを行なっています。月-木：9:00-23:30、金：9:00-17:00、土：10:00-17:00、日：13:00-23:30。

なお、ラモント図書館のすぐ隣には、キャンパス内及びその近郊を走るシャトルバスの停留所があり、早朝から夜半まで運行しています。また、Harvard University Police Department という学内警察組織による Campus Escort Service もあります。

●リーディングルーム

館内には Ginsberg Reading Room と Donatelli Reading Room の2つの大閲覧室があります。

Lamont Library：Carrels and study spaces （写真あり）

http://hcl.harvard.edu/info/study_spaces/index.html#lamont

Ginsberg Reading Room はカフェと同じ1階の奥のほうにあり、2階までの吹き抜けになっています。ただ、吹き抜けとはいっても、もともと1階・2階とも天井までの高さがそれほど低くなく、また床がカーペット敷きであることもあって、音が響いて騒がしいということはありません。床から天井まで届く窓が複数箇所あって、植木、ベンチや、ツタに覆われた赤煉瓦を眺めることができます。ソファ 50 席の他、キャレル（1人席）50 席、2人席 10 席、4人席 24 席。学生の意見が反映されたというインテリアのデザインは、前回紹介したカフェと同じく、街中のコーヒーショップを思わせるものです。

3階にある Donatelli Reading Room のインテリアも同じデザインですが、こちらはソファが 10 席程度で、キャレル 60 席、2人席 40 席。1階の Ginsberg Reading Room がくつろぎながら勉強するという環境であるのに対し、こちらはひとり静かに集中して勉強するための場所、という位置付けのようです。

なお、院生向けの専門的な図書館によく見られるキャレル（1人席）のリザーブは、こちらでは行なわれていません。

最後に、ラモント図書館が新入生に配布したガイダンス資料の中に、以下のような一節がありましたので、ご紹介しておきます。

“Students come to Lamont for lots of other reasons, though: to congregate between classes in the Lamont Library Cafe, to study quietly through the night, to watch the snow fall from a comfortable chair in our Ginsberg Reading Room on the main floor. Sometimes they come here just because Lamont is a warm and welcoming place.”

2007 年 12 月 25 日(火曜日)

【19. Harvard Depository 見学】

7 月にご紹介した、ハーバード大学の保存書庫、Harvard Depository を実際に訪問・見学する機会を得ました。

Harvard Depository（以下、HD）がある Southboro Campus は、大学のメインキャンパスであるハーバードヤードから西へ約 40km、車で 30 分ほどの郊外に位置しています。ここには各図書館の蔵書のうち、利用頻度の比較的低いものが納められています。欲しい本がある利用者は、OPAC の検索結果画面で自ラクエストを送ることができ、翌日には指定した図書館で受け取ることができます。



Harvard Depository

<http://hul.harvard.edu/hd/>

7. 「Harvard Depository」

<http://www2.kulib.kyoto-u.ac.jp/harvard-diary/?p=24>

HD の最初の書庫がオープンしたのは、1986 年。需要に応じて増設していけるよう、ユニット式の構造が採用され、その後、現在までに計 6 つの書庫ユニットが設けられています。地上 3 階建ての高さの建物の中に、高さ約 9 メートルのスチール製書架が並び、6 書庫合計で約 1120 万冊の図書を収蔵することが可能です。ちなみに、近年多くの図書館が採用しているのは機械化された自動書庫ですが、この HD は自動書庫でも集密書架でもなく、固定式の書架を採用しています。HD のスタッフが専用のリフトを使って、

直接棚から資料を出し入れします。各所蔵館のスタッフが資料にアクセスすることはなく、検索・出納を行なうのは HD スタッフのみです。

この HD の最大の使命は、「資料を長期間にわたって保存すること」です。そのために必要な、安全で信頼できる保存環境作りのため、様々な努力がなされています。書庫内全体は年間を通して温度 10℃・相対湿度 35%に保たれており、急激な温度変化が生じることのないよう、常時監視されています。他にも、紫外線カットフィルター付きの蛍光灯、水漏れのないよう分厚いゴムで覆われた屋根、酸性物質の伝播を防ぐ中性素材の梱包資材、換気システムによるホコリの除去、さらに低温・低湿度のフィルム資料専用書庫など。書庫だけでなく、リクエストされた図書を各図書館へ配送するための運搬車内も、温度湿度管理がなされています。さらに、この HD で実際に資料を扱うスタッフは、事前に各種資料の適切な取り扱いについてのトレーニングを受けているとのこと。

以上のような努力の結果、この HD で保管された紙資料の寿命は、典型的なオフィス環境における寿命の 8 倍にあたる、という見積りが学内の保存専門部署から出されています。また、HD 内ではいわゆる“貴重書”の類を別置するということはず、一般の図書と同じ扱いで保管しています。いずれにしろ完璧な保存環境だからだそうです。

この資料と保存環境とを守る努力は、資料を HD に送る各図書館の側にも求められます。各館は、学内の保存部署が定めたガイドライン（「Transfer of Library Materials to the Harvard Depository」<http://preserve.harvard.edu/guidelines/hdtransfer.html>）に従って準備をしなければなりません。資料が特殊な形状であったり、壊れやすい状態にある場合には、封筒に入れる、箱に入れる、紙で包む、紐でしばるなど、それ相当の梱包が必要です。また、ほかの資料に悪影響を及ぼすことのないよう、ホコリやカビはあらかじめきれいにクリーニングされていなければなりません。カビの付着した図書が届いた場合、HD は所蔵館にその資料を返送するそうです。逆に、適切な梱包さえされていれば、壊れやすく過敏な状態にある資料は HD に送って保管されるべきであるということを、HD 自身が推奨しています。

もうひとつの HD の重大な使命は、「資料の検索・出納を可能にすること」です。スペースの節約のため、HD 内の資料は請求記号・分類などをすべて無視され、サイズ別に仕分けられて棚に収められます。これらを検索し、必要に応じて出納するため、すべての資料にバーコードの貼付が義務付けられています。

HD に到着し、サイズ別に仕分けられた図書は、資料を収める紙製のトレイに収められます。このトレイにもバーコードがついており、スタッフによって図書のバーコードとトレイのバーコードとがスキャンされ、専用のデータベースに登録されます。なお、スキャン時のミスや漏れを防ぐために、このスキャン作業は 2 度行なわれます。また、資料の混同や逸失を防ぐ目的から、ひとつのトレイ内に別の図書館の蔵書が混ぜられることもありません。さらには、資料の保全とスムーズな出納のため、ある程度の余裕を持たせた状態でトレイに詰められます。

図書の収められたトレイは、リフトで書架まで運ばれ、スタッフの手によって棚に収められます。書架の棚ひとつひとつにもバーコードが貼付されており、トレイと棚のバーコードがスキャンされます。これらの作業によって構築されたデータベースを元に、資料の検索・同定・出納が行なわれることになります。

「7. Harvard Depository」 (<http://www2.kulib.kyoto-u.ac.jp/harvard-diary/?p=24>) でご紹介したよう

に、利用者から図書のリクエストが届くと、そのバーコード番号を元に該当する図書が書架から取り出されます。通常であれば、リクエストの翌日（朝 7 時以前のリクエストなら当日）午後 2 時までに、指定された図書館にその図書が届けられます。緊急時には、即日処理・配送されるサービスもあるようです。なお、返却された図書は、元あったトレイに収められます。

以上のような、“保存”・“検索・出納”に対する厳しい品質管理のもと、現在約 660 万冊の資料が保管されています。この HD による保存書庫の管理方法は、国際的にスタンダードなものとして認められ、イギリスやオーストラリアなどで採用されているそうです。

実際に見学して強く感じたのは、この HD はあくまでも「本を活きたまま保存するための書庫」であるということです。決して、邪魔になったものを追いやるためのものでも、古い本を死蔵するためのものでもありません。必要な本はバーコード番号さえ判ればすぐに取り出される。どこに何があるかが確実に判る。狭い場所にぎゅうぎゅうに押し込まれるのではなく、ある程度の余裕を持って安全に収められる。通常の書架以上に適した環境が保たれ、資料の状態に合わせた梱包がなされる、といったような、最大限の配慮がなされています。

それは、ハーバード図書館が、すべての本を現物として尊重し、それらは誰かに使われるためにあること、かつ永年にわたって守られなければならないものであることを、原則として認識していることの証ではないかと思います。

2007 年 12 月 26 日(水曜日)

【20. 学習活動のすべてをまかなう - Learning Commons (UMass Amherst)】

11 月 7 日・8 日、Amherst という街にある University of Massachusetts Amherst(以下、UMass Amherst)を訪れ、図書館の見学や日本語クラスへの参加などをさせていただきました。

Amherst は、ボストンから西へ約 100 キロ、UMass Amherst、Amherst College など 5 つの大学が集まる、比較的小さな大学街です。

州立大学であり、この街ではもっとも最大規模である UMass Amherst は、学部学生約 2 万人、院生約 2000 人、教員約 1000 人。その広大なキャンパスのほぼ中心にあるのが、地上 28 階建ての W.E.B. Du Bois Library です。

University of Massachusetts Amherst

<http://www.umass.edu/>

W.E.B. Du Bois Library

<http://www.library.umass.edu/>



この UMass Amherst の図書館について話題になっているのが、近年新しくオープンした Learning Commons という施設です。これは、従来の図書館閲覧室・閲覧席のようにただ机といすのあるスペース

だけを与えるのではなく、「そこにいだけで学習活動のほとんどをまっとうできる場所」の提供を目的として設けられたものです。図書館とテクノロジーとキャンパス・サービスを融合させること。学生の日常的な学習・共同活動・コミュニケーションを環境としてサポートすることなどが、方針として掲げられています。その施設・サービスの充実ぶりと成功の様子は、日本でも注目されています。

Learning Commons

<http://www.umass.edu/learningcommons/>

「UMASS Amherst 校図書館視察報告」（井上創造）

https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/8090/1/2006_006.pdf

「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」（米澤誠，カレントアウェアネス No.289）

<http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=1036>

図書館はこの Learning Commons も含めて平日 24 時間開館しており、学生はいつでも好きなだけここに滞在することができます。学生の多くはキャンパス内の寮で生活しているので（1 年生は入寮が義務）、朝晩を問わず利用できるこの施設はたいへん評判が良いようです。

図書館の地階全体、面積約 25000 平方フィートのエリア内に、テーブル・一人席・グループ学習室・ソファなど、総計 5・600 人分ほどの席が用意されています。学習席のほとんどには計 200 台のデスクトップ PC が備え付けられています。また館内には無線 LAN が設けられていますので、持参したラップトップ PC や貸出用ラップトップ PC を好きな場所で使うことができます。ソファやいすにはキャスターがついて、学生が自分たちの使いやすように席をアレンジできる、という配慮もされていました。また、17 あるグループ学習室は声が漏れないようにガラスで囲われ、壁付のホワイトボードも用意されていて、ディスカッションには最適の場所です。とはいっても、もともとここでは「静かにすること」は求められておらず、むしろグループ学習・共同作業ができることを前提とした場所ですので、学生同士のおしゃべり・ディスカッションは当たり前に行なわれています。

エリア内にはその他にも、コピー機、プリンター、FAX、デジタル・スキャナなどがあります。自動販売機では、飲み物・食べ物・スナックのほか、ノートや CD-R といった文具・小物類を買うこともできます。1 階にはカフェもあり、Learning Commons へ持ち込んでの飲食も自由です。ケータイでのおしゃべりはエレベーターホールのほか、cell phone booth というケータイ専用の小部屋で、と決められています。

なお、PC やソファなどのほとんどは、寄付金を募ることによってまかなわれたものであるとのこと。

さらに注目すべきは、ライブラリアンや学生スタッフらによる学習支援サービスです。Learning Commons 内にはいくつかのサービスデスクやセンターがあり、学部学生の学習をそれぞれの方法でサポートしています。

例えば、「Writing Center」が行なう Writing Support は、学生のレポート・作文・論文などの執筆についてサポートしてくれるサービスです。このセンターには十分なトレーニングを受けた院生・学部生スタッフがいて、レポートなどの課題を抱えた学生に対し、文章の構成方法や読みやすさ・文体・文法など

について、相談にのったり個人レッスンをしたりといった形で手助けをしてくれます。「Writing Center」は、そもそも図書館とは異なる学内部署による教育プログラムであり、かつては学生会館に居を構えていたのですが、この Learning Commons の設置を機に館内でサービスを行なうことになったそうです。

「Career Services」は学内の Career Services 部署が設けた出張デスクで、就職情報の提供、個別相談、インターンシップやワークショップのコーディネート、模擬面接やレジュメ作成の指導などを行ないます。また、「Academic Advising」も同じく学内の学生サービス部署が設けた出張デスクです。どちらも Learning Commons の設置を機に、学生会館から館内にデスクを移転させました。

なお、Learning Commons とは別ですが、図書館 10 階には「Learning Resource Center」があり、特に学部 1-2 年生の学習指導を行なっています。ノートのとり方、学習の進め方などの基本的なスキル習得についてのサポートのほか、必要に応じて補習を行なったりもしています。

ライブラリアンが詰めているのは、「Learning Commons and Technical Support Desk」と「Reference & Research Assistance」です。前者は 3 交代制のライブラリアンと学生スタッフが常時待機して、総合的なサービス・管理を行なっています。後者のほうでは、レファレンス・ライブラリアンが深夜まで学習・研究のサポートを行なっています。PC コーナーに隣接していて、何人かの学生が気軽に相談を持ちかけていました。個別相談に応じることができる小部屋も設けられています。

この図書館を利用している学生に、実際に感想を聞くことができました。

「寮の部屋や自宅より集中できる」「プリンタなど、自分の持っていない機器を利用できる」など、評判は良さそうでした。実際の利用を見てみると、Microsoft Office でレポートやプレゼン資料を作成したり、2-3 人で話をしながら何かをしていたり、スキャナを利用したりと、従来の図書館閲覧室から一步踏み込んだ活用がされているようです。統計によれば、当初の予想に反して、早朝でもそれなりの数の学生が来館利用している、という話も聞きました。

ただ、学生の声でいくつか気になった点があります。ひとつは「人が多くて落ち着かない」というものでした。これについては、館内に「Quiet Study Area」が 2 箇所設けられています。Learning Commons は確かに成功した施設かもしれませんが、それひとつ用意していれば事足りる、という短絡的な考え方ではなく、学生の多様なニーズに合わせた柔軟な姿勢が不可欠なのではないかと思います。

もうひとつは「Learning Commons でグループ学習などをしていても、参考図書などの本が必要になって、結局はその本がある閲覧室へ移動する」というものでした。Learning Commons のある場所はもともと参考図書やマイクロフィルムが置かれていたエリアであり、その多くを書庫などにしまいこむことで捻出されたスペースです。が、それでもなお基礎的な参考図書はいまでも相当数が Learning Commons 内に配架されています。PC に向かって検索したりレポートを書いたりしている学生たちの傍らには、分厚い本やテキストブック、プリント類が並べられていました。検索ツールの多くがオンライン化しつつあるとはいえ、授業の課題として図書にあたることを課題として与えられることもまだまだ多いのだと思います。席や PC だけでなく、書架に並ぶ図書へも 24 時間アクセス可能であることが、この図書館の強みであるように見えました。

この施設の名前は、「Information Commons」でも「Learning Space」でもなく、「Learning Commons」で

す。ネットで情報を収集し、PC で編集すること。本にあたって知識を獲得すること。そして、人と人とのコミュニケーション・ディスカッションで刺激を与え合い、教え教わること。どの要素が欠けても”Learning Commons”とは呼べないのではないかと思います。

2007 年 12 月 26 日(水曜日)

【21. 日本分野の学習を支える図書館 - East Asian Studies Collection (UMass Amherst) その 1】

University of Massachusetts Amherst では、East Asian Studies Librarian である Sharon Domier さんにご案内いただき、様々なお話をうかがってきました。今回は East Asian Studies Collection、Reference Reading Room の様子や日本語資料の利用の実態について、ご報告します。

University of Massachusetts Amherst, East Asian Studies Collection

<http://www.library.umass.edu/subject/easian/>

●概要

- ・ East Asian Studies Collection と Reference Room が独立したものとして成立したのは、約 40 年前。East Asian Studies 分野以外に独立した Reference Room を持つところはない。
- ・ 現在、W.E.B Du Bois Library 内の 21-22 階に位置する。
- ・ 東アジア全体で約 5 万冊。うち日本語資料約 2 万冊。英語・西洋言語の東アジア関連資料は、一般のコレクションとして取り扱われている。
- ・ 請求記号・分類は LC 分類を採用。日本語資料・中国語資料・韓国語資料を別々に配架することではなく、混配している。
- ・ 教員の研究分野が現在ほとんど文学分野であるため、蔵書も文学分野が中心になっている。

●資料の選択

- ・ 学生教材に適した資料として、絵・写真の多いビジュアルな資料、読みやすく振り仮名の多い大活字本、短くて楽しみながら読めるショートショート作品などを集めている。
- ・ 視聴覚資料として、日本映画の DVD を収集している。できるだけ英語字幕のあるものをそろえたいが、そのような DVD はそれほど多くない。
- ・ マンガも購入したいが、どれをそろえればよいかの選択が難しい。

●資料の購入・入手の問題点

- ・ 日本語資料の購入には、紀伊國屋書店などの代理店を通す。代理店を通すとドル立てで支払いができるが、直接日本の業者（古書店等）と取引しようとするとうち振替などを求められることが多く、支払いができないため、入手もできない。特に美術館・博物館などの図録の入手が難しい。流通ルートにのっていないので、代理店経由では購入できず、直接購入しようとしても支払方法が限られていて購入できないことが多い。古書店にしる美術館などにしろ、あらゆる場面でクレジットカードでの支払いが普及してくれるようになると、入手できる資料の幅が格段に広がって助かる。
- ・ 米国内の他大学の重複本や、日本の大学の重複本などを寄贈してもらうことが多い。

●ILL

- ・ILL 依頼は、学生・教員が直接 ILL 部署に依頼する。Bibliography の授業（別途あらためて紹介します）を受講していれば、学生でも日本語資料の書誌を正確に特定して依頼することができるようになる。
- ・ILL 部署に届いた依頼のうち、ISBN・ISSN のないもの、資料の特定が難しいもの、特殊な機関への依頼を要するものなど、日本情報に関する専門知識が必要なものについて、相談を受ける。
- ・GIF はよく利用しているが、NDL への依頼は割高で FAX や電子送信がされないので、ほかで見つからないときのみ利用している。

●目録

- ・東アジアコレクションの OPAC へのデータ収録率は約 80%。カード目録も現役で提供している。
- ・OCLC に参加。目録登録にあたっては OCLC の書誌を利用している。OCLC では現在早稲田大学や TRC からの書誌データを利用できるため、かなり助かっている。
- ・ただ、できるだけ北米内 ILL ではまかなえないような資料を選んで購入していることもあって、OCLC に書誌がなくオリジナル作成をしなければならない例も少なくない。

●The Benjamin Smith Lyman Collection

- ・Benjamin Smith Lyman (1835-1920、Amherst 近くの街・Northampton 出身) のコレクション。明治時代に、北海道開拓のための技術顧問（地質学・鉱業学）として、来日（1872 年）。鉱脈調査や公共事業関連の仕事を務める。几帳面な観察者で、大量の資料・詳細な記録を残している。
- ・全体で約 4100 冊の図書のうち、約 1800 冊が和装本。ほかに地図約 120 点、地質調査ノート、家計簿、名刺コレクション、書簡などが残る。
- ・和装本の書皮が数多く残されており、保存状態も非常に良い。（和装本の書皮は、日本の図書館では残されていないことが多い。）

2007 年 12 月 26 日(水曜日)

【22. 日米をつなぐライブラリアン - East Asian Studies Collection (UMass Amherst) その 2】

今回ご案内くださった Sharon Domier さん (East Asian Studies Librarian, University of Massachusetts Amherst) は、日本分野を専門とするライブラリアンです。現在、論文誌『大学図書館研究』の編集委員を務め、日本でもたびたび講演を行なっておられます。

Domier さんは週 5 日のうち、3 日を UMass Amherst で、1 日を Amherst College で、1 日を Smith College (Amherst 近くの街・Northampton) で勤めています。選書・発注指示・目録がメインの業務で、加えてサブジェクト・レファレンス、授業による教育活動を行なっています。



Sharon Domier さんに、ご自身の普段の活動、日本の大学図書館・図書館員や情報サービスについてのご意見・ご感想などをうかがってみました。

●ライブラリアンとしての身分について

- ・UMass では、制度上、ライブラリアンと教員がほぼ同じ身分として扱われている。
- ・ライブラリアンはその経験と業績によって、Librarian 1 から Librarian5 まで順にステップアップしていく。ステップアップには、経験の蓄積や論文発表などの業績が必要で、これが仕事をする上でのモチベーションにつながっていく。
- ・大学によっては、ライブラリアンと補助スタッフとの身分が同じで、ステップアップもしていないところもある。

●日本の目録・書誌データベースについて

- ・日本分野の学生・教員が実際に使っているのは、主に OCLC・WorldCAT と早稲田大学 OPAC の WINE。NACSISWebCAT/plus はその次。
- ・WorldCAT や WINE は、NDL-OPAC・WebCAT とちがってローマ字を表示してくれる、また出版社名のヨミを確認することができる。特に教員は、英語で書いた論文のレファレンスリストに出版社名をローマ字で記述しなければならない、その際に WorldCAT や WINE が非常に重宝する。

●Web による学術情報発信について

- ・特に、科研費報告書や博士論文の入手が難しく、それらが積極的にデジタル化され、インターネットでアクセスできるようになってくれるとよい。ただ、機関リポジトリにあるかどうかを調べるということ、あまりやっていない。なにをどう検索すれば自分が望むものが見つかるのかが、まだよくはっきりしない。収録されてくれるようになれば助かる。
- ・近代出版物でも、古典籍資料でも、図・絵・写真など画像データがあるほうがいい。研究対象としても、プレゼン・発表用資料としても、教育用教材としても、画像は重要で、よく使われる。それらを上手に探せるようなサイトがあったり、検索できるツールがあったりするのがよい。

(註：NewYork Public Library

<http://digitalgallery.nypl.org/nypldigital/dgkeysearchresult.cfm?word=Academic%20costume&s=3¬word=&f=2>) の Web サイトなど、資料全体がデジタル化されているものだけでなく、資料内の挿絵・図・写真部分のみがピックアップされて、画像データベースとして Web 公開されている例が多い。)

●日本のライブラリアンへのメッセージ

- ・アメリカの日本分野ライブラリアンと、日本の大学図書館員との交流の場、特に個人同士としての交流の場が持てるとよい。Domier さん自身も、大学図書館研究の編集委員を務めるまでは、日本の図書館員と交流を持つきっかけがほとんどなかった。
- ・そのためには、メールや Web での交流もひとつの手段ではあるが、やはりお互いが実際に会うこと。ACRL などの会議に出席すること。ポスターセッションなど積極的な発表・活動を行なうことなどがよい。

2007 年 12 月 26 日(水曜日)

【23. 日本を学ぶ学生たち - UMass での日本分野講義】

University of Massachusetts Amherst には、日本分野を専門にしている教員が現在 6 人います。学生は、専攻している学生が約 100 人、日本語クラスの取得者は約 200 人とのことです。

ライブラリアンの Sharon Domier さんにご紹介いただいて、いくつかの授業に参加させていただくことができました。アメリカの州立大学で日本語や日本文化について学ぶ学生たちが、どのような授業を受けているかについて、ご紹介します。

●変体仮名の講読

変体仮名（くずし字）を原資料で読む講読の授業です。主に古典文学を専攻する院生が 20 人弱参加しています。私がお邪魔したときは、竹取物語の写本を読んでいた。週 1 回・40 分の授業で、8 週目だそうです。予習の段階でほぼ読めているようでした。

ここではいい勉強方法があれば教えてほしいと求められましたので、京都大学電子図書館の貴重資料画像 (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>) を紹介し、現代語訳や英訳を読んでから原資料にとりかかる方法、同じ作品をちがう資料を使って複数回読む方法、漢字にふりがなのある資料を読んで漢字を覚える方法などを紹介しました。

●Bibliography の授業

学部 4 年生・院生を主な対象とした授業で、図書・論文を検索して見つけることができるようになることを目的としたものです。ライブラリアンの Sharon Domier さんが講師を務め、図書館内の PC クラスルームで行なわれています。半年の授業で、週 3 回なのですが、例えば課題として以下のような問題が出されていました。

「谷崎潤一郎の短編小説で英題を“The Thief”という作品の、原題は何か。また、この英訳が収録されている図書と、日本語の原作が収録されている図書を、それぞれ示しなさい。」

この授業を受講した学生は、ILL や購入依頼の際、書誌を正確に示すことができるようになるそうです。

NDL-OPAC や WebCAT/plus で書誌を確かめたあとで、OCLC・WorldCAT を検索して米国内の所蔵があるかどうかを確認すること、などが紹介されていました。そこで私のほうから「WebCAT/plus の書誌から OCLC・WorldCAT の書誌へのリンクがあれば便利では？」と提案してみたところ、そうなるのと非常に助かる、との声をいただきました。

また、CiNii の検索結果から本文へのリンクがあるが、アクセスできないことが多く、なぜアクセスできないかわからない、そもそもアクセスできるのかできないのか自体もわかりにくい、との意見がありました。

●Media Japan

インターネット上の資料を使って、日本語力をブラッシュアップするという授業です。新聞社サイトの

記事・社説や、ニュース映像やテレビ番組のストリーミング、ブログ記事などを使っていました。

よく使う Web サイトは何かを尋ねたところ、Wikipedia、goo 辞典などが挙げられました。日本語の習得には映画やテレビドラマを見るのが非常に効果的だそうです。また、出席していた学生のほとんどが mixi を利用していました。

2008 年 1 月 16 日(水曜日)

【24. Harvard Depository と自動書庫システム】

以前ハーバード大学の保存書庫・Harvard Depository (HD) についてご紹介しました（【19. Harvard Depository 見学】）が、この記事をご覧になった方から、「ハーバードでは”自動書庫システム”は採用されないのか」というご質問をいただきました。

Harvard Depository

<http://hul.harvard.edu/hd/>

自動書庫システムを採用している奈良県立図書館

<http://www.library.pref.nara.jp/jido/index.html>

自動書庫ブックロボ（金剛株式会社）

http://www.kongo-corp.co.jp/seihin/index_jidou.html

当日我々を案内してくださった HD のアシスタント・ディレクターの方に、お話をうかがってみました。

- ・自動書庫システムは、利用者用の公共スペースを十分に増やすのに、効果的であると思う。実際、自分が数年前に訪れたとある大学の図書館でも、自動書庫システムを採用していて、捻出できたスペースを学生の勉強場所として提供していた。
- ・ただし、その機械が蔵書に与えかねないダメージについては、慎重に考えざるをえない。実際にダメージを受けている本を複数の図書館の自動書庫システムで見えた。ある図書は、出納システムに対応させるため、直接マーカーでナンバーが書き記されていた。長い道のりをかけて運搬される間の振動も非常に気掛かりで、本の製本状態を悪くし、寿命を短くしかねない。（もちろん、開架書架の本もまた、利用者の乱暴な取り扱いによって傷む可能性がある。）
- ・さらには、自動書庫システムであっても HD 方式であっても、運搬し、ケースに納めるのは人間のスタッフである。彼らがいかに本を丁寧に扱うかが重要であり、そのためのトレーニングが充分になされなければならない。
- ・我々が採用している方法（HD 方式）は、利用頻度が極めて低い資料に対して有効なものである。良く使われる資料については逆にコストがかかるばかりである。
- ・HD の次期増設の際には、自動書庫システムを導入するかどうか検討に加えることになるだろう。

前回ご紹介しましたように、HD は「資料を永年保存すること」という使命を果たすために造られた施設ですので、彼が資料へのダメージという短所を重く受け止めているのも当然のことだと思います。一方で、資料の永年保存よりも、効率的な出納や学習場所の確保を優先させる、という考えを持った大学や図書館であれば、自動書庫システムは有効な技術のひとつであると言えるでしょう。

重要なのは、技術があるから、それが最新だから採用する、ということではなく、その図書館にとって

最も優先して守るべきものがはっきりしているかどうか、そして、その使命を果たすのに最適な方法は何か、ということではないかと思います。

2008 年 1 月 24 日(木曜日)

【25. Yale University Library】

Yale University (イエール大学) は、1701 年設立、全米で 3 番目に古い歴史を持つ大学です。ニューヨークから北東へ約 100 キロのニューヘイブンという街にあります。研究やスポーツなどにおいて、ハーバード大学とは何かとライバル関係に挙げられる存在のようです。学生数約 13000 人、研究者約 3000 人。図書館の蔵書数は約 1250 万冊に及びます。

11 月の終わり、Yale University の中央図書館である Sterling Memorial Library、およびその中にある East Asia Library を訪問してきました。

Yale University Library

<http://www.library.yale.edu/>

Sterling Memorial Library は 1930 年の建物ですが、ゴシック様式の教会をモチーフとしてデザインされています。ステンドグラス、柱や壁の彫り物、メインカウンター付近に掲げられたフレスコ画など、ヨーロッパの美術館のようです。ただ古く美しいだけでなく、回廊型の建物の中庭に天井を設けて Music Library としたり、地下通路を設けて新設された学習用図書館へ直接行けるようにするなど、利用の便にあわせた改装も適宜行なわれているようです。

この Sterling Memorial Library は人文・社会系の総合図書館ですが、学内には他にも貴重書専門の Beinecke 図書館など、計 22 の図書館があります。

East Asia Library が管理を担当する東アジア言語資料は、全体で約 70 万冊。うち日本語資料が約 25.6 万冊で、年間約 5000 冊増加しています。リーディングルーム及びオフィスは Sterling Memorial Library の 2 階に位置し、日中韓各言語による参考図書・雑誌、及び英語で東アジア分野の参考図書・雑誌が配架されています。それ以外の図書は、日本語・中国語・韓国語各資料とも、すべて Sterling Memorial Library 館内の一般書架上に、英語等の西欧言語資料と同様に請求記号順に混配されています。この混配は 1949 年、日中韓各言語のコレクションがまだそれほど多くなかったと思われる頃に開始されたものです。その後、これらを別置する案もあがったようですが、コストの問題などから実現せず、現在に至っています。

学内には、東アジア言語・文学の部局以外には、東アジア分野を専門とする独立した部局はありません。学生・研究者は歴史であれば歴史の、人類学であれば人類学の各分野の部局にわかれて所属するかたちになります。これら学内各所に散ったファカルティ・メンバーによって East Asia Council が組織されており、研究者のほか、美術館のキュレーター、ライブラリアン等が参加しています。

Yale における東アジアコレクションの歴史は、1870 年代に Addison Van Name がコレクションをスタートさせたことに端を発します。日本語のまとまった蔵書は 1873 年 O.C.Marsh によって寄贈されました。その後、歴史学者として有名な朝河貫一が初代東アジアコレクション部長を兼任し、LC (米国議会図書館) と Yale との依頼を受けて、日本語資料の集中的な購入・収集を行ないました。これにより約 22000 冊の

和書が収められ、その後の East Asia Library における日本語資料コレクションの基礎となります。

このときに収集された和書のうち、古典籍資料にあたるものはほとんどが Beinecke 図書館（古典籍・写本専門の学内図書館）に収蔵されています。Japanese Manuscript Collection（朝河貫一による収集、中世史料 700 タイトル・1200 冊）のほか、Yale Association of Japan Collection（1930 年代の収集・寄贈、11 世紀東大寺文書、太閤検地文書、経典、奈良絵本）など。また、Sterling Memorial Library 館内には文書類を管理する Manuscripts & Archives 部署があり、朝河貫一の書簡・日記等が収められています。

Yale University Library は現在、Microsoft の蔵書デジタル化プロジェクトに参加しています。著作権の切れた英語図書が対象で、作業を行なうのは Kirtas (<http://www.kirtas-tech.com/>)。スキャンされたデータは Microsoft Live Search で検索可能となり、大学側でもそのデータを保持することになります。対象図書は 10 万冊に及びますが、それでも「少ない」と言う人もいます。蔵書デジタル化事業についてはどの大学も積極的に取り組んでいるようです。日本語資料については、前述の Yale Association of Japan Collection が東京大学史料編纂所によってデジタル化され、現在は Beinecke 図書館のデジタル画像データベースで公開される予定です。

2008 年 1 月 24 日(木曜日)

【26. East Asia Library – Yale University Library その 2】

Yale University の East Asia Library には、日本分野専門のコレクション&レファレンス・ライブラリアンが 1 人、日本資料専門のカタログガーが 1 人いらっしゃいます。East Asia Library 全体のトップであるキュレーターも、日本研究が専門の方です。

コレクション&レファレンス・ライブラリアンの中村治子さん、カタログガーの鈴木啓子さん、キュレーター（東アジア図書館館長）の Ellen Hammond さんにお話をうかがいました。

●データベース契約における障害・問題点

- ・ Japan knowledge、聞蔵（朝日新聞）などを契約。
- ・ 学内の中央組織にデータベース契約専門の部署があり、日本の有料データベースを契約するときにもそこを通さなければならない。が、日本のデータベース業者側の提示している利用規約が、米国側の契約上の基準や利用実態に合致しないため、契約ができなくなってしまうことが多々ある。例えば、米国側では「大学内のメンバーであれば、学外のネットワークからでもアクセス可能であること」が必須の条件であることが多いが、日本側の利用規約にそれを認めない旨が記載されているために、契約が認められない、ということがある。また、日本側の利用規約に「データの転載を認めない」というような文言があることによって、論文の参考文献リストへの記載などが不可能になるおそれがある。日本ではそれほど問題視されずに契約が成立するような規約であっても、米国の契約関連の部署は規則の遵守について極めて厳密に考えるため、少しでも訴訟を受ける可能性のある契約や、規約にあいまいな表現の残る契約は避けようとする。（ハーバード・イェンチン図書館でも、「ユーザの不正利用の責任は図書館が負うこと」という条件のため、契約が許可されない例があったようです。）
- ・ 以上のような場合、日本側の業者・代理店と何度も交渉しなおしたり、直接日本に出向いてお互いに意思を確認しあうなど、たいへんな時間とエネルギーを費やすことが多い。それでも、お互いに継続してコミュニケーションを取り合うことが重要である。
- ・ 但し、このような交渉は、アメリカの東アジア分野図書館という、日本側から見れば小規模・少数のユーザからの要求・説得だけでは、限界があり非常に難しい。利用規約や契約条件の文言があいまいであったり、実際の利用に即していなかったりといったことは、日本の大学図書館・ユーザにとっても好ましい状態ではないはず。このような場合には、衝突を避けて契約に応じるのではなく、ぜひ日本の大学図書館側からも要求を出し、説得を試みることによって、事態を進行させてほしい。

●日本への ILL 依頼

- ・ ILL 依頼は、どのような言語・国の資料であれ、すべて館内の ILL 専門部署が集中して担当する。日本の図書館に資料を依頼する利用者も、直接 ILL 部署に依頼を送り、依頼業務も館内の ILL スタッフが執り行う。ILL スタッフは日本語がわかるわけでも日本の図書館事情に精通しているわけでもないで、ルー

チンな処理ではないなどの場合には、日本分野専門ライブラリアンのところに相談が来ることがある。

- ・ GIF は、日本側の参加館が多いのが助かっている。ただ、同じ大学内の資料であっても、別の図書館や部局にあるために使えない、という例が多い。そのためか謝絶されることが多く、結果的に利用しづらくなる。

- ・ NDL の ILL サービスは、ILL スタッフが日本語がわからず、NDL のサービスを使いこなせないため、利用されることが少ない。クレジットカード支払いができるのが利点ではある。

- ・ CiNii のペーパービューは、日本語がわからない ILL スタッフでも比較的使いやすいシステムになっており、よく利用されているようである。ただ、CiNii のライセンス契約条件・規約が、契約部署による基準に合致していないため、契約ができない。

●日本語資料の目録・書誌

- ・ OPAC での日本語文字表示が実現したのは、2006 年。但し、書誌自体は長い期間かけて様々な形で作られており、日本語データが入っていないものが多少あったり、分ち書きされているものとされていないものがあったりする。

- ・ OCLC に参加。

- ・ 紀伊国屋書店に図書を発注した場合、OCLC に対応する北米基準の書誌がなければ、書誌レコードを作成・納品してくれる。昨年から一部コピーカタログも依頼している。

- ・ OCLC には早稲田大学からの書誌レコードが収録されており、それを北米の基準に即した形に編集して利用できるの、たいへん助かっている。ただ、昨年夏頃に旧 RLIN 内の日本語書誌のデータが収録され、結果的に件名・著者標目などの重複したデータ、北米の基準に合致しないデータなどが急増してしまった。書誌レコードやデータが増えること自体はよいのだが、このようにかえって手間が増える結果となってしまう例もある。

- ・ 現在の図書館 OPAC (Yale に限らず) は、書誌レコード内のデータをフルに活用しきっていない。もっと有効活用すれば使いやすく、いろいろなサービスを提供できる OPAC になるはずである。そういった次世代型 OPAC への移行を、Yale でも準備中である。

●その他

- ・ 日本語の図書・論文などのフルテキストデータがオンラインで手に入らない件が、非常にフラストレーションを感じる。

- ・ Yale University の図書館には、中国や韓国からはたくさんの visiting librarian が来ているのに、日本からはまったく来てもらえていない。1 日・2 日の見学としての訪問だけではなく、長期間の交流・交換プログラムとしてもっと積極的に来てほしい。

2008 年 2 月 6 日(水曜日)

【27. University of Washington】

1 月半ば、シアトルにある University of Washington を訪問してきました。



1861 年創立の University of Washington は、学部生約 3 万人、院生約 1 万人、教員・研究者・スタッフ約 25000 人。海外からの留学生が全体の約 1/4 を占めているそうで、キャンパス内を歩いていると、たくさんの東アジア・東南アジア系の学生を見かけます。

学内には計 22 の図書館があり、全体で図書 500 万冊、その他の資料を数百万点所蔵しています。

メインライブラリーにあたる Suzzallo Library は、ワシントン州の保存図書館として子供用図書と行政資料を集中的に収集・保存しています。また、州立大学の図書館であるため、一般の人でも自由に入館利用が可能です。

学部生用図書館である Odegaard Library は、現在ラーニングコモンズとしての機能をメインに持たせており、学内 IT 部署による学生利用端末とそのサポート、Writing Center、グループ学習室、メディア編集室・撮影室などを提供しています。（ラーニングコモンズについては【20. 学習活動のすべてをまかなう – Learning Commons (UMass Amherst)】を参照。）また、情報リテラシー教育、利用講習会などのインストラクション活動が非常に盛んで、レファレンス・ライブラリアンが文献収集に関する講義を担当するのはもちろん、情報リテラシーに関するデジタルコンテンツの開発・作成などについては専門の部署が担当しています。

University of Washington Libraries

<http://www.lib.washington.edu/>

UWill

<http://www.lib.washington.edu/uwill/>

Research 101

<http://www.lib.washington.edu/uwill/research101/>

East Asia Library の Keiko Yokota-Carter さんに、Suzzallo Library、Odegaard Library、East Asia Library を案内していただき、お話をうかがいました。今回は特に、DVD などの視聴覚資料について、OPAC・目録データベースと、OCLC WorldCat のローカル利用について、ご報告します。

●視聴覚資料の提供と入手

・視聴覚資料の提供・サービスを主に行なっているのは学内のメディアセンター（学部生図書館内にあり）であるが、日本映画 DVD の英語版はメディアセンター、日本語版は East Asia Library といったように棲み分けができています。

・メディアセンターでは、所蔵していない DVD へのリクエストに対応するサービスとして、“NETFLIX”を利用している。“NETFLIX”は一般に人気の DVD レンタルサービスで、オンラインでオーダーして、郵送で受け取ることができる。“NETFLIX”との協議で、教員による講義教材用・研究用としてのみ、利用が可能となった。サービス・受付はメディアセンターが行ない、費用もメディアセンターが負担している。

（注：通常の ILL 費用は利用者自身ではなく図書館が負担） 購入するよりも安く、かつ、ILL では入手し難かったり対応してもらえなかったりという DVD が、都合よく入手できるので非常に便利である。

・East Asia Library における日本 DVD 入手については、これまで、著作権や海外販売不許可に関する問題、リージョンコードの問題、字幕・吹き替えに英語がないなどの理由で、なかなか購入できなかった。それでも、例えば語学クラスなどでの利用リクエストが多く、また既存のビデオテープ資料の内容が古くなっていく一方であることもあって、様々な方法で入手している。これまでにあった例としては、舞台演劇の DVD など一般に流通していないものを購入しようとして、最初図書館相手に販売してもらえなかったものを、交渉の末、研究用資料としてのみの使用を条件に買うことができた。香港の DVD 販売サイトで、香港正規版の日本映画 DVD を購入。日本のマンガ・映画を英訳・出版・販売する米国内の会社から購入、など。

●East Asia Library における OPAC・目録データベース

・目録データベースへの収録率は約 80%。現在でもカード目録を現役で提供している。

・現在の OPAC で CJK（Unicode）対応が実現したのは、4 年ほど前。システムは INNOPAC を使用。但し、INNOPAC では韓国語の検索・取り扱いには専用のソフトを用いる必要があったが、当初はそれが搭載されていなかったため、対応に時間がかかったり、その負担者について問題になったりした。

・「Pre-Cat」：OCLC に既存書誌がなかったり、あっても不正確・不備が多いなどの場合、OCLC 書誌の登録・ダウンロードをいったん保留し、ローカルのデータベースのみに簡易書誌（書名・著者名・出版事項・形態事項と連番のみ、分類・件名なし、請求記号付与なし）を作る。フルレコードでカタログリングするまで時間がかかる場合でも、これによって利用者への新着図書の提供を可能にしている。

・最近の受入分については、書誌レコードに紀伊国屋書店 **Bookweb** の書誌・内容紹介ページへのリンクを付与している。図書館の書誌レコード、特に「Pre-Cat」だけでは、例えばそれが同じ作品の小説版なのかコミックなのか DVD なのかが、利用者にはわかりにくいことがある。西海岸エリアの紀伊国屋書店 **Bookweb** の注文可能なページにリンクすることで、紀伊国屋書店の理解を得た。

・所蔵・受入している日本語雑誌のうち、オンラインでアクセスできる紀要・CiNii 収録雑誌・オープンアクセス誌について、OPAC の書誌レコードからのリンクを付与している。所蔵・受入している全タイトルについて、学生バイトによる助けを得て、インターネット上の資源の有無を調査し、書誌レコードに手動で入力した。計 400 タイトル。全文ファイルがあることが理想だが、抄録・目次情報だけでもリンクを形成している。

●WorldCat Local

・WorldCat Local : OCLC の WorldCat をローカライズして、自館の蔵書検索システムとしての利用が可能になるというもの。現在は試行段階で、University of Washington が試行版第 1 号としての提供を開始している。（2007 年 4 月から）

・ローカルの OPAC システムとして利用できる。検索結果の関連度順表示、利用頻度順表示、版違い資料の一括表示ができる。参加コンソーシアム蔵書やオープンアクセス資料、ERIC・MEDLINE・ArticleFast などの論文データベースも検索対象にできる。e-resource であれば全文へのリンクを提供。ファセットによる絞り込み・ブラウジングができるなど、OCLC WorldCat が持つ機能をそのまま利用できる。

・現在は試行段階で、従来の OPAC と WorldCat 版 OPAC とをともに提供している。これを将来的に WorldCat 版のみにしようという動きが学内にはある。が、ローカルデータベースの書誌レコード中に独自に入力しているデータ（自館で入力した件名・分類や、上記の日本語雑誌の全文への URL など）や、書誌レコード自体をローカルデータベースのみに作成しているもの（上記の Pre-Cat の例など）は利用できなくなってしまうため、導入には問題も多い。

2008 年 2 月 14 日(木曜日)

【28. Google Library Project – University of Michigan にて】

Google Library Project は、Google と提携図書館による蔵書スキャン・インデクシング事業です。Google が各提携図書館の蔵書をデジタル画像として読み取り、データ化して、全文検索を可能にするというもので、著作権の切れたものや出版者許諾の得られた図書などについては、全文または一部を無料で見ることができます。

2004 年 12 月、Google が最初に発表した Library Project の提携先は、Harvard、Stanford、New York Public Library、Oxford、そして University of Michigan（以下 UM）の 5 つでした。他の多くの提携図書館が、その提供資料を著作権の切れたもの、評価・選択したものに限っているのに対し、この UM では内容・分野、年代、著作権の有効・無効に関わらず、ほぼすべての図書館蔵書を Google に提供しています。2004 年の試行段階を経てスタートし、2005 年には Google Print（当時）サイトから、2006 年には UM から順次提供が始まっています。

University of Michigan Library

<http://www.lib.umich.edu/>

MBooks – Michigan Digitization Project

<http://www.lib.umich.edu/mdp/>

Google Books Library Project

<http://books.google.com/googlebooks/library.html>

1 月末、この University of Michigan を訪問し、Google Library Project 担当者の方にお話をうかがうことができました。

●概要

- ・対象となるのは、学内図書館ほぼ全蔵書である約 700 万冊。2004 年から 6 年間かけてスキャンしていく予定。現在、週あたり 3 万冊のペースで処理されており、いまのところスケジュールとしては予定通りである。（プロジェクト終了後の蔵書については未定）
- ・スキャンした後、資料の画像データと OCR 処理されたテキストデータが、Google から UM に提供される。UM ではこのデータを「MBooks」として利用者に提供している。
- ・蔵書の全文テキスト検索は、原則としてすべての資料で可能。全文閲覧は、著作権の切れたもの、及び、パブリック・ドメインのものについてのみ可能。
- ・参加への理由。(1)蔵書への検索・アクセスの新しい形をユーザに提供できる。(2)資料保存のための大規模な媒体変換が可能になる。(3)蔵書をデータとして活用することで、単なる蔵書本体へのアクセスを越えた、新しい図書館活動を期待できる。

・あくまで図書の検索・発見のためのものであって、全文をオンラインで無料提供することが第一目的の事業ではない。また、紙媒体としての資料の購入が減ることはないし、提供を減らすこともない。

●対象資料

- ・学内 700 万冊の、製本された印刷資料のほとんどがスキャンされる予定。
- ・対象とならない資料は、製本されていない資料（新聞、パンフレット、地図など）。印刷されていない資料（写本など）。サイズの大きい資料。破損などの理由でスキャンに耐えられない資料。
- ・2004 年発表当時は、プロジェクトのスタートと発表をスムーズにするため、協議・検討に時間をかける必要のある図書館（法学図書館、貴重書図書館など、学内であっても別組織である図書館）は対象としていなかった。が、法学図書館も貴重書図書館も姿勢としては積極的であり、現在では蔵書スキャンを実行する予定である。

●スキャン・データ化作業

- ・出納・運搬・スキャン・データ化などにかかるすべてのコストを、Google が負担する。スタッフの雇用も Google が行なう。
- ・スキャンは保存書庫である Buhr Shelving Facility の蔵書から開始され、順次、各部局図書館の蔵書にとりかかる。
- ・UM のある Ann Arbor 近郊の場所に、Google が専用の建物を設け、作業場としている。（他の提携図書館の場合は、遠隔地の拠点作業所まで資料を運搬してそこでスキャンされる、というようなところもある。）
- ・スキャンに関する技術、方法、規模は公には発表されておらず、すべて秘密である。スキャン作業場がどこにあるかについては、UM の担当者にも一切知らされていない。
- ・Google はスキャンにあたって、製本を解いたり壊したりすることはない。通常の図書館利用と同様に（慎重に）扱う。
- ・Google スタッフによる資料の取り扱いとスキャン方法については、UM 図書館・保存部署の資料保存の専門家が事前にチェックし、問題ないことを確認済みである。
- ・スキャンにあたっては、まず書架にあるすべての蔵書が Google 作業場に持ち込まれる。そこで、物理的条件などからスキャンが行なえないもの（例：破損が激しい、紙質がもろい、製本が弱い、サイズが大きい、対象外資料（写本・非製本）など）があれば、スキャンされずに図書館に戻される。図書館は戻されてきた資料について、「製本・修復後再送する」「自前でデジタル化作業を行なう」などを判断する。
- ・スキャンが可能かどうかの判断は、その本が古い時代のものであるか、貴重であるかどうかよりも、物理的状态やサイズによるところが大きい。
- ・スキャンのために持ち出された資料は、その資料が現在どこにあるかが OPAC に表示される。2・3 日から 2 週間で再び元通り利用可能になる。

●画像データ・テキストデータ

- ・Google から UM に提供されるのは、画像データ（600dpi の TIFF。図版があれば 300dpi の JPEG2000

- ・（カラー&モノクロ））、OCR で読み取ったテキストデータ（UTF-8）。各ページに関するメタデータ。
- ・日本語の資料も同様に OCR 処理される。読み取りの正確さは、言語・文字種よりもむしろ、紙質や印字の状態、画質がクリアかどうかなどに左右される。
- ・UM にデータが届くのは、資料スキャンから 3-6 ヶ月後。

●MBooks

- ・UM のデジタル化された蔵書を「MBooks」と呼んでいる。
- ・MBooks は、UM の OPAC である Mirlyn から検索可能である。
- ・MBooks のシステム（利用者用閲覧インタフェース、OPAC への自動リンク、著作権管理データベースなど）は、館内の電子図書館の部署で開発したものである。
- ・Google に図書を送るときに、書誌レコードとアイテムレコードを添付する。UM に画像データ・テキストデータが届き、MBooks のサーバに格納されると、OPAC の書誌レコード・アイテムレコードに各デジタルデータページへのリンクが自動的に形成される。
- ・Pageturner（利用者用閲覧インタフェース）では、資料内の全文テキスト検索、画像・テキスト閲覧、現物の所蔵場所確認などができる。資料間の横断検索や履歴保存などは今後の課題である。

MBooks および Google Books Search の例

「Pleasantries of English Courts and Lawyers」（英語・全文閲覧可）

<http://hdl.handle.net/2027/mdp.39015063810850>

<http://books.google.com/books?vid=UOM39015063810850>

「5 年後、10 年後の”経営環境”」（日本語・閲覧不可）

<http://hdl.handle.net/2027/mdp.39015067608540>

<http://books.google.com/books?vid=UOM39015067608540&pgis=1>

●著作権

- ・蔵書の全文検索は、原則としてすべての資料で可能。全文閲覧は、著作権の切れたもの、及び、パブリック・ドメインのものについてのみ可能。
- ・蔵書をデジタル化することによって、資料の購入が減ることはいないし、利用者への提供を減らすことも、学生のテキスト購入に影響を与えることもしない。
- ・権利情報のデータベースを構築し、どの資料はどのように提供すべきか／しないべきかを判断・蓄積している。権利状態は「パブリックドメイン」「米国内ユーザに対してパブリックドメイン」「著作権有効」「著作権者不明」「学内のみ利用可能」「オープンアクセス」など。理由は、「書誌から判断」「契約による」など。
- ・著作権状態の調査・判断は、UM 図書館の専門スタッフ（知的所有権の専門家）が行なっている。Google の判断や公開状態に倣っているというわけではない。
- ・著作権に関する調査は継続して行なわれており、その著作が公開可能と判明した時点で随時公開してい

くかたちになる。

- ・UM 出版局とはまだ提携できておらず、公開の許可はもらっていない。

- その他

- ・UM はパブリック大学（州立）であり、この Google Library Project についても出来る限りオープンにするよう、MBooks の Web サイト (<http://www.lib.umich.edu/mdp/>) でドキュメント・FAQ などを適宜公開している。

- ・Google Library Project とは別に、デジタル化による保存・公開事業も、引き続きこれまでどおり力を入れてやっていく。Google の技術・取り扱いにそぐわないようなレアブックコレクションのデジタル化など、現在までに 15000 冊を実現している。

- ・このプロジェクトは「資料を利用可能にする」という、図書館の持つ中心的なミッションのひとつを実現させるものである。UM でこのプロジェクトと同じことをやろうとすると、1600 年にかかることになり、それが 6 年で実現できることの意義は非常に大きい。そういった意味でも、日本でこういうプロジェクトに提携できる機会を得たときには、いろいろな問題はあると思うが、それでも積極的に参加すべきである。

2008 年 2 月 14 日(木曜日)

【29. どこでもハーバード - Web サービスと PIN System】

ハーバード大学には、図書館に限らず、さまざまな Web サービス・Web コンテンツがあります。それらサイトへのアクセスを個々の ID とパスワードで管理しているのが、Harvard University PIN System です。

Harvard University PIN System

<http://www.pin.harvard.edu/>

かつて 7 月の記事（[7. Harvard Depository](#)）でも少しご紹介しましたが、例えば郊外書庫にある図書を注文したり、自分がいま借りている本を確認したりというときには、蔵書検索システムである HOLLIS から「MyHOLLIS」にログインします。

fig1 : 蔵書検索システム HOLLIS



HOLLIS からログインするために「MyAccount/Renew」のリンクをクリックすると、画面はいったん PIN System の画面にジャンプします。

fig2 : PIN System ログイン画面

Harvard University
PINSYSTEM

Login to:
HUL Access Management Service

- FAQ
- HELP
- DISABLE AUTO-LOGIN

Login type: Harvard University Id (HUID) [What is a login type?](#)

Login Id:
12345678 [What is a login id?](#)

PIN / Password:
•••••••• [What is a PIN / Password?](#)

Login [New user? Forgot your PIN / Password?](#)

☐ Automatically log me in on this computer in the future. [What is Auto-Login?](#)

Mon Jun 04 10:42:28 EDT 2007
Copyright © 1999 - 2007 The President and Fellows of Harvard College

この画面が現れたら、自分の ID とパスワードを入力します。このログインシステムは学内のほぼすべての Web サービスに共通のものです。どのサービスでいつログインするときにも、いったんこの PIN System の認証を通過することになります。

また、ID は身分証番号（学生証・職員証番号）と同じもの。パスワードは身分証の発行と同時に手続きが行なわれます。

正しい ID とパスワードが入力されると、いったん次のような画面が表示されます。

fig3 : ログイン成功画面

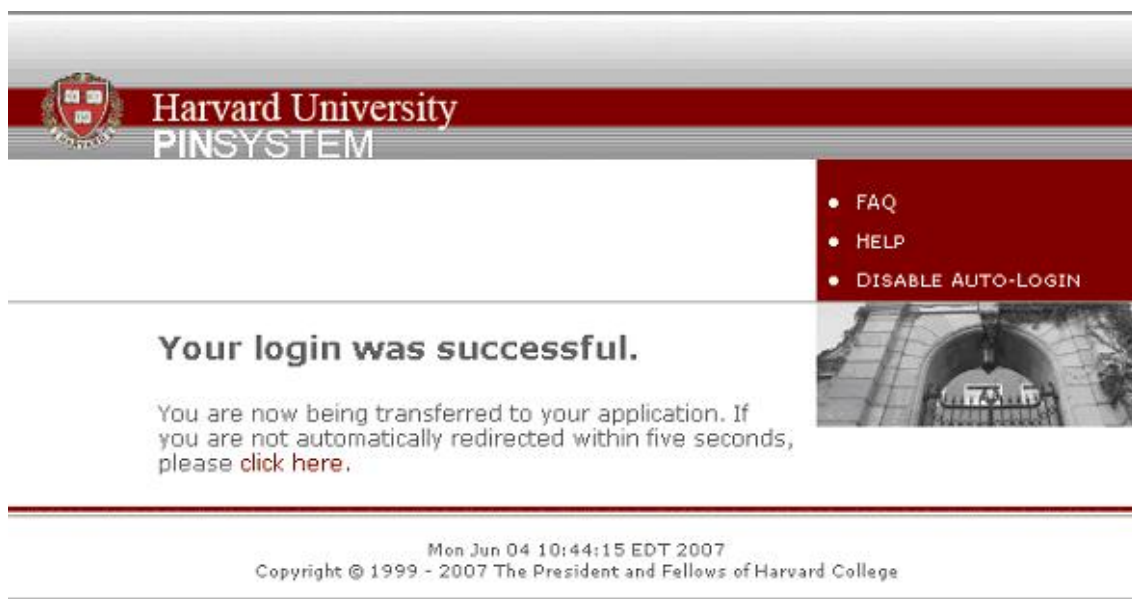
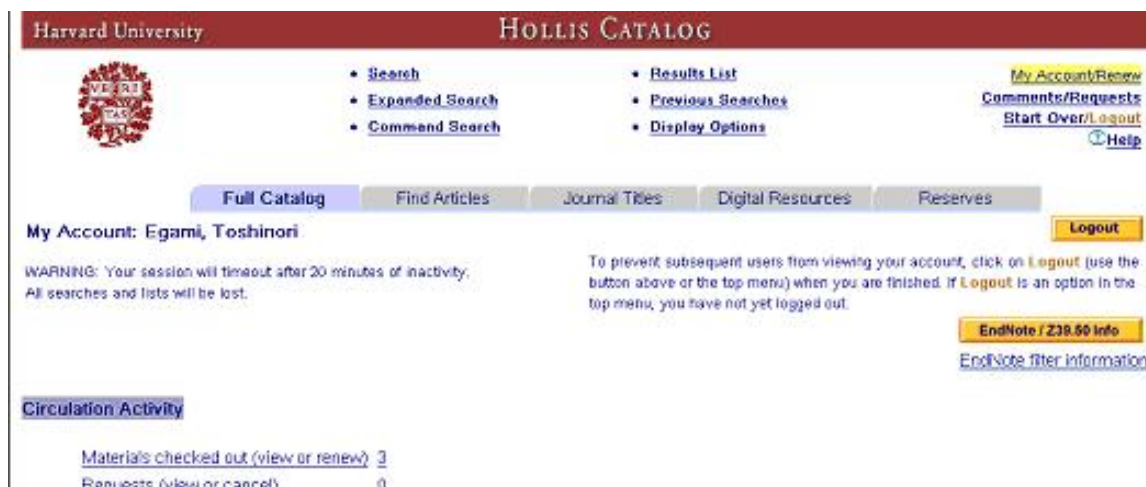


fig4 : ログイン後は、もとのサービス画面に戻る



ログインが成功した後は、MyHOLLIS なら MyHOLLIS のサービス画面に戻ります。

この PIN System による認証手続きは、学内のほぼすべての Web サービスに共通して用いられています。

fig5 : MyHarvard

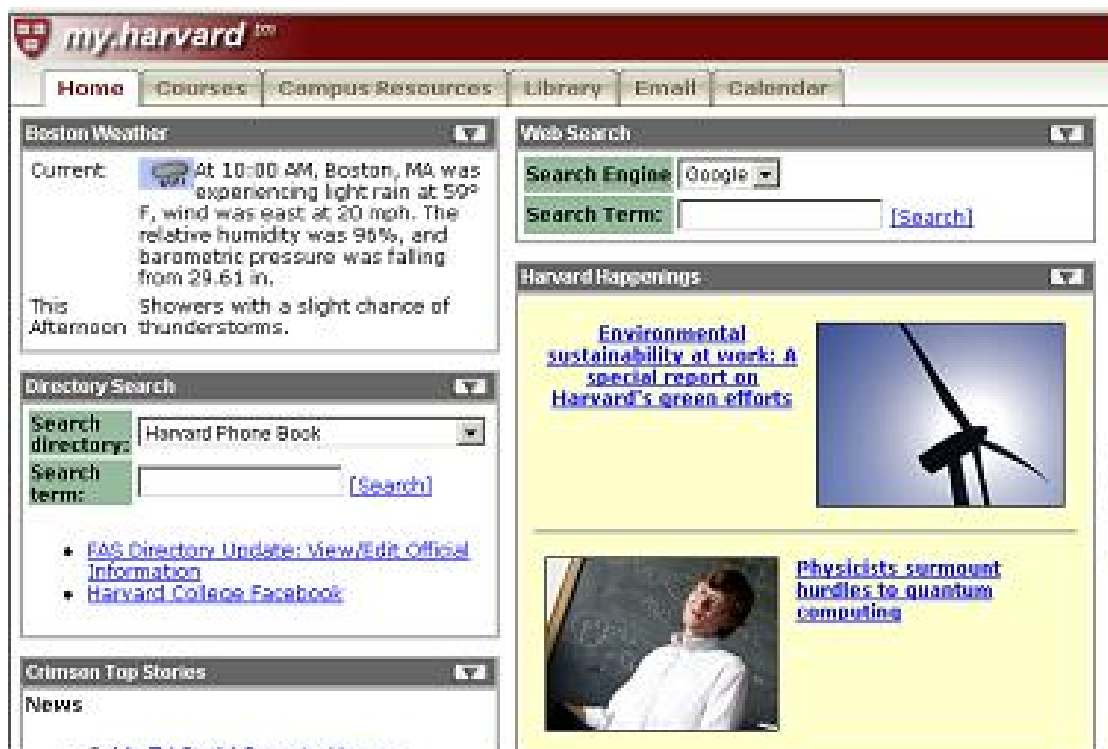


fig6 : コース・ウェブサイト

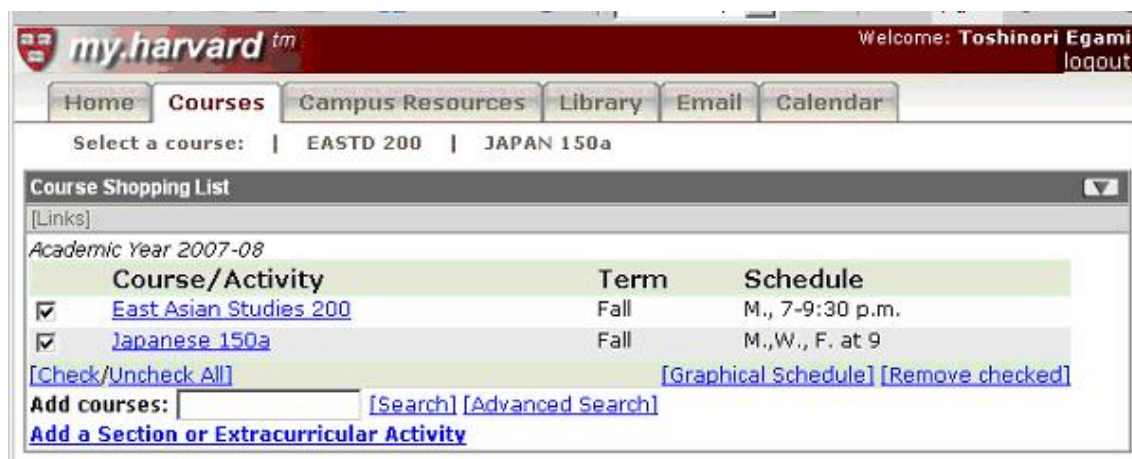


fig7 : HARVIE （職員用の人事給与情報などを取り扱うサイト）

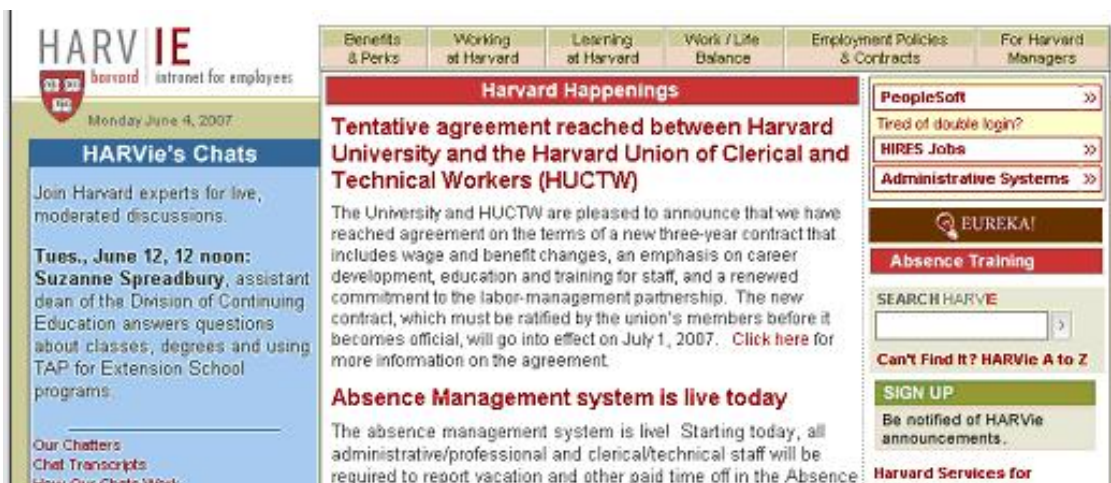


fig8 : 学内ライブラリアン専用の業務情報サイト

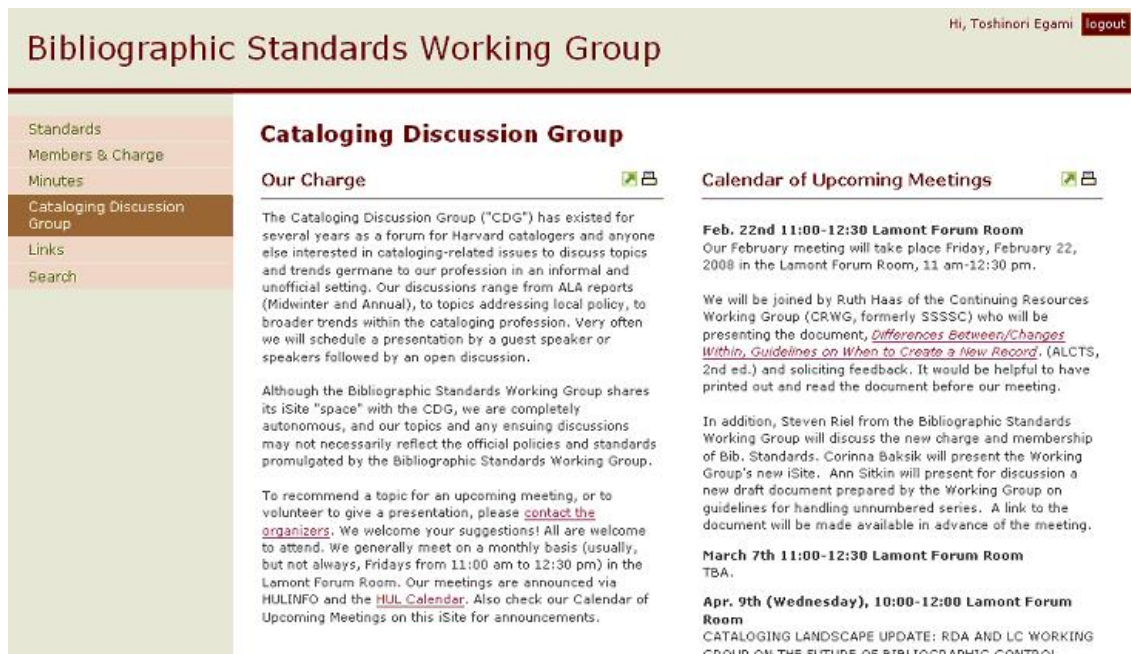
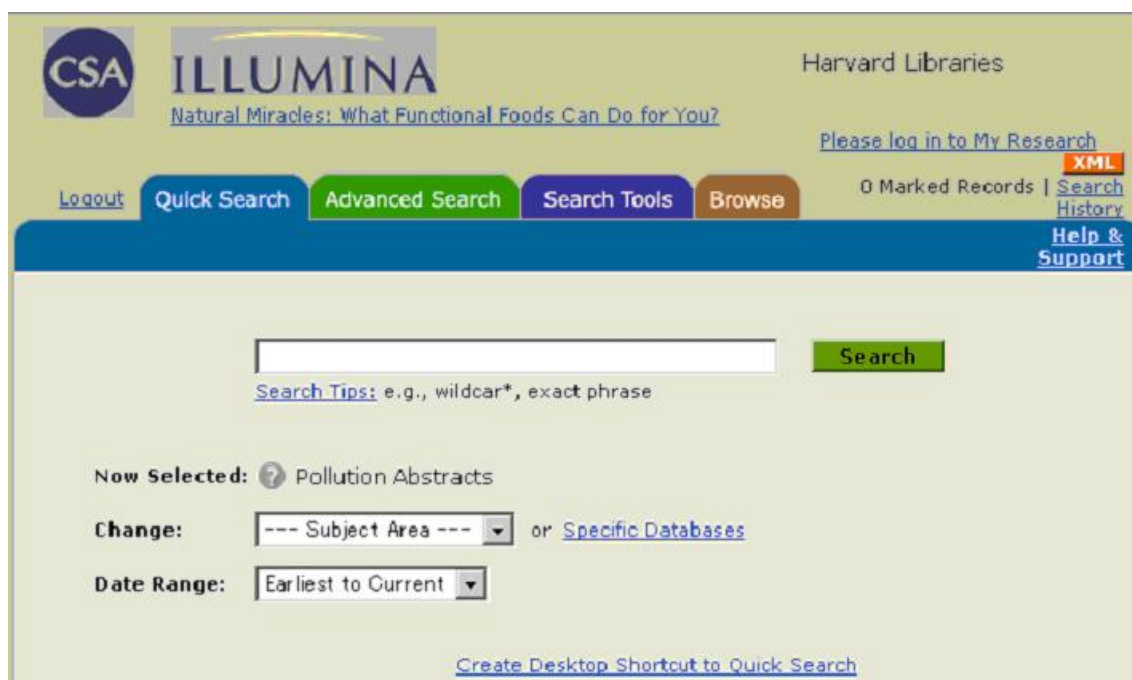


fig9 : 大学で契約しているデータベース・電子ジャーナル類



大学で契約しているデータベース・電子ジャーナルへアクセスするときにも、この PIN System による認証を受けます。この認証画面は大学外のネットワークからもアクセス可能ですので、ハーバード大学の構成員であれば、自宅や海外からでも変わらず契約データベース・電子ジャーナルを利用することができます。

学生生活にもっとも密着したサービスが「Crimson Cash」と呼ばれるサービスです。これは学生・職員各自が自分の身分証番号をアカウントとして口座を持ち、現金やクレジットカードでその口座にあらかじめ入金しておいて、学内のカフェ・売店などで身分証を用いて支払いをする、というサービスです。

Crimson Cash

<http://www.cash.harvard.edu/>

fig10 : Crimson Cash にログイン後の画面

ADD CASH NOW

GENERAL INFORMATION

- < [Crimson Cash Home](#)
- < [Donations](#)
- < [Tell Me About Crimson Cash](#)
- < [FAQ](#)
- < [News](#)
- < [Department Copier Cards](#)

YOUR ACCOUNT

- < [Add Value](#)
- < [Account Activity](#)
- < [PIN Change](#)
- < [Lost/Stolen Card](#)
- < [Recent Value Additions](#)

Let me look for the exact pennies
A quaint old phrase. Tell your friends how much quicker Crimson Cash is, and let's put pennies in their place: in a jar on your dresser.

Crimson Cash

Date	Description	Amount	Balance
5/18 12:09 PM	Dudley/MICROS/HUDS//	\$-5.50	\$8.53
5/21 12:07 PM	ZHLS/HARKNESS CAFETERIA/	\$-4.33	\$4.20
5/22 06:47 AM	Adjustment - Deposit	\$50.00	\$54.20
5/22 12:14 PM	ZHLS/HARKNESS CAFETERIA/	\$-4.58	\$49.62
5/29 08:38 AM	ZONC/CGIS/CAFE//	\$-1.46	\$48.16

Current Balance: \$48.16
[View More Activity](#)

Please Read These 3

この Crimson Cash は学内各図書館でのコピー料金、プリントアウト料金の支払い、ときには図書返却を延滞したときの罰金の支払いにも使われます。

2008 年 2 月 14 日(木曜日)

【30. 探しやすい書庫を目指して - Widener Library 書庫のサイン・フロアマップ】

1 月末、ハーバードのメインライブラリーである Widener Library の書庫フロア（利用者が入庫可能）に、新しいフロアマップが設置された、という案内が、学内の図書館ニュースとして流れました。

各フロア毎に設置された新しいマップは、蔵書の分類区分ごとに色で塗り分けられ、どの分野の本がどこにあるかがすぐに参照できるように工夫されています。Widener の書庫内には、院生・教員用に割り与えられた予約制のキャレルがたくさん設置されているのですが、そのキャレルの位置もマップ上に記されています。

このようなマップ、サイン、案内ガイド類を作成しているのは、Widener 内での書庫管理・蔵書整理を専門に行なっている Stacks Division というところです。この部署は、貸出部署・ILL 部署・入館管理の部署とともに Widener での Access Service を担っています。

Widener Library はハーバード大学のメインライブラリーであり、アメリカで最古、世界でも最大と言える学術図書館です。郊外に保存書庫（Harvard Depository）はありますが、それでも 300 万冊を実際に館内書庫に収蔵しています。書庫は地上から地下までで計 10 フロア。さらには隣接する Pusey Library の地下書庫をもその一部として使用しており、両館は地下通路で接続しています。棚の数は総計約 9 万棚で、その長さは 80km に及びます。

図書を分類・配置するための請求記号には、現在の LC 分類による番号と、かつて使われていた旧 Widener 分類による番号との 2 種類があります。両者は書庫内で別フロアに分かれることなく、同じ分野の図書が近くに配置されるよう、新分類の書架と旧分類の書架とが分野ごとに隣接して並んでいます。

”Organization of Widener Collections”

http://hcl.harvard.edu/libraries/widener/docs/wid_stacks_org.pdf

”Call Number Location Charts”

http://hcl.harvard.edu/libraries/widener/docs/wid_loc_chart.pdf

このように複雑かつ広大に思える Widener Library の書庫ですが、実際に利用者として入庫し、本を探してみると、思った以上にサインやマップがわかりやすく、目指す書架にたどりつくための工夫が随所になされていることがわかります。そこで今回は、利用者がスムーズに本を探すことができるように、どのような工夫・配慮がされているかを考えてみました。

・清掃・換気が行き届いている。

廊下や書架間の通路は決して広いものではありませんが、その通路にゴミ箱やイス・テーブル、ましてや未整理の箱やケース類が放置されているということがありません。そのため見通しがとてもよく、目指す場所がどの辺りにあるのかをすぐに見つけることができますし、書架間の移動に手間取らなくてすみま

す。また、最近改装されたという大理石製の床ですが、塵や紙くずの類がまったく落ちておらず、書架にもホコリがほとんどありません。さらに、これも改装とともに導入されたという新しい換気システムが書庫内全域に設置されています。利用者は快適に保たれた空間の中で、落ち着いて、本を探すことに集中することができます。

- ・本が整然と並んでいる。

書架の本はすべて整然と並んでおり、横倒しにされたり、重みで変形していたり、無理やり押し込まれたりということがありません。ブックエンドによってきちんと固定されているので、傾いていることすらほとんどありません。本の背表紙が前後にずれているということもなく、一直線に並んでいるので、目指す本の請求記号を目で追うことだけに専念することができます。

書架の整理は **Stacks Division** の学生アルバイト（50 人～90 人程度）の仕事です。彼らは借り出された本を棚に戻すだけでなく、定期的に書架をチェックして、本を整然と並べたり、余裕を持たせるために移動したり、保存状態を確認して修復・保存処理のために抜き取ったりといったようなことも行います。また、正確で適切な配架・整理を行なうことができるよう、充分な量のトレーニングを受けます。たくさんのトレーニング用教材も準備されており、請求記号の構成と実際、本の並べ方、動かし方、効果的な配架準備、ブックトラックの動かし方に至るまで、さまざまなことが指導されます。これらの実践的で細部にわたる指導により、本を正確に並べるだけでなく、短時間でそれを行なうこと、適切な保存状態を保つことが実現されています。

- ・書架サインが、段階を追って導くように工夫されている。

書架サインには、新分類のものと旧分類のものがありますが、どちらもレイアウトはまったく同じで、かつまったく異なる色（新分類＝白地に臙脂色、旧分類＝黄色地に黒）が使われています。書架から廊下側に張り出すように掲げられたサインには、アルファベットだけが大きく太く書かれ、しかもその開始位置だけにしかありません。これにより、利用者はすべての書架のサインをひとつひとつ確認する必要がなく、自分の探している分類のアルファベットを一目で見分けることができます。

各書架の側面に掲示されたサインには、分類の第 1 段階であるアルファベットが大きく太く、第 2 段階である数字は控えめに書かれています。その下には、各番号ごとの分野名の細目がリストアップされています。利用者は該当する書架サインを目で追いながら、自分がいる場所が目指す分野の書架であるかどうかを確認することができます。

- ・サインの色やデザインが統一されている。

書架サイン以外の、フロアマップ、階数表示、階段や行き先の案内、トイレや立ち入り禁止の案内など、すべて同じ臙脂色で、同じフォントが用いられています。ちょっと迷ったときに辺りを見回すと、すぐに臙脂色が目にとびこんできて、そこに目を向ければよい、ということが一目でわかります。

また、要所要所に、まったく同じデザインの表・地図が掲示されています。場所によってそのデザインや色が変わっているということがないため、戸惑わずにすんでいます。

- ・情報が盛り込まれすぎていない。

全館のフロアマップには、そこにどんな分野の本があるか、コレクションがあるかなどは一切かかれず、かわりに頻繁に使われるコピー機や検索用端末がくっきりとした目立つ色で示されています。分野やコレクションの案内は、別のガイドや表にその役目を譲っています。

また、階段や通路を示すサインには、その行き先だけが示されており、やはり分野やコレクション名などは案内されていません。

各フロアにどの分野・コレクションがあるかを示したハンドアウトでは、「この階のこのエリアにある」というところまでが示されるにとどまり、そこから先の詳細は各書架サインを参照することになります。こちらには逆に、コピー機や検索端末の情報は記されていません。

- ・コピー機・検索端末などが各フロアの同じ位置にある。

各フロアのコピー機・検索端末が、階は異なっても同じ位置に配置されています。これにより、コピー機・検索端末を探すのに迷わないですむだけでなく、それらを目印にしていま自分がどのあたりにいるのかを把握することもできます。

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【31. Sackler Museum の日本古典籍資料】

Arthur M. Sackler Museum はハーバード大学内にある美術館・博物館群のひとつです。美術品を収集している美術館としてはほかに Fogg Art Museum、Busch-Reisinger Museum などがあります。Fogg が西欧、Busch-Reisinger が中欧・北欧をメインとしているのに対し、Sackler Museum では東洋・イスラム世界を中心に収集・研究・公開を行なっています。

Arthur M. Sackler Museum (Harvard University)

<http://www.artmuseums.harvard.edu/sackler/>

2 月 6 日、朝日新聞文化欄に、ハーバード大学 Arthur M. Sackler Museum 所蔵の日本古典籍資料についての調査報告が掲載されました。近世以前の書籍資料である絵本、画譜、草双紙の自筆稿本などについて、九州大学の先生方が訪問調査なさったもので、約 300 点の簡易目録作成が行なわれました。私もその現場で目録作成のお手伝いをさせていただきましたが、それぞれ見た目に美しく面白いだけでなく、保存状態のとてもよいものでした。書誌学的にも価値のある珍しいものばかりのようで、調査中の先生方もしきりに感嘆の声を上げておられました。

これらは、それまで学内でもその価値があまり知られておらず、Sackler Museum ロッカーの中に静かに保管されていました。整理や箱詰めによる保存処置はされていたものの、書籍形態であったため、浮世絵のような美術資料に比べてどうしても調査等が後回しになってしまっていたようです。

海外ではこのように、日本の古典籍資料が思わぬところに残されていることが少なくありません。日本または東アジア研究専門の図書館でない、資料の内容・価値のわかるライブラリアンがいないなどの理由で整理されていなかったり、今回の例のように美術館であるがために書籍形態の資料がそれほど省みられなかったり、また、長い間中国語資料とごちゃまぜになったまま所蔵されていたりという例もあります。

それらが、場合によっては日本に保存されているものよりも保存状態がよい、ということも珍しいことではありません。欧米の資料保存専門家には、西洋の資料についてだけでなく、日本・中国などアジア資料の修復・保存についても積極的に知識・技術を習得している人が大勢います。彼ら・彼女らによって、日本ではあまり適切に扱われていない資料が、十分にケアされて保管されている例がたくさんあります。また、価値を評価できるスタッフがいないために、とりあえずすべての資料がひとつひとつ丁寧に取り扱いわれている例。その資料を使うような研究者・利用者がいないために、長い間人の手に触れられず、そのために保存状態が良いという例。日本の図書館では無造作に処分されてしまっていたような袋（売るときに元の本を納めていたもので、絵入り・色刷りのものもある）が大切に保管されている例も、いくつか拝見しました。また、戦後にこのような古典籍資料を海外へ売り出した当時の書籍取扱者が、特に良い本を取り揃えて送った、というような事情もあったようです。

これまで知られていなかったこのような資料は、以前は現地へ赴かなければその詳細がわからないということがほとんどでしたが、最近ではホームページ上でその解題や簡易目録を見つけることができたり、総合目録データベースの中に現れたり、一部や全文をデジタル画像として見ることができたりということが増えてきたようです。このようにさまざまなかたちの情報発信によって、必要な資料の存在が必要な人の目に触れるようにすること。そして、その存在を認めることができた資料は、後世の利用者のため、適切な状態で保存することが重要だと思います。

最近になって、Sackler Museum にあった和装本のうち、幕末期以降の書籍形態の資料の一部が Harvard-Yenching Library に移されることになりました。これらは近いうちにデータベースへの目録登録がされ、ひとつひとつの大きさに合わせて作られた箱に納められ、館内の貴重書専門の部署によって適切に管理・提供されることになる予定です。

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【32. 世界最大の図書館情報サービス - OCLC】

2 月半ば、オハイオ州・ダブリンにある OCLC を訪問してきました。

OCLC は、コンピュータ・ネットワークを通して、書誌情報、オンライン共同目録システム、ILL システムなど、各図書館での活動に必要な情報・サービスを提供している非営利機関です。1967 年の設立当初はオハイオ州内だけを対象としたサービスを行なっていましたが、現在はアメリカ国内だけでなく、ヨーロッパ、アジア、太平洋地域など世界 112 カ国・6 万館以上の図書館に対してサービスを行なっています。代表的なサービスである目録データベース・WorldCat は、2007 年 3 月現在で、書誌レコード 8000 万件、所蔵レコードは 13 億件を収録しています。

OCLC

<http://www.oclc.org/>

WorldCat

<http://worldcat.org/>

ダブリンにある OCLC 構内の 3 つの建物では約 1000 人のスタッフが働いていますが、ほかにも全米各地、及び世界数ヶ所に拠点となるオフィスがあります。

参加館には、データベースの利用だけを契約しているところもあれば、すべての目録作成を OCLC で行なうなどの Governing member として参加するところもあります。日本で OCLC に Governing member として参加しているのは、早稲田大学、慶応大学、愛知淑徳大学などの 7 館です。

今回の訪問では、契約による Cataloging の部署、Language Set と呼ばれるサービスの部署を案内していただきました。

OCLC の書誌目録データベースはオンライン共同目録システムであり、実際の目録業務は各参加館のカタログラーによって行なわれていますが、この Cataloging の部署では、各館でまかないきれない目録業務をアウトソーシングとして受注しています。OCLC のデータベースに登録する目録業務を、OCLC 内で請け負っているのですから、ある意味もっともリーズナブルなあり方と言えるかもしれません。

ここではあらゆるタイプの資料が書誌・目録作成の対象となっています。私が拝見した限りでは、古い時代の書籍や写本、音楽スコアや絵本、テクニカルレポートや簡易パンフレットのような灰色文献、DVD・VHS のような視聴覚資料などが扱われていました。また、約 50 人いるカタログラーの中には、アジア、ヨーロッパ、イスラムの各種言語を理解する人たちが含まれていて、あらゆる言語の資料に対応しているとのことでした。

図書館からは、情報源（標題紙・標題紙裏）のコピーが郵送されてくることもあれば、それがスキャニングイメージデータとして送られることもあります。カードケースがそのまま送られてきて遡及入力が行なわれることもあります。もちろん、資料の現物も多数送られてきていました。

しかし、この部署でも困難なのは、やはり件名標目の作成であるようです。特に英語以外の言語の資料の場合には、何人かいるネイティブのカタログガーが中身を読んで、理解してから件名を作成する、ということでした。

Language Set は、公共図書館が対象の代理選書サービスです。英語以外の言語の資料を蔵書に加えたいが、その言語の専門家がない、という公共図書館に対して、適切と思われる図書をセレクトし、まとまった数のコレクションとして、その図書の現物及び目録情報を提供する、というものです。現在 14 ヶ国語（日本語含め）に対応しています。

難しいのは、図書館や言語によってニーズが異なる、ということだそうです。例えば日本語資料の場合、対象となる利用者層が”日本から出張などで来ている家族で、日本の情報をキープアップしておきたい”ということから、生活実用書や子供用・教育関係図書がニーズとなるが、言語によっては”アメリカに移住し、職を得て、市民権を得るにはどうしたらよいか”といったことが中心になるようです。

当サービスでは「この図書館には日本語の本があります」というサインや、案内用 Web ページの作成も行なっています。

また、アジア・パシフィック地域担当の Andrew H. Wang 氏、Shu-En Tsai 氏にお話をうかがうことができました。

Wang 氏によれば、Google やその他のサーチエンジンの勢いは誰にも止められない。図書館の組織化された知識の蓄積は、それらに勝り得る。OCLC の使命は、各図書館が固有に持っている情報を、Web に載せてアクセス可能化することによって、ユーザを図書館に導くことである、とのことでした。

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【33. 日本語は日本語のままで - OCLC の CJK システム】

OCLC で CJK (中国語・日本語・韓国語の総称) データの取扱いが始まったのは、1986 年のことです。それまではアルファベット (ラテン文字) しか取り扱えなかった OCLC の書誌データベースにも、それ以降徐々に CJK データが登録されるようになり、そのためのシステムも進化し続けてきました。

2008 年 2 月現在、WorldCat に収録されている日本語資料の書誌レコードは約 248 万件、そのうち日本語・日本文字データを含むのは約 220 万件。OCLC の業務用目録システムである Connexion Client でも、一般公開されている Web データベースの WorldCat でも、日本語・日本文字は入力されたままに表示されていますし、検索も可能です。

日本語書誌の例

<http://worldcat.org/oclc/123166424>

OCLC で過去約 25 年にわたって CJK システムの構築に携わってこられた小鷹久子さんにお話をうかがう機会を得ました。

日本で病院図書館の開設に携わった小鷹さんは、オハイオ州立大学で日本語図書の整理を担当しておられた際、日本語図書についての書誌データが原綴 (元の言語のままでデータ表記) でないことに疑問を感じておられたそうです。そして、1983 年に RLG (Research Library Group : アメリカの研究図書館によるグループで、2006 年 OCLC に統合) が RLIN (RLG の書誌目録データベース) を CJK 対応したという発表を聞き、OCLC でも必ずこの CJK 取扱いが大きな問題となるはずだと考え、OCLC に移り、以降 CJK システム構築の中心メンバーとして開発・改良に携わってこられました。

当時、RLIN で使われていた目録用端末では、キーボード上に漢字の部首などが並びそれを組み合わせて入力するという、CJK 専用の機器が使われていましたが、1986 年に OCLC が提供開始した目録用端末は、標準の端末に CJK 文字を取り扱うための ECI ボードを組み込み、アルファベットのキーボードのままでヨミなどから CJK 文字が入力可能、というものでした。標準の目録用端末をそのまま使えるという利点はあったものの、やはり専用ボードを要するためコストが高く、当初は 10 館ほどの東アジア研究図書館のみによる試用からスタートしました。

その後、図書館全体のデータベース化が進み、どの図書館でも CJK 資料の処理だけをいつまでも先延ばししておくわけにはいかなかったこと。ハーバード・イェンチン図書館などの大規模館が参加するようになったこと。CJK ワープロ機能など、ユーザ館のニーズに応えるシステムを OCLC で開発していったことなどから、次第に CJK レコードの規模も参加館も増えるようになってきたとのことです。

1991 年、初めて Windows 端末を見せられた小鷹さんは、Windows 対応の目録システムに着手し始めました。CJK 言語と Windows システム、ともにグラフィカルであるという共通点から、CJK が Windows 対応システム開発の実験台となったようです。OCLC に CJK User Group が発足したのもちょうどこの年

でした。1992年、CJKPlusというWindows用アプリケーションが開発されましたが、当時はまだWindows自体が普及しておらず、その使い方からCJKユーザに伝えていく、といった段取りもあったそうです。またその間、CJKユーザの協力と要望を受けながら、カード目録印刷機能、オンラインCJK辞書、オンラインヘルプなどが開発されていきました。

1998年に発表された「OCLC Access suite」は、それまでのような目録専用端末を使うことなく、Windows機にインストールすることで利用できる目録システムアプリケーションソフトでした。参加メンバーであれば無料で受け取れるこのソフトには、CJK目録取扱い用ソフトやCJK書誌データをローカルで表示できるソフトもデフォルトで含まれており、これによりCJKユーザだけが別途費用を負担したりシステムを追加したりということが不要になりました。

その後、ホストシステムの改造に伴い、2002年からConnexionという目録作成システムが用いられています。そのWindows型のプログラムに移行したCJK機能では、文字入力にMS-IMEが採用されています。これは、どの図書館でも少ない端末で複数の言語を取り扱う必要があるという現状を鑑み、Windows機であればどの言語でも取扱いができるように、とのことからだそうです。

1995年、早稲田大学が日本語書誌レコードを一括して提供し、以降計3回の一括提供、2004年からは月1回の定期的な提供が行なわれています。2007年1月までに早稲田大学からOCLCに提供された書誌レコードは約75万件に及んでいます。そのデータの変換・転送には、日本側代理店である紀伊国屋書店が携わったとのことでした。その紀伊国屋書店は現在、米国のいくつかの東アジア図書館に対して、図書現物の納品とともに書誌レコードを作成・提供するというサービスも行なっているようです。1996年にはハーバード・イェンチン図書館のカード目録による遡及入力がOCLCへの依頼という形で行われています。RLINとの書誌レコード交換により、TRCや慶応大学による日本語書誌レコードも収録されてきましたが、2007年にRLINのCJKレコードがすべて収録されて以降は、TRCからの定期的な書誌レコード提供も開始されています。いずれも、日米では書誌の作成要領や内容が異なるために編集を必要としますが、各図書館での業務軽減に大きく貢献していると言えるでしょう。

OCLCの日本語書誌レコードは、同じ番号を持つMARCフィールドを2つ設け、一方に日本文字データ、もう一方にローマ字化されたアルファベットデータを記述するという形をとってきました。最近では、国際化・多言語サポートの広がりに伴い、この規制も緩和されてきています。また、RLINでは日本文字による書名などは単語ごとに分かち書きされていましたが、OCLCでは分かち書きがなされていません。現在の目録用システムであるConnexionではCJK文字1文字づつを”単語”とみなし、例えば「日本史学会誌」であれば「史学」でも「学会」でも「会誌」でも検索することが可能になっています。

ただ、文字の取扱いには若干の問題が残ってもあります。例えば「江戸」という言葉を日本文字で検索しても書誌レコードはヒットしません。「戸」という字について、日本文字で一般的な「戸」（上の棒が横一直線）ではなく、上の棒が左肩下がりの「戸」が使用されているためです。これは、ALA内のグループによって、JACKPHY（日本語、アラビア語、中国語、韓国語、ヘブライ語）文字についてはUnicode文字すべてを使うのではなく、従来用いられていたMARC-8と呼ばれる文字集合のみを用いる、というルールが決められたことによるそうです。したがってMARC-8内に含まれていない日本文字の「戸」は使用さ

れないことになります。OCLC のデータベース自体は Unicode に対応していますが、記述に際して採用される漢字には制限がある、ということのようです。

OCLC の CJK システムの発展は、参加館である各東アジア研究図書館のライブラリアン・カタログガー、早稲田大学・紀伊国屋書店などの日本側参加館・代理店やそのカタログガー、OCLC 内外のシステム開発者・ライブラリアンなど、たくさんの人々によるコラボレーションの賜物である、と言えるでしょう。

また、小鷹さんのお話の中で、「書誌とは、現物に行き着くためのものであるから、現物を見ていない人が、書誌を見ただけでその現物を思い描くことができるように記述されなければならない。そのためには、規則に従って事実を記すというだけではなく、そこにどんな情報を収めるべきかについて考えなければならない。書誌作成はアート&サイエンスである。」というお言葉が、とても印象的でした。

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【34. 日本のマンガを保存する図書館 – Cartoon Research Library, Ohio State University】

オハイオ州・コロンバスにあるオハイオ州立大学には、Cartoon Research Library という、マンガ資料専門の研究図書館があります。1977 年、漫画家ミルトン・カニフのコレクションを受け継ぐ形で設立されました。マンガ (Cartoon) 資料の包括的な研究用コレクションの構築を目的とし、25 万点のマンガ原画、4 万冊の図書、5 万タイトルの雑誌・逐次刊行物、250 万点の新聞コミック等の切抜きが保存されています。そのすべてがレアブックとして取り扱われており、事前予約による閲覧のみが可能となっています。

そして、このコレクションの図書資料約 4 万冊のうち、約 1 万冊が日本のマンガ及びその関連図書だそうです。

日本のマンガ資料の選書・収集及び研究を行なっているのが、当大学の日本語コレクション専門ライブラリアンであり、Assistant Professor でもある、Maureen Donovan さんです。

Manga blog, Ohio State University Libraries

<http://library.osu.edu/blogs/manga>

1995 年、サバティカルで東京滞在中だった Donovan さんは、日本におけるマンガ文化の充実ぶりを体験し、いまのうちにマンガ資料の体系的なコレクション構築を始めておかねばならない、との思いを強くしたそうです。帰国後、Cartoon Research Library のライブラリアンと相談し、日本マンガコレクションの体系的・継続的な構築の開始が決定されました。

資料購入のため、国際交流基金など各所からの資金援助を得たり、整理のため専門のカataloger を雇用するなど、さまざまな努力が続けられてきました。現在では、この Cartoon Research Library の利用者の多くが日本マンガ資料を目的としており、日本からの利用者も少なくないとのことでした。

このコレクションの特徴のひとつは、特定の作者・分野の資料を集中的・網羅的に収集すると言うわけではなく、日本におけるマンガの歴史・文化全体を概観できるよう、広範囲にわたる資料収集が行なわれている、という点です。ある作家の作品がすべて購入されているとか、ある雑誌が初号からすべてそろえられているという例はあまり多くありません。そのかわりに、歴史マンガ・政治マンガなどのさまざまなジャンルのマンガ、マンガによる社史・辞典・受験参考書、マンガの描き方を指南した本、同人評論誌や記念出版物、さらにはマンガの描かれた双六や子供用グッズ、映画化記念冊子に至るまで、日本の社会においてマンガがどのように浸透しているかを広く見渡すことができるコレクションになっています。どの本屋でも売っているような最近の単行本もあれば、「時事漫画」のような戦前・戦中の出版物や、原画・手稿資料のような非常に貴重な資料もあり、その幅広さには驚くばかりです。

日本のマンガを収集することの難しさのひとつは、絶版になりやすい、という点だそうです。マンガそのもののだけでなく、その関連書籍や参考図書となるような本も、刊行後すぐに品切れになってしまい、そ

のまま入手不可能となってしまう例が少なくないそうです。ISBN の付与されない出版物や限定・記念出版物が多いことも、その一因のようです。

最近ではインターネットで探し当てることのできたものも少なくないようですが、古書店やネット書店では海外に送ってもらえなかったり、支払方法が非常に限定的であったりといったことが問題になってしまっています。300 円程度の本が、代理店を通したり、送料を負担したり、支払い手数料がかかったりして 2000 円近くにまでなってしまうこともある、とのことでした。支払方法が限定的であるために購入できない、あるいは割高になるというのは、日本語資料を扱う海外の図書館では大きな問題であるようです。

また、マンガの選書・蔵書構築のための参考図書やツールが整備されていないことも、資料収集を難しくしているとのことでした。Donovan さん自身、まずその参考図書の収集やマンガのビブリオグラフィー（書誌学）の研究からスタートしたそうです。マンガについての研究目的の参考図書は、学術的過ぎて実用に即していない。実用できそうなマンガ特集のムック本などは、すぐに絶版になって入手困難になる。そもそも、マンガ雑誌の収録作品や記事を検索できるようなインデクスやデータベースが整備されていない、などの問題があるようです。

コレクションの構築に伴い、その目録の作成が問題となります。オハイオ州立大学では、OSCAR と呼ばれる OPAC で「manga collection」というキーワードで一括して検索することが可能です。

また、日本のマンガをカタログリングするための独自のガイドラインが作成されており、オハイオ州立大学の特殊コレクション目録部署のホームページに掲載されています。これは大学のカタログガー、マンガの目録を担当していた実務者、Donovan さんらの共同作業によるもので、改訂を繰り返して現在に至っているそうです。日本のマンガに特有の出版事情や形態、それに伴う書誌記述についての解説が含まれています。

この日本マンガについての書誌レコードには、「Summary」と「Genre Terms」が記述されています。「Summary」は作品のストーリーなどをおおまかに英訳したもので、例えば以下のようなことが書かれています。

”A story about a wizard who works for the imperial court during the Heian period in Japan. He solves weird problems by using his magical knowledge based on the Ying yang cult.”

また、「Genre Terms」は、日本のマンガに固有のジャンルを表す「Genre Terms」リストから、ひとつまたは複数を選んで記述するというものです。非常に多くの、かつ多岐にわたる用語がリストアップされています。LC の件名標目も併用するため、実際の書誌には以下のような記述がされることになります。

Oda, Nobunaga, 1534-1482 — Comic books, strips, etc.

Generals — Japan — Biography.

Historical manga.

War manga.

Samurai and ninja manga.

日本人は必ず何かしらのマンガを読んだ経験があるため、どんなマンガであるか、どんなジャンルであるか、読者層は誰かなどがすぐに把握できる。しかしアメリカ人にはそれができないため、こういった Summary や Genre の記述が欠かせない、とのことでした。

Donovan さんは、Assistant Professor として日本のマンガについての授業も担当しておられます。これは主に学部 1 年生を対象とし、毎回特定のマンガ作品について互いにディスカッションしあう、というものです。この授業を通して、学生同士が交流を深めたり情報交換のコミュニティを築いたりという効用があるそうです。Donovan さん自身、日本からの情報をまったくタイムラグなしに入手してくる学生たちが大いに刺激され、多くの有用な情報を得ている、とのことでした。

そんな Donovan さんが危惧しているのは、ほとんどの日本の大学図書館・研究図書館がマンガを蔵書構築の中に有効に組み込んでいない、という点です。先述のようにマンガやその関連書籍はすぐに絶版になることが多い。一方、マンガを原典や資料として活用するような世代は今後増えつづけるはずである。日本でも保存・収集の取り組みが必要なのではないか、とのご意見でした。

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【35. オンライン資料の検索を強力にサポート - E-Research@Harvard】

電子ジャーナルやデータベースなどのオンライン資料を、いかに効率よく、判りやすく、スムーズに提供するかについては、どの大学図書館も常に頭を悩ませている問題だと思います。

ハーバード大学では、学内で契約・提供されているあらゆるすべてのオンライン資料について、「E-Research@Harvard」という下記のポータルサイトから探し出し、たどり着くことができるようになっています。

E-Research@Harvard

<http://eresearch.lib.harvard.edu/>

●Cross Search

このポータルサイトで提供されているサービス・機能のうち、もっとも強力な機能のうちのひとつが、データベースの横断検索です。

ハーバードでは非常に多くのデータベース - 文献検索データベース、統計データベース、分野別データベースなどを契約しています。E-Research@Harvard では、MetaLib と呼ばれるシステムを使って、それら複数のデータベースを一度に横断検索することができます。

ユーザはまず、下記画面の左側にリストアップされている分野別・種類別のカテゴリから、自分の目的に合うものを選びます。すると、その分野・種類に即した複数のデータベースが、画面中央に提示されます。

fig1

E-RESEARCH @ HARVARD LIBRARIES

QUICK SEARCH | FIND E-RESOURCES | FIND E-JOURNALS | **CROSS SEARCH** | MY RESEARCH

SEARCH | CROSS SEARCH RESULTS | SEARCH HISTORY

Citation Linker | Comments | RefWorks

Exit | Help | Icon Key | Search Tips

Toshinori Egami

Cross Search

Select Search Type:
Quick Sets

Earth/Environment
Education
Film/Theater Studies
Gender Studies
General Science
Government/Pol Sci
History
Law
Literature
Medicine
Music
Philosophy/Religion
Psychology
Public Health
Sociology

Search

Enter search term:

GO

Set: **Music** contains 7 E-Resources

E-Resource Name	Resource Type	Actions
☒ Academic Search Premier (EBSCOhost) CROSS SEARCH	Indexes to journal articles, etc.	i +
☒ Grove Music Online CROSS SEARCH	Dictionaries and encyclopedias	i +
☒ International Index to Music Periodicals CROSS SEARCH	Indexes to journal articles, etc.	i +
☒ International Index to the Performing Arts CROSS SEARCH	Indexes to journal articles, etc.	i +
☒ JSTOR Music JSTOR CROSS SEARCH	Electronic journal collections	i +
☒ JSTOR Performing Arts JSTOR CROSS SEARCH	Electronic journal collections	i +
☒ RILM Abstracts of Music Literature (EBSCOhost Interface) CROSS SEARCH	Indexes to journal articles, etc.	i +

HOLLIS CATALOG | CITATION LINKER | RESEARCH GUIDES | OTHER CATALOGS | LIBRARY INFO | HARVARD LIBRARIES | HARVARD HOME

Powered by MetaLib

写真は「Music」を選択して、7件のデータベースが提示された例です。この中で、自分が検索したいデータベースをチェックボックスで選び、キーワードを入力して検索してみます。

fig2

Search for "shamisen" in "Music"			View Results	Cancel
E-Resource Name	Status	Hits		
Academic Search Premier (EBSCOhost)	DONE	20	View	
Grove Music Online	Search and link	194	Jump	
International Index to Music Periodicals	DONE	26	View	
International Index to the Performing Arts	The e-resource is currently not available. Try again later or ask a librarian for assistance.			
JSTOR Music	DONE	272	View	
JSTOR Performing Arts	DONE	36	View	
RILM Abstracts of Music Literature (EBSCOhost Interface)	DONE	216	View	
Combined Results	First 136 records	570	View	

fig3

Combined results for "shamisen" (570 hits)
View [results by e-resources](#)

Results Table Results List Full View Sort by: Year

1-10 of 136 records (combine more) << Previous Page Next Page >>

No.	Author	Title	Year	Database	Action
1	Johnson, Henry Mabley	"Tsugaru Shamisen": From Region to Nation (and Beyond) and Back Again		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT
2	Johnson, Henry	Audio Recording Review: Agatsuma: "Beyond"		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT
3	Lupton, John	Off the Beaten Track: The Last Frontier Featuring Takeharu Kunimoto - "Sushi and Gravy"		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT
4	Tokita, Allison	Book Reviews: "The Spirit of Tsugaru: Blind Musicians, Tsugaru-Jamisen, and the Folk Music of Northern Japan/With the Autobiography of Takahashi Chikuzan," by Gerald Groemer		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT
5	Groemer, Gerald	Reviews: "Zenshu Nihon fukukomi kotohaime: 1903-nen Gaizubaagu rekodinguizu [The beginnings of Japanese sound recording, a complete edition: the 1903 recordings of Fred Gaisberg], "Gidayu tokushu: Takemoto Koshiitayu [A selection of 'gidayu' pieces performed by Takemoto Koshiitayu]"		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT
6	Tokita, AllisonMcQueen	Mode and Scale, Modulation and Tuning in Japanese Shamisen Music: The Case of "Kiyomoto"		International Index to Music Periodicals	+ FIND IT

Topics

- [Review \(47\)](#)
- [Kabuki \(18\)](#)
- [Theatre \(18\)](#)
- [Tsugaru \(16\)](#)
- [Narrative \(10\)](#)

Databases

- [RILM Abstracts of Musi... \(30\)](#)
- [JSTOR Performing Arts \(30\)](#)
- [JSTOR Music \(30\)](#)
- [International Index to... \(26\)](#)
- [Academic Search Premie... \(20\)](#)

JOURNAL TITLES

- [Ethnomusicology \(8\)](#)
- [Asian Music \(5\)](#)
- [Notes - Quarterly Jour... \(2\)](#)
- [New York Times \(2\)](#)
- [Look Japan \(2\)](#)

Authors

- [Johnson, Henry \(4\)](#)
- [Samuel L. Leiter \(4\)](#)
- [James R. Brandon \(3\)](#)
- [William P. Malm \(3\)](#)
- [Henry Burnett \(3\)](#)

”shamisen”で検索した結果が表示されました。

右端に表示されている「Topics」「Authors」などの見出しのついたリンクは「ファセット」と呼ばれる機能で、これをクリックすることでしぼりこみ検索が可能です。検索結果の内容が自動的に分析され、その中に含まれているキーワード (kabuki, theater, tsugaru など) や著者名などのうち、数の多いものが選ばれて、このようにリストアップされています。このリンクをクリックすれば、そのキーワードや著者名でしぼりこみ検索をした結果がすぐに表示される、という仕組みです。

「FIND IT」という青いボタンをクリックすると、その論文の全文ファイルへのリンクや、図書・雑誌の所蔵場所を示す書誌・所蔵データへのリンクが示され、現物を入手することができます。これは「SFX」というシステムを使ったサービスで、京都大学の「Article Linker」とほぼ同じ機能です。

「o」に「+」のマークがついているボタンをクリックすると、選んだ論文のタイトル・著者・雑誌名などのデータが、各ユーザ個人のバスケットに保存されます。保存したデータは「My Research」と書かれたリンクをクリックすることでいつでも参照できます。RefWorks（文献情報管理ソフト）へのエクスポートも可能です。

fig4

Results Table Results List Full View			Folder: Basket (3)   Advanced	
1- 3 of 3 Records			Save/Send	<Previous Page Next Page>
Select all Clear all				
No.	Author	Title	Database	Actions
☐ 1.	Mishima, Yukio 1925-1970.	<u>Mikdash ha-zahav Yokiyo Mishimah ; mi-Yapanit 'Enat Kuper.</u>	HOLLIS Catalog	 FIND IT 
☐ 2.	Johnson, Henry Mabley	<u>"Tsugaru Shamisen": From Region to Nation (and Beyond) and Back Again</u>	International Index to Music Periodicals	 FIND IT 
☐ 3.	Tokita, AlisonMcQueen	<u>Mode and Scale, Modulation and Tuning in Japanese Shamisen Music: The Case of "Kiyomoto" Narrative</u>	International Index to Music Periodicals	 FIND IT 
1- 3 of 3 Records			Save/Send	<Previous Page Next Page>

この機能は、ユーザ各自がログインしているときに利用可能なものです。

E-Research@Harvard のトップページやその他の検索画面のページなどには、随所にログインのためのリンクが設けられています。これは【29. どこでもハーバード – Web サービスと PIN System】でご紹介した PIN System へのリンクであり、ユーザはここで自分の身分証番号とパスワードを入力することにより、ハーバード契約資料へのアクセスが認められるメンバーとして、認証を受けることになります。

下記は、ログインしていなかったときの、横断検索画面の例です。

fig5

Set: Earth/Environment contains 14 E-Resources			
E-Resource Name	Resource Type	Actions	
<u>Academic Search Premier (EBSCOhost)</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Indexes to journal articles, etc.		
☒ <u>AGRICOLA</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Indexes to journal articles, etc.		
<u>Aquatic Sciences and Fisheries Abstracts</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Indexes to journal articles, etc.		
<u>CAB Abstracts Archive</u>	Indexes to journal articles, etc.		
<u>Environment Index (EBSCOhost) (1973-)</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Indexes to journal articles, etc.		
<u>GeoRef (1785-)</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Indexes to journal articles, etc.		
☒ <u>Harvard Geospatial Library</u> <u>CROSS SEARCH</u>	Library catalogs and bibliographies		

ハーバードの学内者でなければ使用できない契約データベースには、使用できないという意味の「o」に「/」のマークが表示されています。逆に、フリーで公開されているデータベース（AGRICOLA）やハーバード自身が作成して一般公開している目録データベース（Harvard Geospatial Library）にはチェックボックスがついています。フリーで利用できるデータベースについては、ハーバードの学内者でなくてもこの横断検索機能を利用できます。

●E-Resource

ハーバードの図書館が契約あるいは提供しているオンライン資料、データベース、コレクションなどについて、キーワードやタイトルなどから探すことができるのが、「E-Resource」サービスです。キーワードなどによる検索で探すほか、リストアップされた分野名からたどり着くこともできます。

fig6

E-Resource List

Search for "Starts with = I?"

Results Table Results List Start with :

Labyrinth - LGBT Go to Cross Search <Previous Page Next Page>

E-Resource Name	Resource Type	Actions
Labyrinth (Georgetown University)	Subject gateways	
Lamont Library	Library web sites	
Landscape Architecture	Research guides	
Latin American Literature: A Guide for the General Examinations	Research guides	
Latin American Pamphlet Digital Collection	Harvard digital collections	
Latin American Periodicals Tables of Contents	Indexes to journal articles, etc.	
Latin American Women Writers	Electronic book-text collections	
Latino Literature: Poetry, Drama and Fiction	Electronic book-text collections	
Law School Library	Library web sites	
Le Monde	Newsmedia	

右側の「o」に「i」のマークをクリックすると、そのデータベースについての解説・利用条件・分野などの情報が表示されます。

fig7

E-Resource List

Search for "Starts with = I?"

Results Table Results List Start with :

Labyrinth - LGBT <Previous Page Next Page>

E-Resource Name	Resource Type	Actions
Labyrinth (Georgetown University)	Subject gateways	
Lamont Library	Library web sites	
Landscape Architecture	Research guides	
Latin American Literature: A Guide for the General Examinations	Research guides	
Latin American Pamphlet Digital Collection	Harvard digital collections	
Latin American Periodicals Tables of Contents	Indexes to journal articles, etc.	
Latin American Women Writers	Electronic book-text collections	
Latino Literature: Poetry, Drama and Fiction	Electronic book-text collections	
Law School Library	Library web sites	
Le Monde	Newsmedia	
League of Nations Documents	Research guides	
Lecture Notes in Mathematics (2000-)	Electronic book-text collections	

http://e-research.lib.harvard.edu - e-Research - ...

E-Resource Details

Bookmark: <http://nrs.harvard.edu/urn-3:hul.eresource:latinaww>

Alternative Name: LAWWW

Description: 100,000 pages of prose, poetry and essays, and 300 plays from 19 countries. Starting in the colonial era and moving through to the present, the literary works, memoirs, feminist essays and other materials will give researchers the feminine perspective of the development of an entire continent.

Restrictions: Harvard users only; Harvard ID and University PIN required.

Type: Electronic book-text collections

Subject/Subcategory: Language and Literature / Electronic book/text collections
Latin American/Latino Studies / Electronic book/text collections

また、ここでは契約・有料もののデータベースだけでなく、ハーバードで作成・公開している無料のデータベース、インターネット上でフリーで利用できるデータベース、他大学が作成した分野別リンク集や、ハーバード図書館の web サイトや各館が作成した利用ガイド・分野別ガイドなど、じつにさまざまな種類のオンライン資料が含まれています。学内の各分野の専門家であるライブラリアンが、ここに掲載してユーザーにおすすめできると考えたオンライン資料については、その出自や有料無料に関わらず、提供されています。上記リストのうち、「o」に「/」のマークがついていないものが、フリーで利用できるオンライン資料にあたります。

●LibX

E-Research@Harvard で提供されているサービスとは別のものですが、「LibX」についてご紹介します。

LibX はユーザ各自が自分の web ブラウザに組み込んで使うツールです。ヴァージニア工科大学で開発されたもので、各大学の図書館サービスシステムに合わせてカスタマイズしたものが提供されます。ハーバードの図書館 web サイトからも、ハーバード大学のユーザ向けにカスタマイズしたものが配布されています。

このツールを web ブラウザに組み込むと、さまざまな図書館サービス・情報検索に関する便利な機能を利用できるようになります。

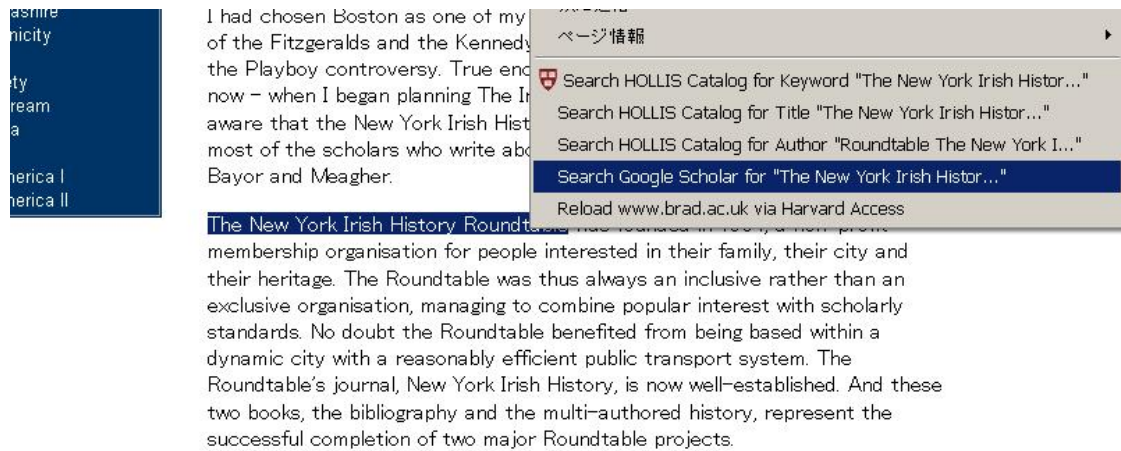
例えば、ブラウザにインストールされたツールバーから、直接 HOLLIS（ハーバードの蔵書検索）や電子ジャーナル用データベース、Google Scholar などを検索しに行くことができます。

fig8



ほぼ同じ機能が、web ページのテキスト選択後の右クリックメニューからも可能です。

fig9



I had chosen Boston as one of my of the Fitzgeralds and the Kennedy the Playboy controversy. True end now – when I began planning The I aware that the New York Irish Hist most of the scholars who write abo Bayor and Meagher.

The New York Irish History Roundtable has rounded in the a non profit membership organisation for people interested in their family, their city and their heritage. The Roundtable was thus always an inclusive rather than an exclusive organisation, managing to combine popular interest with scholarly standards. No doubt the Roundtable benefited from being based within a dynamic city with a reasonably efficient public transport system. The Roundtable's journal, New York Irish History, is now well-established. And these two books, the bibliography and the multi-authored history, represent the successful completion of two major Roundtable projects.

また、Amazon の検索結果画面などにハーバードのマークが表示されるようになり、それをクリックすると、同じ本がハーバードの図書館に所蔵されているかどうかを HOLLIS で確認できます。さらには、閲覧中の web ページの中に ISSN や ISBN が書かれてあれば、自動的にそれを認識し、HOLLIS を検索するためのリンクを付与してくれます。

fig10



Get Free Shipping for a full month with a Free Trial of Amazon Prime [learn more](#)

SEARCH INSIDE!™

JAPANAMERICA: How Japanese Pop Culture Has Invaded the U.S.

by [Roland Kelts](#) (Author)

★★★★★ (6 customer reviews)

List Price: \$24.95

Price: \$18.21 & eligible for FREE over \$25. [Details](#)

You Save: \$6.74 (27%)

Availability: In Stock. Ships from and sold

fig11

ingentaconnect

[Home](#) | [About Ingenta](#) | [Ingenta Labs](#) | [Ingenta Blog](#) | [Help](#)

BioScience

ISSN 0006-3568, Online ISSN: 1525-3244

LibX AutoLink: Search HOLLIS Catalog for ISSN 0006-3568



Fulltext

2008 年 2 月 27 日(水曜日)

【36. オンライン資料を効率的に管理する - E-Resource Management】

【35. オンライン資料の検索を強力にサポート - E-Research@Harvard】でご紹介した E-Resource や電子ジャーナルについて、利用情報・契約情報などを全学レベルで管理しているのが、E-Resource Management System (ERM) というシステムです。ハーバード大学図書館の Digital Acquisitions and Collections Standing Committee というところが管理しています。

fig



ERM User Guide

<http://hul.harvard.edu/ois/systems/erm/erm-userguide/>

このシステムでは、E-Research@Harvard のサイトで提供されているオンライン資料、契約しているものの、フリーのものすべてについて、その購入・契約・提供についての情報を管理しています。学内各図書館のライブラリアンは、個々のオンライン資料について、利用条件、契約状態、利用期限や更新期限、トライアル・統計・SFX 対応などについての情報、複数館による契約についての分担金・払戻金などの情報

を閲覧することができます。これにより、例えば契約や手続きの進捗状況を追跡していたり、更新期限の迫ったデータベースについて注意を払ったり、更新する価値のあるものかどうかを継続して評価していたり、利用者に対して利用条件を案内したり、といったことが容易になります。web ブラウザによって検索・閲覧が可能であることも、大きな利点であると言えるでしょう。

また、ここに登録された各オンライン資料の書誌データ、URL などに基づいて、E-Research@Harvard サイトその他からのリンクや、解説の表示などが、ユーザに提供されることになります。

ハーバード大学におけるデータベースや電子ジャーナルなどのオンライン資料の契約について、かつてまだそれほど数の多くなかった頃には、専任のライブラリアン 1 名（および兼任のサポート 3 名）がすべてを引き受けていました。しかし、業務負荷が過剰に集中しすぎてしまい、その体制を継続することが困難になったといえます。また、契約データベースの支払いについても、各部局から分担金を徴収してプール金として確保するという、日本やアメリカでも多くの大学でとられている方法でした。が、ハーバード大学のような大規模大学では、分担の決定や交渉などのプロセスが複雑になってしまうこと、部局によって金銭事情（使用できる基金の出所・有無・規模、その基金の制限事項など）があまりにも違いすぎることで、基金の送金にルール上の制約があったこと、価格の毎年の値上がりが激しすぎて学内合意を得るのが間に合わなくなってきたこと、などから、その方法には限界があったようです。

現在では、各図書館や図書館群で必要と思われるオンライン資料の契約は、それぞれで手配をするということになっています。複数館での分担が適当であると判断された場合には、利用統計などによって、お互いに交渉・議論が行なわれることもあり、その分担金のやりとりは当事者同士で行なわれます。

その契約する図書館のライブラリアンが、契約や利用に関する情報を所定のフォームに記入し、ERM 担当の部署に提出することによって、ERM にその基礎データが登録されます。このフォームにはそのデータベースの解説文・利用条件・分野などが記述されています。契約が成立し利用可能になれば、そのオンライン資料は E-Research@Harvard で提供されることになります。必要に応じて、横断検索に加えたり、「FIND IT」ボタンからのリンクに対応させたり、HOLLIS に書誌レコードやリンク先データを登録したり、といったようなことが処理されますが、どの分野の横断検索に加えるか、利用条件別の取扱い、解説情報の表示なども、ERM に登録されたデータに基づいて行なわれることになります。

ERM には、有料契約のオンライン資料だけでなく、インターネット上にフリーで公開されているオンライン資料についてもそのデータが登録されます。各館のライブラリアンが掲載・案内するべきだと考えるオンライン資料があれば、所定のフォームを用いてその情報を記述・提出します。審査グループによって評価を得ることができれば、登録された情報に基づいて E-Research@Harvard にて案内が提供されることになります。

以上のようなワークフローやフォーム、管理・契約にあたって各自が把握しておくべき要領などについては、専用の web サイトが設けられており、学内ライブラリアン間での情報共有が図られています。

E-Resource Management & Licensing – Harvard Libraries

<http://isites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k11228>

また、契約しているオンライン資料を継続的にメンテナンスし、確実な提供を保証していくために、**Stewardship** という制度がとられています。これは、各オンライン資料に主たる監督図書館とそのコンタクトパーソンが設定されていて、世話役を担うというものです。利用者や他のライブラリアンからのリクエストやフィードバックはこの世話役である図書館や担当者に伝えられます。またトラブル発生時の報告・案内や、契約業者とのやりとりについても、監督する図書館が執り行うことになります。そして、その監督図書館やコンタクトパーソンがその世話役としての仕事をまっとうできるようなサポートもまた、上記の専用 web サイトにて行なわれています。

オンライン資料の契約・管理については、どの大学図書館でもその業務負荷がある特定の部署や担当者に集中してしまいがちです。このように集中を避けつつ、かつ情報の一括管理と共有が可能となる体制は、ひとつの参考になるのではないかと、思います。

なお、この ERM システムは学内で独自に開発されたものですが、現在は業務用図書館システムと連携した新たなシステムの試用を始めているとのこと。

2008 年 3 月 11 日(火曜日)

【37. HCL Technical Services】

3 月初め、HCL(Harvard College Libraries) Technical Services を訪問・見学してきました。

アメリカの図書館における業務は、パブリックサービス、テクニカルサービスの大きく 2 つに分かれます。貸出や参考調査など利用者に直に接しながらサービスを行なうのがパブリックサービス、資料を購入・収集したり、目録を作成して整理・管理したりというのがテクニカルサービスです。

この HCL Technical Services では、ハーバードのメインライブラリーである Widener Library の資料受入・目録を最大の業務としています。また、学部生用学習図書館である Lamont Library の他、学内各図書館・図書室の目録業務をも引き受けており、ハーバード図書館におけるテクニカルサービスの専門部署として機能しています。

HCL Technical Services

<http://hcl.harvard.edu/technicalservices/>

当部署はハーバードのメインキャンパスから 1.5 キロほど離れた街中にあり、その場所（マサチューセッツ・アベニュー625 番地）から「625」と呼ばれています。2000 年に現在の位置に移転し、3 階建てビル内の 3 階・地階を使用しています。テクニカルサービスを行なっている部署は、日本でもアメリカでも狭隘化が問題となり、たくさんの資料や物資に囲まれて手狭な中で仕事をしていることが多いものですが、当部署はフロア全体をテクニカルサービスだけでゆったりと使用しており、資料の仕訳けや搬送もはかどりそうな印象を受けました。この部署全体で、年間 6-8 万冊が、専任スタッフ 75 人と学生アルバイトにより処理されるとのことです。

Widener Library の資料を整理する各ディビジョンは、資料の言語・出版国をもとに分かれています。English Division, French/Italian Division, Germanic Division, Spanish/Portuguese Division, そして Asian/African Division です。これをベースに、例えばオランダや北欧の資料は Germanic Division、中南米諸国は Spanish/Portuguese Division というように担当されています。これら各 Division 内で、発注から受入、目録までが一連の流れとして執り行なわれます。

Widener Library には各言語・国・地域を担当するビブリオグラファー（蔵書構築のために資料の選択を行なう専門職）がおり、どの資料を購入するかについてはこのビブリオグラファーが選書します。Technical Services 各ディビジョンの発注担当者は、このビブリオグラファーの選書に基づいて発注を行います。資料が到着・納品処理されると、各ビブリオグラファーがこの部署を直接訪れ、現物を手にして中身を確認します。そして、それぞれの資料について「配置は Widener 館内にするか、HD（郊外別地書庫）に直接送るか」「支払いにあたって Fund（基金）はどれを適用するか」「参考図書に指定するかどうか」などを判断し、スリップなどによって指示をします。カタログや装備・搬送担当者はそのスリップに基づき処理をすることになります。

今回の訪問では、アフリカ地域への発注・収書を担当している方のお話をうかがうことができました。アフリカのすべての国・言語をこの担当者 1 人でまかなっているとのことですが、安定した出版流通制度が整っていない国・地域が少なくなく、NGO を通して資料を入手するなど、ご苦労が多いようでした。

目録登録は OCLC の WorldCat を使用して行なわれます。OCLC WorldCat にまだ書誌が存在しない場合には、最小限の書誌事項だけが記録されたミニマルレコードが OPAC 内に作成され、資料はいったん地階のバックログ書架に保留されます。地階書架には管理担当者がいて、必要な資料はすぐに取り出せるように整理番号などによって整然と配架されます。例えば、ミニマルレコードを見た利用者からの資料のリクエストは、OPAC 経由でこの管理担当者に届き、その資料は至急処理されるべく担当カタログガーに送られます。また、バックログに保留している資料の書誌が OCLC World に登場したかどうか、専用プログラムによって自動的に検出され、これも管理担当者によって順次カタログガーに送られる手筈になっているとのことでした。

かつては 10 万冊がこのバックログ書架に保留され、問題となっていたようですが、数年前にその解消のためのプロジェクトが集中的に取り組まれています。現在では 15000 冊ほどがバックログとして収蔵されているとのことでした。

HCL Technical Services には、Cataloging Support Services と呼ばれる部署が含まれています。ハーバード学内約 30 の図書室について、その目録業務を引き受ける、という部署です。対象は、規模が小さくて専任のカタログガーを配置していない図書室など。例えば、イェンチン図書館では、中国語・日本語・韓国語それぞれ専門のカタログガーが館内にいますが、東アジア分野の英語の資料についてはこの Cataloging Support Services に目録業務を委託しています。7 人のスタッフがほぼすべての言語・種類の資料を扱うことになりますが、スタッフでまかなえない言語については先述の各ディビジョンの協力によってカバーしている、とのことでした。

現在のところ、HCL に属するすべての図書館がこの部署にテクニカルサービスを統合させているわけではありませんが、少しずつその範囲は広げられているようです。イェンチン図書館でも、カタログギングの部署をこの場所に移すかどうか話題にされていますが、他からの独立性が高い CJK 言語資料の処理を、キャンパス外に移してまで統合させるメリットがあるのかが、問題のひとつとなっているようです。例えば最近、このビルの 1 階に Fine Art Library のテクニカルサービス部署が移転しましたが、美術関係資料の持つ特殊性からか、その業務・運営は 3 階の他の Division とは独立して行なわれているようでした。

2008 年 3 月 21 日(金曜日)

【38. 韓国古典籍コレクションデジタル化プロジェクト – ハーバードの蔵書デジタル化事業】

ハーバード大学をはじめとするアメリカの大学図書館では、図書館蔵書、特に著作権の切れたものや古典籍資料、写真・図版資料について、そのデジタル化とインターネットによる公開が非常に盛んです。ハーバード大学には図書館内の組織として Imaging Service（学内で撮影・画像作成を行なう）、Digital Repository Service（デジタルデータの保存・公開を請負う）など、専門の部署・サービスが設けられており、蔵書デジタル化事業を支援する”学内インフラ”として機能しています。

今回は、イェンチン図書館における韓国古典籍コレクションを例に、ハーバード大学図書館における蔵書デジタル化事業の実際を追ってみたいと思います。

National Library of Korea – Harvard-Yenching Library Korean rare book digitization project
fig korea-1



現在、イェンチン図書館と韓国国立図書館との共同プロジェクトとして、韓国古典籍コレクションのデジタル化が進められています。これは、イェンチン図書館にあって韓国本国にない約 500 タイトルの古典籍をデジタル化するというものです。もともと韓国国立図書館では、韓国国内や日本・中国の韓国古典籍のマイクロフィルム化・デジタル化を継続的・網羅的に行なっており、本プロジェクトはアメリカでの初の事業ということになるそうです。2006 年にプロジェクトの計画と交渉がスタートし、実作業は 2007 年夏から 3 年間。撮影・デジタル画像作成はハーバード大学とイェンチン図書館で行ない、年間約 6 万ド

ルと見積もられる費用は韓国国立図書館が負担、画像データは双方がそれぞれ所有・公開する、という契約です。

このプロジェクトの実作業は、以下のようなステップをとっています。

Preservation 保存状態確認

Digitizing 撮影・デジタル化

Repository 格納・公開

Cataloging 目録

- Preservation 保存状態確認

ハーバード大学図書館には、Weissman Preservation Center (WPC) という貴重資料専門の保存部署があります。学内の古典籍や特殊資料（貸出用蔵書ではないもの）について、保存状態をチェックしたり、修復・保存のための処置を施したり、破損などをあらかじめ防ぐ措置をとったりといった活動を行なっています。

Weissman Preservation Center (WPC)

<http://preserve.harvard.edu/wpc.html>

イェンチン図書館の韓国資料担当者によって撮影対象資料が準備されると、撮影に出されるより前に、この WPC から conservator（資料保存専門家）が派遣されてきて、現物の状態をひとつひとつチェックします。その結果、例えば破損のためそのままの状態では撮影に耐え得ない場合には、WPC に一度持ち帰られて修復処理がされたり、製本がきつくてページが充分に開けない場合には、WPC でいったん製本を解いてから撮影されたりといった対応がなされます。保存状態があまりにも悪すぎる場合には撮影中止の勧告がなされますが、本プロジェクトにおいてはこれまでそういった例はないようです。

この WPC による保存状態チェックという手順は、どのプロジェクトでも同様に行なわれます。

- Digitizing 撮影・デジタル化

資料の撮影は、ハーバード大学図書館内の資料撮影専門部署である Imaging Service によって行なわれます。Imaging Service は Widener Library の地下にあり、ハーバード学内各図書館からの依頼によって、蔵書の写真撮影と印刷、マイクロフィルム作成、デジタル画像作成や、そのための資料保存・目録・メディア変換などを行ないます。

Imaging Service

<http://hcl.harvard.edu/info/imaging/>

特に古典籍の類は外に持ち出して外部業者に撮影してもらうことができず、学内で撮影できることが理想的です。この Imaging Service には大勢の技術者・画像専門家が勤めており、また複数種類の撮影機材やスタジオが設けられていて、質の良い写真・画像データを比較的低コストで作成してもらうことができます。

す。ただ本プロジェクトに関して言えば、撮影者が韓国語を理解していないために、撮影のとぼしやダブリがどうしても生じてしまうようです。

撮影はデジタルカメラで行なわれ、TIFF や JPEG による画像データが作成されます。

- Repository 格納・公開

作成されたデジタル画像は、Digital Repository Service(DRS)が提供しているデジタルデータ保存システムの中に格納されます。これはハーバード大学図書館の Office Information System(OIS)という部署が管理・提供しているサービスで、画像や音声などのデジタルデータを永年保存し、検索機能やブラウジング機能とともに利用者に提供するというものです。ハーバード内のどの機関でもどのプロジェクトでも、必要に応じて使用することができます。

格納された古典籍資料のデジタル画像を閲覧する際に使用されるのが、Page Delivery Service(PDS)というシステムです。書籍形態のデジタル画像を、実際の書籍のようにページごとにブラウジングしていくためのインターフェースです。

例：寶林寺事蹟

<http://nrs.harvard.edu/urn-3:FHCL:1187878>

fig korea-1



一般の web ブラウザでそのまま使用することができ、基本的なナビゲーション、ツールのほか、資料によっては目次情報の提供、全文テキストデータの検索、印刷用 PDF 作成なども可能となっています。（非ラテン文字資料、古典籍資料など使えないものもあります）

なお、この DRS や PDS で表示されている簡易書誌は、イェンチン図書館の韓国資料担当者が準備した

もの。PDS 上で提供する際に必要なページ・ファイル番号などの管理用メタデータは Imaging Service が作成したものです。

また、本プロジェクトで作成された韓国古典籍資料の画像データは韓国国立図書館でも所有され、近年中に本国の Web サイトからも公開される予定である、とのことでした。

● Cataloging 目録

蔵書のデジタル化事業にあたっては、Preservation（保存）の問題とともに、この Cataloging（目録）が必ずセットとして取り組まれています。

本プロジェクトの場合、HOLLIS（ハーバード図書館の蔵書検索データベース）内に収録されている韓国古典籍の書誌レコードに、各資料のデジタル画像へのリンクが記述されています。

例：寶林寺事蹟

fig korea-2

Record 1 out of 1

Author : [Porimsa](#)

[寶林寺](#)

Title : [Porimsa sajak](#)

[寶林寺事蹟](#)

Published : [Korea, ca. 1464]

INTERNET LINK : <http://hrs.harvard.edu/urn-3:FHCL:1187878> [Provides access to page images of entire work]

Locations/Orders : [Availability](#)

Location : [Networked Resource](#)  [Holdings](#) [Availability](#)

Location : Harvard-Yenching  Rare Book TK 1911 3445 [Holdings](#) [Availability](#)

Location : Harvard-Yenching  Microfilm FK1934 [Holdings](#) [Availability](#)

Location : Master Microforms  Harvard Depository Film Mas 33191 [Holdings](#) [Availability](#)

Description : 9 double l. ; 33 cm.

Technical Info : Digital master created according to Benchmark for Faithful Digital Reproductions of Monographs and Serials, December 2002. <http://purl.oclc.org/DLF/benchrepro0212>

Restrictions : At least one location has information and/or restrictions on access. Click on the holdings link(s).

Notes : Manuscripts.

At end: Myōngch'ŏn Sunnyŏn chunggi, 1457-1464.

At end: 明天順年中記, 1457-1464.

また、プロジェクト名が書誌レコードに注記として新たに書き込まれていますので、本プロジェクトによってデジタル化された資料を一括検索することも可能です。（多くのデジタル化事業でこの手法が採られているようです。）

National Library of Korea – Harvard-Yenching Library Korean rare book digitization project

本プロジェクトで撮影対象となった韓国古典籍資料は、すべてその書誌レコードがすでに HOLLIS 内に登録済みでした。このため、実際に **Cataloging** として行なわれた作業としては、イェンチン図書館の韓国目録担当者の手による、手動でのリンク情報・所蔵情報の編集のみにとどまっています。

本プロジェクトでは、当初、各資料の目次情報を作成してナビゲーションのひとつとして提供する予定でしたが、韓国古典籍資料とその内容に詳しいスタッフを雇用することが難しく、実現できずにいるそうです。

また、イェンチン図書館には本プロジェクトの対象資料以外にも、数多くの韓国古典籍資料や写真資料などが所蔵されています。そのデジタル化を実現させるために、現在その基金獲得を試みている、とのことでした。

2008 年 3 月 24 日(月曜日)

【39. 学内インフラとしての支援体制 – ハーバードの蔵書デジタル化事業】

前回(【38. 韓国古典籍コレクションデジタル化プロジェクト – ハーバードの蔵書デジタル化事業】)の例のように、ハーバードの各図書館で蔵書をデジタル化・ネット提供するプロジェクトが執り行なわれる場合、専門の部署・サービスによる支援体制が学内に整えられています。撮影やデータ作成など、専門家・技術者による作業の請負いはもちろんですが、どのような方針でプロジェクトを進行していけばよいか、適切な技術・手法・取扱いについてなど、専門的知識と経験を備えたスタッフによるアドバイスやサポートを受けることもできます。

このような支援体制や各部署・サービスは、ここ 10 年のうちに急速に整備されてきたものです。それ以前の蔵書デジタル事業は、個々の図書館がそれぞれのプロジェクトとして、その場ごとに行なわれていました。これを、できるだけ組織化・集中化させ、専門の部署に専門のスタッフを配置させることで、個々のプロジェクトに対して質の高いサポートを効率的に提供できるようになります。機材・技術だけでなく、人材・サービスや蓄積された知見など、プロジェクトをトータルでサポートしていますので、個々の図書館・プロジェクトの担当者は一からすべてを自分で準備する必要がなく、スムーズにプロジェクトをスタートさせることができます。また専門の部署が組織されることによって、学内での蔵書デジタル化事業が一過性のものとして終わるのではなく、必要な限りその支援体制が保証されることになります。彼らがこの支援体制を”インフラ”の形成として位置づけていることの意味が、そこにあるのではないかと思います。

● Imaging Service

前回ご紹介したように、Imaging Service はハーバード大学図書館内の資料撮影・デジタル画像作成についての専門部署です。蔵書の写真撮影、マイクロフィルム作成、デジタル画像作成や、そのための保存修復・目録・メディア変換などを行ないます。

Imaging Service

<http://hcl.harvard.edu/info/imaging/>

Imaging Service が組織され、蔵書デジタル化支援のための活動を始めたのは 1997 年。当時は人員・機材ともに小規模でしたが、インターネットでの蔵書公開が普及し始めた頃でもあり、数年と経たないうちに需要が急速に増え始めたそうです。現在では、撮影技術者・カタログナーなど約 40 人のスタッフを抱える大所帯となっています。

Widener Library の地下を改装して居を構えたのが 2000 年頃。現在では複数の暗室や撮影スタジオが専用スペースとして設けられています。撮影用カメラも、マイクロフィルム用、デジタルスキャン用、オーバーヘッドカメラなど様々なものが用意されていますし、書籍資料をスキャンするためのブックスキャナーも複数台そろっています。撮影スタジオも、通常的环境のスタジオに加えて、貴重書用に光量の微調整が可能なスタジオや、地図などの大型資料専門のスタジオなどが設けられており、様々な種類の資料に対

応しています。

近代出版物のデジタルスキャンでは、OCR によるテキストデータ作成もこの **Imaging Service** で行なわれています。専属のスタッフが PC 画面上で、ソフトによる読み取りと人の目による判断の両方でその作成を行なっていました。テキストデータのほか、インデックス、チャプター、ページなど、画像データの提供・管理用の情報もここで取り扱われています。

Imaging Service では、上記のような実作業の請負いばかりでなく、デジタル化プロジェクトそのものの計画や実際の進行について、専門スタッフによるアドバイスや提案、他部署との連絡調整というかたちでのサポートを行なっています。**Librarian for Collections Digitization** と呼ばれる専門のライブラリアンによる **Advisory Service** では、求めに応じて各図書館・プロジェクトの担当者との打ち合わせが行なわれ、例えば、撮影方法や画像仕様、公開方法はどのようにすべきか、資料保存部署からはどのようなサポートを受けるべきか、目録やメタデータの作成は誰がどのような方法で行なうのがよいか、などが提案されます。持ち込まれるプロジェクトには、前回の韓国古典籍プロジェクトのようにまとまった規模の資料を全ページスキャンするというものもありますし、出版物への図版掲載用に数冊から数箇所だけを選んで撮影する、といったものもあります。

● Preservation

Imaging Service は、前回ご紹介した **Weissman Preservation Center (WPC** : 貴重書専門の資料保存部署)や、以前【12. 年間 40,000 冊の本を修復する工房 – **Collections Conservation Lab**】でご紹介した **HCL Collections Conservation Laboratory** (貸出用一般図書担当の資料保存部署)とともに **Preservation & Imaging Department** というひとつのグループで活動しています。**Imaging Service** はもともと **WPC** 内の一部署としてスタートしたということでした。また、現在 **Imaging Service** のある **Widener Library** の地下には **HCL Collections Conservation Laboratory** が同居しており、密接な連携を保っています。**Imaging Service** による撮影・デジタル化の際は、常にこれらの部署の保存専門家によるアドバイスが入ることになります。

Library Preservation at Harvard

<http://preserve.harvard.edu/>

このように蔵書のデジタル化においては、資料保存活動及びその部署との関わりが非常に重要視されています。上記 web サイトを見ても”保存”と”撮影・デジタル化”とがコインの表裏のように考えられていることがわかります。「複製・媒体変換による蔵書の保存が、デジタル化の目的である」ということだけでなく、「撮影・デジタル化にあたってその資料が傷むことのないよう管理する、対策をとる」ということもその大きな理由のひとつです。

実際に蔵書デジタル化事業が行なわれる際には、通常、学内の保存部署の専門家によって、資料の保存状態のチェックが行なわれます。チェックの結果、適切な撮影方法や機材が提案されることもあれば、事前に修復処置が施されたり、状態によっては撮影が断念されることもあるようです。韓国古典籍のプロジ

エクトの例のように、撮影前に保存部署自身の手でいったん製本が解かれることもあり、その場合には撮影後に同じくその保存部署によって再製本されることになります。ページどうしがくっついてしまっているものをはがしてから撮影にかける、といったこともあるようです。

2つの保存部署と Imaging Service はともに、経験の蓄積に基づいたガイドラインやベストプラクティスなどを文書として公表したり、採用すべき外部のスタンダードなどをまとめるなどして、知見の共有を図っています。コンサルティングやアドバイザーとともに、資料を確実に守るための重要な専門的サービスです。

Principles for Reformatting Library and Archival Collections

<http://preserve.harvard.edu/guidelines/reformattingprinciples.html>

Guidance for Digitizing Images

<http://preserve.harvard.edu/guidelines/imagedig.html>

● Cataloging・Discovery

ハーバードの蔵書デジタル化事業では、“保存”に加えて、“目録”も不可欠のものとして考えられています。その資料についての情報を整理・登録し、利用者がそれらを見つけ出せる状態にしておかなければ、資料を保存する意味もデジタル化する意味もなくなってしまいますし、適切な目録がなければ資料自体も散逸してしまうおそれがあるからです。

ハーバードの図書館では以下のような Discovery（目録やその他の検索ツールなどによって利用者が資料を発見できる）のためのシステムやサービスが提供されています。

・ HOLLIS

<http://hollis.harvard.edu/>

図書館蔵書検索用データベースで、書籍資料のデジタル化データへのアクセスが可能。

・ VIA

<http://nrs.harvard.edu/urn-3:hul.eresource:viaxxxxx>

写真・絵画などのビジュアル資料についての目録データベース。デジタル化した画像があれば表示が可能。

・ OASIS

<http://nrs.harvard.edu/urn-3:hul.eresource:oasisxxx>

書類・書簡などの文書資料についての finding aids を集積し、検索やブラウジングを可能にしたデータベース。

Imaging Service 内には Bibliographic Services というセクションもあり、撮影する資料やそのマイクロフィルム、デジタル画像についての目録やメタデータを作成するという役目を持っています。Preservation Cataloger と呼ばれる人たちによって、例えば古い新聞資料をマイクロフィルム化するのであれば、どこ

からどこまでをひと区切りとするべきなのか、それらをどれだけのリールにどのように納めるのか、撮影に何コマ必要か、撮影終了後にその資料をどのように整理するのか、そして、それらを HOLLIS などの目録データベースにどう登録すべきであるのかが、撮影前にあらかじめ検討されるのです。

デジタル化された資料の目録について、どのシステムを採用するのか（HOLLIS か、VIA か、OASIS か、それとも自館 web サイトに自作するのか）、カタログिंगの実務を誰がどう行なうかなどについては、それぞれのプロジェクトによって異なります。各図書館のカタログガーが行なうこともあれば、Imaging Service のカタログガーが請負うこともあります。写真資料であれば WPC に写真専門のカタログガーがいますので、依頼することもできます。また、プロジェクトのためのカタログガーを期限付きで雇うこともあるようです。

● Digital Repository Service (DRS)

作成されたデジタル画像を格納し、ネットで利用できる状態にするのが、Digital Repository Service (DRS)です。ハーバード大学図書館の Office Information System(OIS)というシステム専門部署が管理・提供しており、ハーバード内の図書館やそのプロジェクトであれば必要に応じて使用することができます。例えば、Google Library Project によってスキャンされたハーバード蔵書のデジタル画像も、この DRS に格納されており、HOLLIS の検索結果を通してアクセスすることが可能です。

この DRS は”デジタル資料における HD（ハーバード図書館の郊外保存書庫）”を意図して構築されており、どのようなフォーマットの資料でも、どのような内容の資料でもこのサービスを利用することが可能です。ただし、「利用者に公開することを意図したデジタル資料でなければならない」、「著作権・知的所有権を持っているか、処理されていなければならない」、そして「データベースや web ページなど何らかのかたちで目録が提供されていなければならない」といった条件が付いています。このサービスが、単なるファイルの置き場所としてだけではなく、利用者からのアクセスを促進し保証するものとして機能していることがわかります。閲覧のためのインタフェースとして、IDS(Image Delivery Service、ビジュアル資料用)、PDS(Page Delivery Service、書籍資料用)、SDS(Streaming Delivery Service、音声データ用)などもあわせて提供されています。AMS(Access Management Service)では資料へのアクセスをコントロールすることができ、学内メンバーのみに公開するものや特定の部局や受講生のみにアクセスを許可するものについて、PINSYSTEM（参照：【29. どこでもハーバード – Web サービスと PIN System】）が適用されます。

この DRS では、デジタル資料は永年保存されなければならない、という方針のもと、必要に応じてマイグレーション（データを新しい形式に変換していく）も行なっています。こういったメンテナンスのため、年間 1G につき 20 ドルの使用料が課せられています。現物資料の保存・管理がただではないのと同じように、デジタル資料にも相応のコストと手間が必要である、という前提のもとでのサービスなのだろうと思われます。

●活用のためのサービス

上記のほかに、作成されたデジタル画像を活用し、利用者に効果的に提供するためのサービスを、いくつかご紹介します。

まずひとつめは、Templated Database(TED)と呼ばれるものです。これは、各図書館やライブラリアンで web 公開したいコレクションやその目録データがあるにもかかわらず、公開するための適当なシステムやデータベースを自前で構築することができない、という場合のためのシステムです。OIS があらかじめ構築してある”テンプレート”としてのデータベースシステムを用い、自館の持つ目録データを搭載して、独自のデータベースとして web で公開することができます。

例：Milman Parry Collection, MCZ Ernst Mayr Library

<http://nrs.harvard.edu/urn-3:hul.eresource:milparco>

Imaging-1

Expand All Collapse All Save ...

To save a record check the parts of the record you want to keep and click save.
Record Number: 1708

- - Parry
 - ☐ - Record
 - ◇ - Singer
 - Name: Šukoska, Slavka
 - Biographical Note: Age 38, born in Radožda (near Struga), a resident of Mišleševo for 18 years
literate.
 - ◇ - Singer
 - Name: Martinoska, Evsa
 - Biographical Note: Age 38, born in Mišleševo, illiterate.
 - ◇ Title: Devojče, more devojče (kolo)
 - ◇ - Date
 - Single Date: 1950-06-23
 - ◇ Collection Method: recorded
 - ◇ Collection: Lord Collection
 - ◇ Item Number: LNI25b
 - ◇ - Audio
 - Recording Number: spool 41 min. 3-6
 - Physical Medium: wire spool
 - ◇ Note: Biographical information is recorded in Lord's field notes.

各図書館やコレクションの特性・ニーズに応じて、フィールドなどをカスタマイズすることができますので、既存の HOLLIS や VIA などとはちがったデータベースを提供することができます。

ふたつめは、Virtual Collections。これは既存のデジタル画像をテーマなどによって再構築し、公開するためのシステムです。HOLLIS、VIA のカタログなどから対象資料の書誌やリンクを取り込み、検索・ブラウジング・表示のためのインタフェースを備えて、web で提供することができます。これによって、各分野専門のキュレーターやライブラリアンが、すでにある蔵書のデジタル画像や書誌を使って、ヴァーチャルなコレクションを構築し、分類や解題作成などで利用者へ効果的に提供できるようになります。

例：Dying Speeches and Bloody Murders

<http://broadsides.law.harvard.edu/>

DYING SPEECHES & BLOODY MURDERS: CRIME BROADSIDES

HARVARD LAW SCHOOL LIBRARY



[Help](#) | [HLSL Special Collections](#)

[Home](#)
[Introduction](#)
[About the Collection](#)
[Resources](#)
[FAQ](#)

[Keyword Search](#)
[Category Search](#)
[Browse Collection](#)
[Search Tips](#)

Dying Speeches and Bloody Murders

"Dying speeches" and "Bloody Murders" were terms used in eighteenth- and nineteenth-century Great Britain to refer to cheap broadsides, sold in the streets and at the place of execution, which reported sensational crimes or described public hangings. A typical example of this type of street literature is *An Account of the Trial, Execution, and Dying Behaviour of Henry Fauntleroy* who was executed in 1824 for the crime of forgery. A sheet of paper printed on only one side and measuring about 50 x 35 cm. (20 x 14 inches), the broadside contains illustrations (here, a portrait of Fauntleroy and a scene depicting the execution); a description of the accused's last hours; and a confession, often in the form of cautionary verse. One or more of these features are present in most examples of the genre.



The production of street literature was a specialty of only a few printers in London and the principal cities of the United Kingdom. In London the chief producers were the printing establishments of



Not the least fascinating was the original broadside—the Dying Speech, Bloody Murder, or Wonderful Wonder of Wonders, in its original tattered guise, as it was hawked through the streets, and sold for the cheap and easy price of one penny, though now worth the weight of that penny in gold.

Water Scott, *The Antiquary*, Vol. 1, p. 34 (1816)

魅力ある資料と、ライブラリアン・キュレーターによる専門性や編集能力があれば、自館に機材やシステム担当者が存在しなくても、情報発信を効果的に行なうことができる、というサービスです。

2008 年 3 月 28 日(金曜日)

【40. 専門家による資料診断 – Weissman Preservation Center】

かつて、HCL の Collections Conservation Lab についてご紹介しました（【12. 年間 40,000 冊の本を修復する工房 – Collections Conservation Lab】）。この Lab は一般的な貸出用図書の修復・保存処置を行っていますが、もうひとつの保存部署・Weissman Preservation Center では、特殊資料の修復・保存処置を担当しています。

Weissman Preservation Center

<http://preserve.harvard.edu/wpc.html>

ここでは古典籍や写本、写真など、希少で学術・歴史的価値を持つような特殊資料について、修復や保存のための処置を行なっています。書籍の conservator だけでなく、紙を専門とする conservator、写真専門の conservator など、それぞれの資料保存についての知識と技術を持った専門家が対応しています。一度その修復ラボを拝見したことがありますが、修復・保存処置に必要な設備が、伝統的なもの、最新の機器、ともにふんだんに用意されていました。人材面・技術面ともに非常に頼りがいのある専門部署であるという印象を受けました。

また、これも以前にご紹介したように（【38. 韓国古典籍コレクションデジタル化プロジェクト — ハーバードの蔵書デジタル化事業】）、蔵書デジタル化事業や展示、移動などに先立って、各図書館の所蔵する特殊資料の保存状態・破損状態を査定したり、相談にのってアドバイスを出したりといったことも、この Weissman Preservation Center の重要な役割のひとつです。1 年間の研修を通して学内のいろいろなライブラリアンの方に話をうかがう機会がありましたが、何かにつけてこの部署や conservator についての話題が登場し、図書館活動のあらゆる場面で頼りにされている存在なのだろうという印象を受けました。

昨年秋、イェンチン図書館で所蔵していた日本の資料・竹久夢二詩画集（昭和 16 年）を、このセンターの paper conservator に依頼して見てもらったことがあります。多色刷り版画資料 10 数枚を紙ケースに納めたもので、資料自体に大きな傷みはなかったのですが、ケースや台紙などの傷み・変色が目立つものでした。

後日提出されたこの資料の診断結果報告書は、「Description」「Condition」「Proposed Treatment」の 3 部構成となっていました。「Description」では資料そのものについて記述され、多色刷りの版画であるということやそれぞれの内容のほか、紙の色、紙質、分析と化学的なテストによる繊維の原料・成分などが明らかにされています。台紙や紙ケースなどの付属物も同様です。次いで「Condition」では、それぞれがどのような状態にあるかが分析の上で報告されています。例えば、版画作品自体の状態は良いが、何番の台紙がひどく変色してしまっている。これは外側がフォルダに覆われていて直接接していたためである、といった具合です。そして、これら「Description」「Condition」にもとづき、当部署で行なう最適な処置はどのようなものかが「Proposed Treatment」として提示されます。今回の例では、版画作品と台

紙を脱イオン化純水ではがすことができるかどうかをテストする。できるとわかれば、接着剤を除去し、再度和紙とでんぷん糊で台紙を付ける、といったようなことが処置案として記されていました。

古典籍などの特殊資料は、破損・汚損など、一度被害を受けると元の状態を取り戻すのは非常に困難なものになってしまいます。それらを守るためには、たんに専門の部署があって担当者がいるというだけでなく、科学的根拠にもとづいた処置ができる専門家が専属の **conservator** として必要なのだらうと思います。

2008 年 3 月 28 日(金曜日)

【41. 手軽に情報共有・情報発信 - iSite】

ハーバードでライブラリアンのみなさんの仕事振りを拝見していて、日本での仕事の進め方と際立ってちがうと感じることのひとつが、お互いの持っている情報を上手に共有し、柔軟に活用していく、という姿勢です。勉強会による情報共有（【8. 日米”勉強会”事情】）や e-resource に関する情報のマネジメント（【36. オンライン資料を効率的に管理する — E-Resource Management】）などの事例をこれまでご紹介しましたが、今回は iSite というツールを使った、web サイトによる情報共有・情報発信についてご紹介します。

iSites

<http://isites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=icommons&pageid=icb.page11690>

iSites は、ブラウザ上で操作して web サイトを作成することができる、web ベースのコンテンツマネジメントシステムです。HTML に知識のない人や、エディタを持っていない人でも、一定程度のレイアウト、デザインと機能を持った web サイトを自作することができます。そもそもは、授業のための web サイトとして、教員から学生に資料や講義情報を提供することができるように、というツールですが、授業用だけでなく、研究グループ用サイトを作成したり、事務員が業務用 web サイトを構築することも可能となっています。

ハーバードの各図書館やライブラリアン、及びそのグループの利用も多く、公開用・限定用のリサーチガイドとして利用者向けのコンテンツを作成したり、業務用 Web サイトを構築して情報を共有・公開したりといった活用がなされています。ハーバードには複数の図書館同士によるプロジェクトや、全学レベルで連携しあっている委員会・ワーキンググループの類が非常に多く、それらグループにおけるメンバー同士の情報共有や、他のライブラリアンへの情報公開といったことに、この iSite が大いに活用されています。

Science Libraries @ Harvard

<http://isites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k21001>

fig41-1

SCIENCE LIBRARIES @ HARVARD

Start Your Research Here

Science Libraries
Electronic Resources
Research Guides
Style Guides & Citation Management
News Feeds
Fellowships, Internships, & Funding
Science Associations & Organizations
About This Site

Start Your Research Here

Fundamental Resources
Start your research with the following resources:

Encyclopedia of Life Sciences
General background articles on life science subjects.

Combined Chemical Dictionary
Database of information on chemical substances (download plug-in for structure searching).

CRC Handbook of Chemistry and Physics
Tables of physical, chemical, and other scientific data.

Web of Science
Primary journal articles for all science fields, 1900-present.

PubMed
Primary journal articles in medicine and life sciences, 1950-present.

HOLLIS
Harvard's library catalog: find books and journals here.

Search the Science Libraries @ Harvard Site

[Advanced Search](#) [Search Tips](#)

Search for:

Sort by: ☒ relevance ☐ date

Questions?
[Ask a question.](#) Have a question that's not answered by this site?

Comments or Suggestions?
Did we leave something out? [We want to hear from you.](#)

Selected Resources By Subject

Bibliographic Standards Working Group

<http://isites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k26185>

fig41-2

Bibliographic Standards Working Group

Hi, Tashinori Egami [logout](#)

Standards

Members & Charge
Minutes
Cataloging Discussion Group
Links
Search
Working Group files

Standards

Harvard University Library Bibliographic Standards

Harvard University Library Bibliographic Standards
revised for terminology and standards, July 2006

Additional documents:

SUBJECTS

- [Proposing New Subject Headings, Subdivisions and References for Library of Congress Subject Headings via Subject Authority Cooperative Program \(SACO\)](#), revised June 2004
- [Form/Genre Added Entries](#), revised November 2005
- [Harvard Local Subject Headings Not Compatible with Library of Congress Subject Headings](#), January 6, 2005

AUTHORITY RECORDS

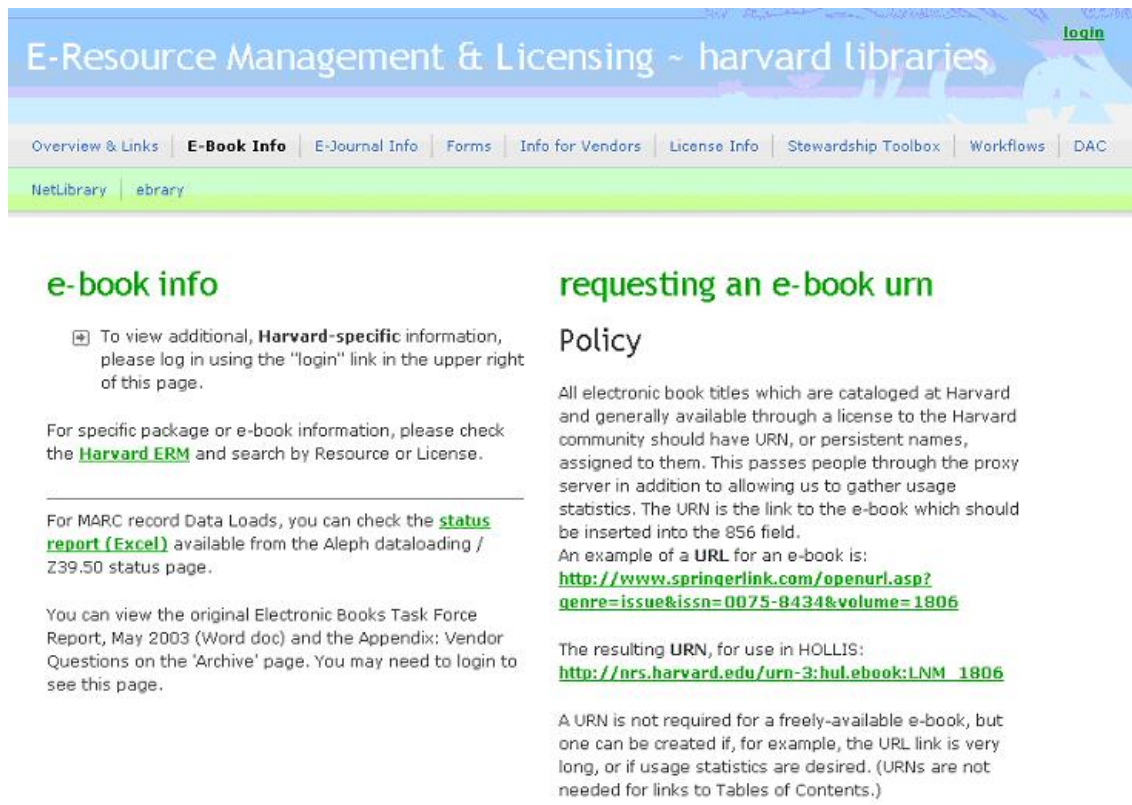
- [Authority Records for Names, Series and Uniform Titles in Aleph](#), July 2004
- [Authority Records for Geographic Headings](#), January 6, 2005

SERIES

- [Recommendation concerning series control at Harvard](#), presented to and accepted by the ULC in December 2006.
- [Guidelines for handling unnumbered series](#) (Draft), to be presented at the Cataloging Discussion Group meeting of March 2008

NON-LATIN SCRIPTS and FOREIGN LANGUAGE BIBLIOGRAPHIC RECORDS

fig41-3



web ページ作成の経験がない人でも、自分自身の手で自由にサイトを構成し、情報発信を手軽に行なうことができるのが特徴です。また、PINSYSTEM（【29. どこでもハーバード — Web サービスと PIN System】）を利用して、一般公開できない情報や、特定少数のメンバーだけで共有したい情報に対してアクセスコントロールを行なうこともできます。

さらに、特定の部局のサーバを間借りしたり、システム担当者に手間を依頼したりといったことが必要ない、というのもこのツールの大きな利点です。複数館または全学レベルでの連携によるグループであっても、web サイトの置き場や管理者について交渉や捻出の必要がなく、比較的スムーズにスタートできることになります。

2008 年 3 月 28 日(金曜日)

【42. 次世代 OPAC へ向けて – Discovery and Metadata Coordinating Committee】

2007 年秋、ハーバード図書館を統括する University Library Council のもとに、「Discovery and Metadata Coordinating Committee」が新しく発足しました。これは、蔵書検索用 OPAC など、ハーバードにおける discovery system（＝利用者が本や資料を検索し、発見するためのデータベース・システム）や cataloging のあり方を、時代に合わせた新しいものに進化させ、再構築させることを目的としています。

情報技術、学術情報環境の目まぐるしい発展や、web サービスのあり方そのものの変化に伴い、図書館が提供する蔵書検索用データベース・OPAC もまた進化させていかなければなりません。技術革新と利用者ニーズに見合った機能、Google や Amazon やはてななど、他の web サービスがすでに実現している機能を備えたものとして、各国の図書館で現在急ピッチで構築されつつあるのが、いわゆる「次世代 OPAC」です。例えば「ファセット」「FRBR 化」「ソーシャルタグ」といった機能やサービスが考えられています。

ファセットの例：OCLC WorldCat (<http://worldcat.org/>)

検索結果を分析して、しぼりこみ用のキーワードを提示する

fig42-1

The screenshot shows the OCLC WorldCat search results page for the query 'turkey'. The page is titled 'Find in a Library with WorldCat®'. The search results are displayed as a list of items, with facets on the left side. The facets are categorized into Author, Content, and Format. Red arrows point from the word 'Facets' to these categories. The search results list includes items such as 'Turkey' by Tamra Orr, 'Turkey' by Sean Sheehan, 'Crescent and star : Turkey between two worlds' by Stephen Kinzer, 'Turkey' by United States. Central Intelligence Agency, 'The turkey : an American story' by Andrew F. Smith, and 'The mechanism of catastrophe : the Turkish pogrom of September 6-7, 1955, and the destruction of the'.

Search for items in libraries:
turkey Search
Advanced Search

Search results for 'turkey' Sort by: Relevance

Results 1-10 of about 148,922 (.40 seconds)

Refine Your Search

Author
Turkey (4153)
Abdullah Freres (1012)
United States (907)
Devlet İstatistik E... (628)
Great Britain (509)
Show more ...

Content
History & Auxiliary... (31586)
Business & Economics (12787)
Art & Architecture (5453)
Law (5445)
Language, Linguistic... (4883)
Show more ...

Format
Book (126575)
Visual Material (5832)
Serial Publication (4979)
Sound Recording (4844)
Internet Resource (3580)
Show more ...

1. **Turkey**
by Tamra Orr
Language: English Type: Book : Elementary and junior high school
Publisher: New York : Children's Press, 2003.

2. **Turkey**
by Sean Sheehan
Language: English Type: Book : Elementary and junior high school Internet Resource
Publisher: Tarrytown, NY : Marshall Cavendish, 2004.

3. **Crescent and star : Turkey between two worlds**
by Stephen Kinzer
Language: English Type: Book
Publisher: New York : Farrar, Straus and Giroux, 2001.

4. **Turkey.**
by United States. Central Intelligence Agency.
Language: English Type: Map
Publisher: [Washington, D.C. : Central Intelligence Agency, 2006]

5. **The turkey : an American story**
by Andrew F. Smith
Language: English Type: Book Internet Resource
Publisher: Chicago : University of Illinois Press, ©2008.

6. **The mechanism of catastrophe : the Turkish pogrom of September 6-7, 1955, and the destruction of the**

Facets

FRBR 化の例 : OCLC WorldCat (<http://worldcat.org/>)

同じ作品・著作の異なる版をひとまとめにする

fig42-2

The screenshot shows the OCLC WorldCat website interface. At the top, there's a search bar with the text "Search for items: 6299892" and a "Search" button. Below the search bar, the main title of the record is "On the origin of the species by means of natural selection : or, The preservation of favoured races in the struggle for life" by Charles Darwin. The record includes details such as Type: Book, Language: English, Publisher: London : J. Murray, 1859, and OCLC: 6299892. There are also links for "Related Subjects", "Editions", and "Citations". Below this, there are four sections: "Get it" (with links to "Find in other WorldCat libraries" and "Buy This Item"), "Save it" (with a link to "Add This Page to Favorites" and a "Save" button), "Add to it" (with links to "Review this Item" and "Edit Public Notes"), and "Share it" (with a link to "Link to this Page" and social media icons). At the bottom, there are tabs for "Libraries", "Details", "Subjects", "Editions", and "Reviews". The "Editions" tab is selected, showing a list of editions. The first edition is "The origin of species by means of natural selection; or, The preservation of favored races in the struggle for life and the descent of man and selection in relation to sex." by Charles Darwin, published by New York, Modern library [1936]. The second edition is "The origin of species by means of natural selection. The descent of man and selection in relation to sex." by Charles Darwin, published by New York, Modern library [1936]. On the right side, there is a "Buy This Item" section with a search bar and a "Find in a Library anytime" section with a link to "Learn more and download".

ソーシャルタグの例 : 国立国会図書館 PORTA (<http://porta.ndl.go.jp/portal/>)

ユーザが自分でキーワードを登録し、お互いに参照できる

fig42-3

国立国会図書館
デジタルアーカイブポータル
National Diet Library Digital Archive Portal

私の みんなの ブックマーク (図書館 タグを選択中)

●キーワードで検索: 検索

●タグ一覧から参照

●分類(NDC)から参照

すべて	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学
11 件	2 件	0 件	1 件	1 件	0 件

タイトル: RSS(RDF Site Summary)を活用した新たな図書館サービスの展開--OPAC2.0へ向けて 3users
NDL雑誌記事索引
コメント: [次世代OPAC]
タグ: 図書館 次世代OPAC
登録日付: 2008/03/24

タイトル: 書物の日米関係リテラシー史に向けて 和田敦彦 著 The Japan-US relationship viewed fi
NDL蔵書目録(和図書・和雑誌)
コメント: [アメリカ]における[日本研究]と[図書館]の[歴史]。
分類(NDC): 総記
タグ: 日本研究 図書館 歴史 アメリカ
登録日付: 2008/03/24

タイトル: E313 (No.56) - 公共図書館に求められる対応-英国下院の報告書 1user
カレントアウェアネス
コメント: [英国][公共図書館]
分類(NDC): 産業

ハーバードの図書館でもこの“次世代 OPAC”の実現が喫緊の課題とされています。その取り組みの一環として発足したのが Discovery and Metadata Coordinating Committee です。この委員会の下には、Aleph（図書館用業務システム・目録システム）の委員会、書誌標準のためのワーキンググループ、カタログのディスカッショングループ、VIA（ビジュアル資料用目録データベース）のワーキンググループなど、目録・検索性データベースに関わるたくさんのグループが含まれています。Discovery and Metadata Coordinating Committee は、これら各グループ同士の調整やコミュニケーション整備を行ないながら、次世代 OPAC をはじめとする将来的な情報サービス・検索システムと、それを支える目録システムの構築を舵取りしていくことになります。

Discovery and Metadata Coordinating Committee の前身は、2006 年秋から 1 年間活動していた Task Group on Discovery and Metadata というタスクグループでした。

Task Group on Discovery and Metadata

<http://isites.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k13676&pageid=icb.page74966>

このタスクグループでは、discovery system や cataloging のあるべき機能とあり方について、キーとなる情報技術や内外の動向をレビューし、ハーバードにおける現実的かつ具体的なアクションについて提案する、ということが求められていました。多数のテーマを設定し、その概要や背景・具体例を調査し、それらをどう評価するか、優先して採用すべきはどれかなどをグループ内で検討した結果、提示されたのが、2007 年 9 月に発表された最終報告書です。

最終報告書 (Task Group Final Report)

http://isites.harvard.edu/fs/docs/icb.topic117213.files/TGDM_final_report_Sept_07.pdf

添付資料

http://isites.harvard.edu/fs/docs/icb.topic117213.files/TGDM_final_report_Appendices.pdf

この報告書は 3 部構成となっていて、今後数年注視しておくべき技術や考え方のレビュー、それにもとづく見解、今後とるべき行動などが示されています。レビューでは、先に述べたファセットやタグのほか、各目録標準に対する評価、データをいかに多様化させるか、ユーザ自身のメタデータ構築への参加など、様々なテーマが概説されています。そしてそれらレビューにもとづいた見解では、OPAC のリプレイスは真っ先に行なわなければならない、外部リソースに頼ってでも書誌レコードを成長させなければならない、といった勧告がなされる一方で、目録や書誌レコードそのものの構造を変えるといったことに着手すべきではないというような現実的な姿勢も提示されています。また、今後の行動についても、あまりにも変化の激しい環境下で長期的手段の検討は得策ではない、との考えから、次年度において当面とるべき行動を示すにとどまっています。

これらの取り組みと報告は、実際に次世代 OPAC 等の構築にとりかかるためだけではなく、学内全図書館やライブラリアンに対して問題意識を喚起する、という意味合いもあったようです。実際、この最終報告書についての学内説明会が、12 月と 2 月の 2 度行なわれました。

そしてこの報告書での提案にもとづき、学内の関連する各部署・委員会・グループの活動を調整しながら、その実現へ向けて取り組んでいるのが、現在の Discovery and Metadata Coordinating Committee である、ということになります。

図書館のユーザを含め、我々は、日々進化する情報環境・情報サービスに囲まれて暮らしています。その反面、旧来の姿のままである図書館目録へのユーザの不満は募る一方ということになってしまいます。次世代 OPAC や新しい web サービスのあり方へ向けての、柔軟かつ敏捷な取り組みが、いま、求められています。

2008 年 3 月 28 日(金曜日)

【43. 研修終了にあたって】

1 年に及ぶハーバード大学での滞在研修も、3 月で終了になります。

この 1 年を通して感じたことのひとつは、図書館の運営・サービスの方法・考え方にはじつにさまざまなものがある、ということでした。あって当然と思われるかもしれませんが、実際、日本の図書館運営はどうしても横並びになってしまいがちです。対してアメリカでは、同じ大学図書館であっても、蔵書の傾向も、サービス対象者も、学生のニーズや研究者の動向も、それぞれの大学によってまったく異なりまして、それに応じて、資料の取り扱いやサービス方針、図書館というものがどうあるべきかという考え方も千差万別なものになってきます。同じハーバード大学内でありながら、利用のルールやポリシー、採用するシステムが違う、ということも珍しくはありません。

それは、「他所がこれをやっているから、うちも」「誰それがそう言っているから、その通りに」というような姿勢ではなく、各館・各ライブラリアンがその事情や条件にもとづいて自主的に判断した結果なのだろうと思います。もちろん、それぞれの方法・考え方にメリットもデメリットもあるのでしょうし、適・不適、効果的・非効果的の差もあって当然だとは思いますが、これだけ多様な方法・考え方での図書館運営・サービスが現に行なわれている様子を拝見して、決してどれが”正解”と言えるわけではないし、とるべき道もひとつではないんだ、ということを実感できました。

もうひとつは、アメリカの大学図書館での運営・サービスの方法やシステムを、そのままのかたちで日本に持って帰って適用しようとするやり方は、決して好ましくはない、ということです。アメリカをはじめ海外の大学図書館には多くの進んだサービスや専門性の高い運営体制があります。私自身もそれを見してきましたし、アメリカを訪れる他の図書館員のみなさんもたくさんそれをご覧になってきたことと思います。ですが、その見たまま、聞いたままのかたちのものを、そのまま日本で採用しようとしたり、日本の図書館と比較したりということが、果たしてどれだけ有効なものであるかについては、疑問が残ります。それらサービスや運営体制、システムといったものは、それぞれの大学、社会が持つ環境や背景のもとに成り立っているからです。

24 時間開館のラーニング・コモンズが成功している UMass Amherst 校には、学部生が寮生活を義務付けられており、かつキャンパス周辺にパブリックな施設がほとんどない、という事情があります。図書館内にカフェを併設することの是非を考えるにあたっては、アメリカでそれが成功し流行しているからという現象だけで判断するのではなく、資料保存に対する取り組み、学生に課せられるグループ課題とディスカッションのあり方、ルール違反に対する処罰、さらには食習慣や衛生観念に至るまで、さまざまな日米間の”違い”を理解しておく必要があります。そして、図書館に専門職が必要とはいっても、社会全体における雇用や求職・就職のあり方の違いを無視して、図書館の人事制度だけを比較したり真似ようとしたりすることには無理があるでしょう。重要なのは制度ではなく、専門職を確保することによって利用者へ何を保証しているのか、資料をどう守っているのか、のほうだと思います。

表に見えている図書館運営・サービスの有り様だけを切り取って、日本に直輸入しても、真に根付くことは難しいでしょうし、根本的な問題解決には寄与できません。それを成り立たせている環境や背景といったものを考慮しつつ、何を必要とし、どんな信念に基づいて、何を実現させるためにそれを行なっているかを理解することができれば、同じことの実現のために日本ではどう動けばよいかが、より適切に判断できるように思います。

今回の研修では、そういった多様性や、それぞれの背景にあるものについて、できるだけ目を向けるようにしてきたつもりです。みなさんにはどのように感じられたでしょうか。

1年間お世話になったハーバード・イェンチン図書館の皆様、訪問・見学に快く応じてくださった各図書館・機関の皆様、このような機会を与えてくださった京都大学附属図書館の皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。どうもありがとうございました。